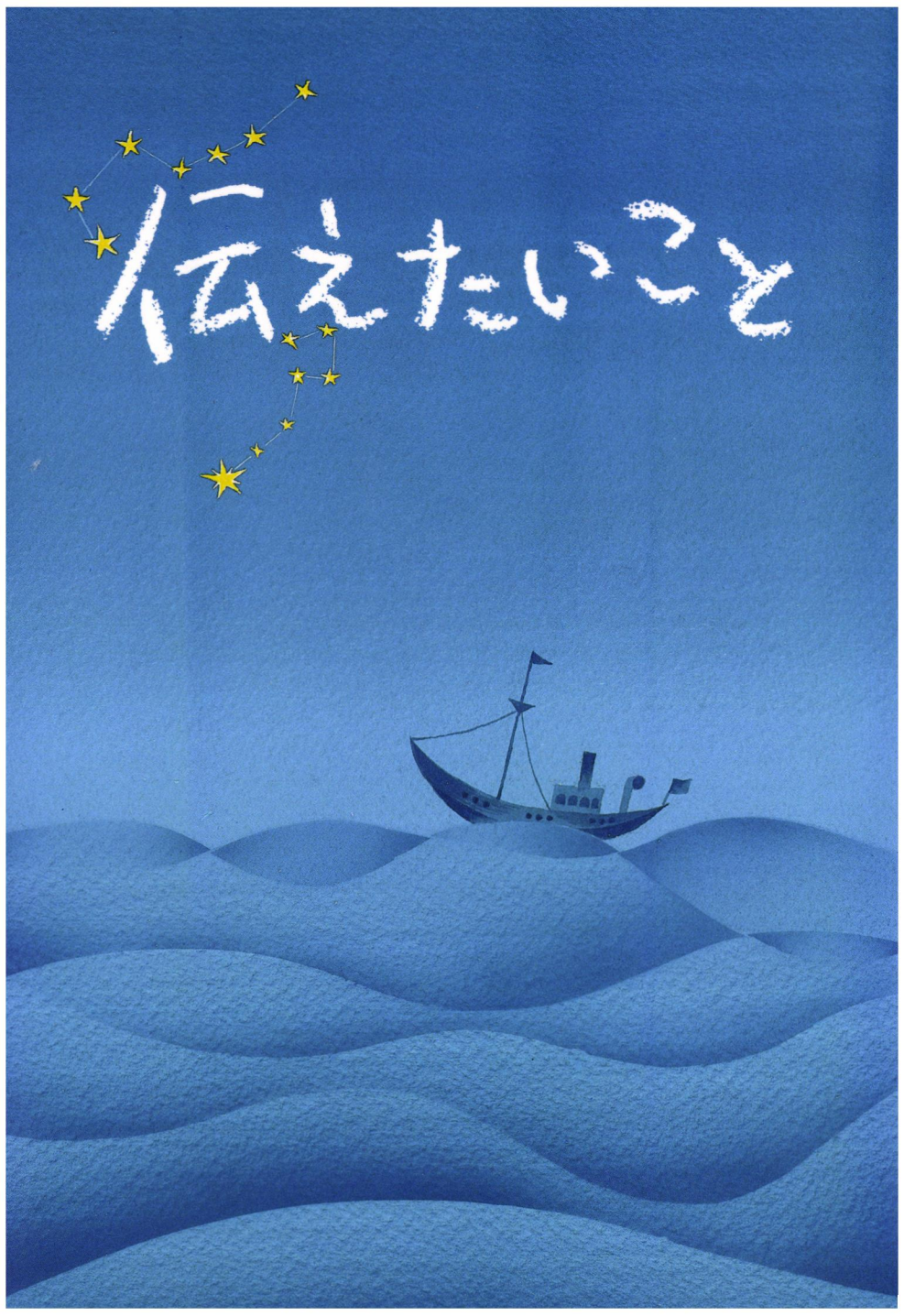
伝えたいこと



伝えたいこと

装幀＝西島伊三雄

発刊のご挨拶

髙藤建設株式会社
代表取締役社長　髙　藤　昌　和

このたび、弊社四十五周年の記念事業として『伝えたいこと』を発刊いたしました。本書刊行に当たり執筆者のみなさまには絶大なご協力をいただきましたことを心から感謝申しあげます。

近年、我が国の経済発展はめざましいものがあり、物質的な豊かさは素晴らしい繁栄をなしとげたといえます。

しかし、その反面、人間の本質的な問題である精神（心）や、我が国古来の世界に誇るべき文化、伝統、風習、精神構造の良い面までも失いつつあります。さらに人間のエゴと自我が環境問題で地球の温暖化、二酸化炭素、ダイオキシン、砂漠化、酸性雨等々、人類の存在さえも危うくする状態に到らしめております。

二十一世紀が人類にとって幸福な世紀であるのか？　破滅の道を進むのか？　まさに大きな選択の岐路に直面しています。

物質中心、経済中心の考え方から人間中心の未来を目指すべき時を迎えておりますが、皆さまの貴重なご教訓は二十一世紀をになう青少年にとって、人生の生き方の大きな指針となるこ

とを確信しています。

新しい時代が、人類にとって真に幸福な、平和な時代であることを念じ、併せて弊社四十五周年にあたり賜った数多くのご恩に感謝をこめて本書の発刊をいたしました。

発刊に当たり、編集は加治屋知暁氏に、表紙は西島伊三雄氏に心のこもった協力をいただき感謝申し上げます。

おめでとう創立四十五周年

元参議院議員

柳　田　桃太郎

高藤建設が四十五周年を迎えられ、隆々と発展しておられることは同慶の至りである。

高藤建設は、戦後先代高藤國太郎氏が釜山で鍛え上げたつぶ選りの精鋭を連れて引揚げ、門司区でささやかな工務店を開業したところから始まった。

高藤さんとの交わりは、私が門司市長をしていた頃の昭和二十六年からであった。一度、市の建設を請負うと、この男だ、と信用を深める誠意と実行力とを具(そな)えていた。

心だに誠の道に叶ひなば
　　祈らずとても　神や護らむ

古歌の通り、仕事に趣味に、まごころを尽して立ち向っていた人と思う。

ご他界の二年も前から、私に葬儀委員長を頼むと早々に死ぬ用意までしていたが、高藤さんは、世の為、人の為、仕事を離れても誠心誠意努力して行くことを心掛けていた人であり、高藤建設は、今後もその伝統を引継いで成長する会社であってほしい。

おめでとう創立四十五周年

福岡証券取引所
理事長　下　村　　史

私は金融界から証券界へ、長期に亘る現役者として数多くの経営者の世代交替を看てきているが、カリスマ的創業者を世襲する二代目の立場はなかなか微妙でむつかしい。世代交替といっても、先代の院政が続いている場合もあり、自分をゆりかごの中からみとってきた宿老たちへの気兼ねもあろうし、とは言いながら初陣の功名を早く挙げたいとの功名心が勃々としているこの苛立ちをどうすればよいのであろうか。その解答はさして難しくはない。言うなれば簡単、明快である。己を空しくして社業に専念すればよいのである。

先代が裸一貫、徒手空拳、風雪の荒野をただ独り七転八起して今日を築き上げた労苦とは天地の差がある。営業路線は既に一応敷かれている。取引先は整然と拓かれている。社内組織も滑らかに作動している。ただ問題は自分自身を社の内部に於て如何に位置づけるか、如何に信望をかちとるかである。社員は使用人ではない。経営の協力者であるということを忘れてはならない。高藤建設万歳！

目　次

発刊のご挨拶……3
祝　辞……柳田桃太郎……5
祝　辞……下村　史……7
世話しられても恩に着ぬ……間　茂樹……16
欠乏で知るありがたさ……青山政雄……18
縁ありて花開き、恩ありて実を結ぶ……赤松重明……20
心の豊かさを取り戻そう……新木文雄……22
頑張れ、あなたは一人ではない……石藏康作……24
教育勅語……磯部重雄……26
賢いお母さんになってね……今井宜子……28
二太郎……今田　章……30
通勤途上での雑感……今冨勇雄……32
己を知れ……入谷拓次郎……34
反　省……碓井三子男……36
望みなさい、叶えられます……江頭匡一……38

音をみる……大石　潤……40
しずかに思えば……大木二郎……42
善隣友好を平和の礎石に……大迫　忍……44
かとけの違い……大澤　昂……46
心に邪なくほんものを……大西利昌……48
宗教性の自覚が大切……合馬又彦……50
姿勢を正し天命と諦める……岡野正実……52
背中を見せて育てよ……岡本康夫……54
アリーテ姫……緒方世喜子……56
生かされている……尾﨑　進……58
温故知新……小野喜孝……60
合　掌……香川孝志……62
葦だから八十点で……加治屋知暁……64
ゴルフと人生……片岸修次……66
米国を軽く見るな……金子太郎……68
戦争で失ったものと得たもの……川嵜清澄……70

子供の教育は先ず家庭から……川崎安太……72
本当に伝へたいものは何か……木内信胤……74
時の流れと父の一言……菊池功……76
禍を転じて福となす……北田光男……78
矛盾を私は課題と考えたい……木村照彦……80
本心に従え……工藤憲男……82
教えのひと言……倉光晴爾……84
愛のある心の豊かさを……栗岡博良……86
子供のように夢を……クロード バスチ……88
仕事ができんとお茶が貰えん……古浦誠一……90
五省（ごせい）の心……古賀圭二……92
自らの心を省みて……小早川明徳……94
貴重な体験……近藤貢……96
平和を守る有効な方策を……後藤達太……98
贐（はなむけ）の言葉……後藤豊彦……100
意志は力なり……榊原重男……102

小さな親切を心掛けよう……迫田　太……104
北極星を胸に……四島　司……106
天は自ら助くる者を助く……柴田　宰……108
ネアカのびのび　へこたれず……関口　宗利……110
人間信頼……高田賢一郎……112
受けた恩は石に刻め、かけた情は水に流せ……髙藤昌和……114
宮島大八（詠士）先生……竹村茂昭……116
約束を守る、守らせよう……竹村重利……118
一本のナイフ……田中辰治……120
人生は努力し、そして楽しく……田中道人……122
心が問われる時に……田中丸善昌……124
毎日が初日……谷　伍平……126
狭き門……玉井信一……128
前人樹を植えれば、後人涼を得る……千本道雄……130
「粘り」の精神……佃　亮二……132
日本のアイデンティティを大切に……辻　長英……134

易水寒し……鶴丸大輔……136
歴史を正しく見つめよう……寺田晁……138
恭　倹……出口次年……140
耐え得る心を……富山耕一……142
誠意を尽くし困難を避けず……友貞睦夫……144
平和への祈り……友添政行……146
忘れえぬことば……中島國廣……148
「私も利己主義者（エゴイスト）である」と自覚しよう……中谷哲郎……150
現状にとらわれず、先を見て行動すること……信沢隆……152
私の雑感……芳賀晟寿……154
苦難こそ我が人生……橋本榮……156
地球の危機に仏の心で……長谷川裕一……158
ある社長と社員のこと……原俊之……160
信　念……原田コト……162
得意淡然　失意泰然……平田満夫……164
何よりもりっぱな親に……福元喜久雄……166

三つの條件……福山庸治……168
人生余熱あり—俳句との出会い……藤川欣佐……170
「国際化」と私たちの生活……藤本新二……172
ロマンと勇気、真の喜びをつかめ……二田義松……174
表現出来るだけの誠意を養おう……待鳥初民……176
海への期待……松井薫……178
心映え……松本攻……180
「三つの心」を大切に……三島正一……182
ヤマを掛ける……水野勲……184
一生懸命に生きる……溝口昇……186
貞節という美徳の復権を！—ある反動教師の日記—……御手洗博……188
トコトン追求してみろ……三井孝昭……190
真実を語る勇気をもとう……皆川節夫……192
薩摩の教訓……宮田則子……194
講の者を大事にせよ……村谷正隆……196
ことばと心—人を育てるもの……安武満榮……198

因果律とは……山下真理恵……200
大いなる神の存在を知れ……山本敬一郎……202
商人としての旅立ち……山本隆造……204
失敗を恐れるな……百合野保文……206
言葉は両刃の剣……吉田和彦……208
思いやりの心と文化的視野……吉田一芳……210
価値観と良識……吉田敬一……212
成せばなる……吉原謹三……214
運命を分けた項羽と劉邦……吉村喜好……216
適者生存の法則……吉村慶元……218
楽に生きよう……渡辺守将……220
あとがき……222

世話しられても恩に着ぬ

間　茂樹

平成二年七月の歌舞伎座は猿之助一座で、「近頃河原の達引―堀川の段」を出している。岡本綺堂翁はこの堀川を「大近松以後の世話浄瑠璃としてこれ程自然に描かれているものは他に甚だ少ない」と口を極めて賞賛しておられるが、私も同感で山城少掾が鶴沢清六の三味線で語った堀川のテープは私の出張旅行の必需品となっている。

呉服商伝兵衛は遊女お俊とかねて深い仲であったが、お俊のことが原因で伝兵衛は誤って人を殺してしまう。お俊は堀川で老母を養っている兄与次郎の家に身を寄せる。そこへ伝兵衛がお俊を尋ねてしのんで来る。伝兵衛が迷惑をかけてすまなかった。もう私のことは忘れてくれ、これで別れようと切り出した時、お俊はわっと泣き出して「そりゃ聞えませぬ、伝兵衛さん」と有名なクドキで真情を訴える。「お言葉無理とは思わねど、そも逢いかかるはじめより、末の末まで言いかわし、互いに胸を明かし合い、何の遠慮もないしようの、世話しられても恩に着ぬ、ほんの女夫（めおと）と思うもの」。このお俊のくどきは名文として有名で「たくまずしてその言わんとするところを自由自在に言いつくしている」と綺堂翁も賞嘆。特に「世話しられても恩に着ぬ」、を浄瑠璃で聴いていても涙がこぼれるほど、うれしい文句と言っておられる。

伝兵衛があらわれる前、老母と兄がお俊の身を案じて伝兵衛と縁を切ってしまえとすすめた

時「お二人のお言葉、よう合点しました。ことにまた伝兵衛さん、つい一通りで逢うた客、深い訳でもないわいなぁ。しかし勤めの習いにて人の落ち目を見捨てるも、廓の恥辱とするわいなぁ」――この「世話しられても恩に着ぬ」と「廓の恥辱とするわいなぁ」がこの堀川の眼目である。終幕は老母と兄が得心してお俊伝兵衛を死出の旅路へ送り出す哀切きわまりない幕切れである。

開幕前、三階席は男女中学生で占められ、喧噪を極めていたが、幕があき舞台は堀川の貧しい佗び住まい。やがて古曲「鳥辺山」が老母により、さりげなく情をこめて語られる頃にはシーンと静まり返り、演じる者、観る者、心は完全に一つにとけ合っていた。私は良い芸術の前には新人類も化石人類もないんだなぁと今更のように痛感した。私は、この堀川の一段をそのまま若い人達に伝えたい言葉としたい。

間　茂　樹　大正13年2月生　福岡県出身
▽昭和22年慶応義塾大学経済学部卒、秀巧社印刷入社、23年専務取締役、43年代表取締役社長就任、61年代表取締役会長、現在に至る
＜好きな言葉＞「心は楽しく仕事は厳しく」

欠乏で知るありがたさ

青山政雄

明治、大正、昭和、そして平成と、四つの時代を生きて八十八歳を迎えました。

思うこと、考えること、随分あるようでも、「これが良かった」とか「これが悪かった」とか、結論づけることは、未だ出来ません。

靖国神社の参拝がいけないとか、日の丸の旗を掲揚してはいけないとか、世の中が、大変にむずかしくなってきたのだということは、実感としても判ります。しかし単純に考えて、日本人が日本の国旗である日の丸に対して、何故このようにきびしい言葉をなげつけるのか、私には理解出来ません。

靖国神社の参拝の賛否もあります。自分の意思でなく、しかも母ひとり、子ひとりの子供が戦場に行き、そして戦死し、その大切な子供をおまつりしてある靖国神社にお参りしてはいけない、と言う日本人のいることは、その母親にとってどんなに悲しいことなのでしょうか。

平和を愛して、戦いを否定しながら、戦場で沢山の人が亡くなっています。この人たちの無念さが、そして真心が今日の日本を支えていると考えることは許されぬことなのでしょうか。

昭和二十年の夏のはじめ、日本の敗戦もおぼろげながら判りかけていた頃、「自分達の死ぬことによって、もしも日本に静かな平和な時代が来るのなら、決して無駄死にではないと信じ

ています」ときっぱり言って南の海に散って行った若者のつぶらな、清らかな瞳を忘れえぬ限り、日の丸の旗、そして靖国のお社を否定することは、私には出来ません。

世界の流れも大きく変わり、人間の一人ひとりが自分達の幸福を考えられる時代になりました。今の満ち足りた生活の中では、腹一杯食べることだけが幸福であった時代のことなどを言っても、それは遠い昔の出来ごとだと一笑にふされるかも判りません。そしてまた、このことを知っている人達も段々少なくなってきました。しかし、自由でなかったから、自由の尊さが判り、物がなかったから、物の有難さを知ったということを、戦争を知らない若い世代の人達に静かに語りかけたい。そしてきっとそのことを理解してくれる若い人達のいることを信じたいと思うのです。

青山政雄　明治36年5月生　広島県出身
▽大正15年3月京城高等商業卒、同年4月朝鮮総督府財務局
▽昭和6年高等文官試験司法科、行政科合格
▽8年弁護士登録

縁ありて花開き、恩ありて実を結ぶ

赤松重明

縁ありて花開き、恩ありて実を結ぶ。七十歳を超えてついにすべてを結集して出て来た私の言葉です。

「縁ありて」とは、私たち人間は独りで生活し人生を営むことは出来ません。お互いに知り合い助け合ってこそ人生の推進が出来ます。

例えお互いに喧嘩をしていても、お互いに知り合ったことを尊いご縁と思える心の人になった時、人生の尊い花が開き初めます。

「恩ありて実を結ぶ」とは、私たちは独りで生き続けていると思い勝ちですが、そうではありません。自然の恵み、又世間すべての物や方々のお力を頂いてのみ生き続けることが出来ます。それは言葉で言えば、生きているのでなく、生かされていることです。このことを私はご恩と言います。

生かされているのだと感じきるような心、人になった時、ほんとうに立派な人生の実を結んだのだと言っているのです。

経済的に大なる富をなし、または名誉ある地位につくことを、人生の成功者と言うのが常です。それも人生の実を結ぶ一つの形ですが、真に有意義な人生はご縁を感じ得て、生かされて

いるご恩がわかる人間に育つことが人生の結実だと思います。この思いがすべての人生の根本をなすものだと、しみじみ感じている次第です。

赤松　重明　大正5年4月生　大分県出身
▽昭和16年3月早稲田大学法学部卒
▽太平洋戦争後家業の酒造業に従事、三和酒類株式会社創立
▽大分県教育委員長、大分県議会副議長、大分県公安委員長を歴任、現在大分県公安委員、三和酒類取締役名誉会長

心の豊かさを取り戻そう

新木文雄

現在の日本社会の物の面での豊かさは、眼を見張るものがある。

しかし、物質面での豊かさに比して、日本人の精神面は決して豊かなものとは言えないのではなかろうか。むしろ精神的に日本人は、貧困な状態にあると言ってよかろう。

日本人の心の貧しさの一つに、公共心が薄らいでしまったことを指摘出来よう。

確かに戦前は、国家が行き過ぎるほど個人を縛っていた。国家を考えずに個人はあり得なかった。敗戦と共に個人は国家から解放されたが、個人を互いに纏めるものがなくなり、個人はばらばらになってしまった。国家と言わずとも、国民のため、民族のため、社会のために貢献しようという、人間としての崇高な公共的精神が稀薄化してしまった。戦前はもっと公共心を尊ぶコンセンサスが、国民一般に存在していたように思う。個人が自分のことのみを追求し、身近なコミュニティーや社会のことを顧みない、現在のような公共心を失った偏狭な日本人の心は、人間の崇高な面を欠いた貧しい心で、先進国としての日本の後進性を物語るものと言えよう。

日本人の心の貧しさのもう一つに、自制心が失われつつある点をあげることが出来る。

私の育った戦前の日本は、物質面では恵まれない時代であり、子供は子供らしく、学生は学

生らしく、若者は若者らしくという自制心が働かざるを得なかった。しかし、現在の日本社会は、物的欲望はほとんど無限に達成することが出来る。人々は欲望を飽くなく追求する。欲望をある程度に抑制し、その範囲で満足する所に心の豊かさがあるのであり、果てしなく欲望を追求する心は、常に貧しいものである。日本人はこの物的繁栄の中で、自制心を取り戻し、心の豊かさを取り戻して行かねばならない。

私のように、戦前、戦中、戦後と生きて来た人間にとって、戦前の方がむしろ日本人に心の豊かさがあったと考えるのは、一種のノスタルジーかもしれない。しかし、心の豊かさは、物の豊かさと共に求められるべきものであることは、間違いないことだと思う。

新木文雄　大正11年4月生　石川県出身
▽昭和22年東京帝国大学経済学部卒、日本銀行入行、秘書役、文書局長
▽52年日本輸出入銀行理事
▽55年福岡銀行専務、58年頭取、現在に至る

頑張れ、あなたは一人ではない

石藏康作

昭和二十五年に現在の山口大学経済学部を卒業して、家業の北九州鉄道構内有限会社門司営業所に入ったが、半年も経たない同年八月、脱税容疑で会社が摘発を受け、ホヤホヤの新米社員は、思わぬ嵐に小舟で孤軍奮闘する羽目になった。

当時は、太平洋戦争後のすさまじいインフレを終息させるため、前年、超均衡予算のドッジラインが実施され、税制面でこれを裏付ける第一次シャウプ勧告が出、二十五年度から実施されたシャウプ税制が手ぬるいと、同年九月には再びシャウプ米税制使節団が来日して第二次勧告を行う時代。狂騰するインフレを退治して日本経済を建て直すには容赦のない歳出削減と徴税以外になかったのである。一方、その頃は、今と違って事業家も万事ずさんで、父の経営も現金出納のみを重視し、現金の動きと商品の動きを別々に記録しているありさまだった。

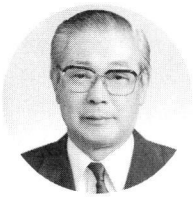
入社早々、この放漫経理に気付いた私が、各店ごとに商品と現金をチェックしたところ、現金の二倍近い商品が動いていたことが判り、早急に経理を複式簿記に改めるべく準備にかかった矢先、国税局の査察ときたから、対応の仕様もなかった。巷間では早々と「会社倒産」の噂は流れるし、動揺した従業員は四散する。父はショックで気落ちし、ふり返れば己一人というありさまだった。もともと、小児喘息で虚弱、事業が好きでもなかった私は、医者になるつも

りで医学専門学校に学んでいたのを、学制改革を機に「長男だから」と経済専門学校に転じ、家業に連れもどされたのだった。だが、今さら身の不運を恨んでも嵐のまっただ中、自分で舟を漕ぐ以外になかった。今でも当時の傷跡が残っている注射をうちながら、税務署の折衝から金策、取引先へのお願い、夜は夜でマキで駅弁の飯炊きからウナギ割きまでやった。

こうした甲斐があって四年後には再建成って新たに新会社を発足させた。これは、偏に一緒に肩を組んで頑張ってくれた社員と、国鉄を初め取引先などのご支援のお陰である。

私の小さな経験が教えたことは、何事も人と人との〝心のふれあい〟が大事で、そうした心のふれあいと支援を可能にするのは、「死地には則ち戦え」の兵法通り、どんな逆境でも必死に体当たりすれば道が開けるということである。

頑張れ、あなた一人だけではないのだ！



石藏康作　大正15年9月生　福岡県出身
▽昭和22年旧制福岡県立医学歯学専門学校医学科2年終了　▽25年現山口大学経済学部卒業、北九州鉄道構内営業有限会社入社
▽29年門司駅構内営業株式会社社長就任
▽31年北九州驛弁当株式会社社長就任、現在に至る
〈好きな言葉〉「他人の言に耳を傾け、自分に誠実であれ」

教育勅語

磯部重雄

「父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓発シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ……」――明治二十三年の教育勅語の一節である。人の道をこれほど簡潔に表現した名文は少ないと思う。そして「之ヲ古今ニ通シテ謬ラス」の真理ではあるまいか。

日・米・英・仏・独・濠・韓・中・シンガポール・スウェーデン・ブラジルの十一ヶ国において十八歳から二十四歳までの若者を対象にした第四回総理府国際世論調査によると、

㈠「自国のために役立ちたいと思うか」の質問に対し「役立ちたい」がシンガポール八九％、韓・中・米がそれぞれ八〇％台となっている中で、日本は四一％（十番目）。

㈡「そのために私自身の利益を犠牲にしてよい」と答えた人はシンガポール六二％、米五七％、韓・中五四％、日本だけが何故か僅かに五％台で、おまけに敵が攻めて来たら「逃げる」が七二％である。

平和憲法平和国家の名の下にお題目のように平和の大合唱が続いても、その平和を構築する具体策や潑剌とした自主独立の精神の涵養は忘れ去られたままであり、戦後のいわゆる平和教

育の成功?を改めて感心すると共に寒心に堪えない。

「働らかざる者は食うべからず」を標榜した国々がいざ蓋をあけてみるとその実態は「働らかざる者こそ大いに食え」であったことが暴露され、世界の各地で政変が頻発している。他人ごとではなく、今や福祉という名の怪物がボケ老人を量産し、日本を荒廃に導くことのないよう祈るばかりである。心をどこかに置き忘れた「モノ」の時代、女権拡張のなかでの「嫉妬」の時代、日はまた沈むのであろうか。

磯部重雄　大正15年1月生　山口県出身
▽昭和20年陸軍航空士官学校卒、24年九州大学工学部卒、27年九州大学経済学部卒
▽磯部鉄工株式会社社長

賢いお母さんになってね

今井宜子

前略ご免ください。

ピアノ教室はいかがですか。大変でしょう。一人ひとりのお子さんが性質も能力も違うのですから。私も及ばずながら、できるだけ若い芽を伸ばしてあげられたらと思っているのですが。

でも、ときには「どうしてこんな?」と、考えこむこともありますね。いえ、ピアノのことではありません。これくらいのマナーは身につけていなければ、と思って注意しながら、ふとこの子に罪はないのだが……と、悲しくなることがありますね。時代の相違、飽食の時代の落とし子と片付けてしまうのは簡単ですが。

先日の発表会や音楽コンクールは大変でしたね。子供達に音楽会の楽しさや聴き方を教えるいい機会でもあったのに、会場を幼児が走り廻っているのに、お母さん達は気にもかけない様子。今日は、お子さんも一人か二人で、可愛さも昔に勝ると思いますが。でも小さいうちは可愛さいっぱいで甘やかし、大きくなるにつれ期待いっぱいで受験勉強に追い立てられたのでは、子供も可哀そうですね。

「ムチを惜しめば、子供を損う」(スペア・ア・ロッド・スポイル・ア・チャイルド)というイギリスの諺を思い出します。親が果たせなかった夢を子供に託す親心は、私も三人の子の

親として痛いほど解りますが、本当は、小さいうちにしっかり人との交わり方やマナーを教え、自我が成長するにつれ重しを軽くして個性を伸ばす方がよいのではないのでしょうか。

この間の発表会を拝見して、貴女を慰めるつもりが、変に肩に力が入りましたが、何といっても未来は若い貴女達のものです。今、貴女が思い悩んでいることを、次の世代の人が同じ思いに心沈むことのないよう、貴女がお母さんになったら頑張ってくださいね。最初の人間形成期である幼児期の教育は、やっぱり子供に一番接する機会が多い母親の責任が重大ですからね。読み書きよりも、まず、人様の中で助け助けられて楽しく生きて行ける躾を。そのことを含めて「科学に導かれた愛」をね。賢明な貴女なら必ず解っていただけると思います。

それと、昔から私が貴女達に話していた「しても一年、しなくても一年」、それは向上心を養う基本の心です。貴女の生徒さんにも伝えてくださいね。さようなら。

今井宜子　昭和3年11月生　東京都出身
▽昭和24年鹿児島青年師範学校卒、中学校教諭を経て結婚退職
▽平成元年カワイ音楽教室講師退職
▽現在鹿児島県北薩ピアノ研究会員、カワイ音研会員、ピアノレスナー、書道教授
＜好きな言葉＞「しても一年、しなくても一年」

二　太郎

今田　章

日本人がエコノミックアニマルと言われ、顰蹙（ひんしゅく）を買い、世界の孤児になるおそれのあるのは、桃太郎の童話に遠因があると思う。桃太郎に毒されているのではなかろうか。桃太郎が、猿（智）犬（仁）雉（勇）の三徳を兼ね備えて鬼が島に渡り、鬼を懲らしめたまでは良いが、締めくくりが良くない。宝物をねこそぎ持って帰るなどとはもっての外。犬か猿かが鬼が島のお姫様と結婚して、王道楽土を建設し、永劫に喜ばれた、と改訂しては如何。真の国際的日本人を育成するには、「おもいやり」の精神の徹底である。

経済大国といわれ、国際的責任を問われる今日の日本は、国内的にも国際的にも、貿易摩擦、競争と協調等々相反する諸難問が山積している。

これに如何に対処するべきか？　ここで思い出すのが浦島太郎の英智である。

中国の古典の中に「南椅の夢」がある。

（淳工芬という男、酒に酔いつぶれて庭の槐の木の下で寝ていると、蟻の洞穴をみちびかれて、大槐安国に迎えられ、南椅郡の太守となり、蟻の王城で二十年、栄耀栄華をつくしたが、ハッと目覚めると、そのまま木の下で寝ていた。）

浦島と南椅の違いは、中国は大陸だから、地下に王城を描き、日本は海洋国であるので、海

底に竜宮城という楽土を想定していること。南椅の夢は老荘思想に基づいているが、浦島は儒教思想に立脚しながら、結末において、巧みに老荘思想を同化していることである。恩人が帰国するお土産に、ビックリ箱のような物を贈るであろうか？

原作では乙姫様から貰ったのではなく、掻っ払ったとしてあったのではなかろうか？儒教の因果応報で、白煙であり、白髪になった。

後世盗んだでは、儒教の訓からして具合が悪いので、贈られたと改作し、結末において、老荘思想をとり入れて「無に帰した」あたり、まことにあざやかなものであると思う。

当時、相せめぎあっていた老荘と儒教の二大思想を巧みに同化してしまった、日本人の器用さにホトホト感心する。

今こそ先人の英智にみならうべきだ。

世界中の国が「心をくみかわす」よすがとして浦島太郎を想起し、矛盾を同化したい。

今田　章　大正8年9月生　山口県出身
▽昭和17年（上海）東亜同文書院卒　▽旭興産㈱相談役　▽前日本保温保冷工業協会副会長、九州保温保冷工業協会会長、北九州商工会議所産業政策委員長
〈好きな言葉〉「人之性也仁義而己居仁由義以貫畢生則人生之事可恕無憾矣」

通勤途上での雑感

今冨　勇雄

私は通常、朝はバスとＪＲを利用し帰りは車での通勤をしている。

バス停には近くの煙草屋の善意で喫い殻入れが備えられ、しかも毎朝ゴミの始末はもとより箒目も鮮やかな清掃までして頂いているのに、乗車時にはその好意を踏みにじるように喫い殻の散乱がみられる。ＪＲの駅の階段、プラットホーム、それに線路上までも同様な投げ捨てが目立ち、目を覆いたくなる。特に喫煙車両で床に踏みつけて消す傍若無人ぶりには腹立たしくてならない。近頃、嫌煙権が強く叫ばれているが、万事世知辛い今日、一服の効用も愛煙家には欠かせないものである。だからといって公共の場を汚してまでの喫煙権は認められていないことを肝に銘ずべきだと思う。自分の家の玄関に喫い殻を捨てる人は誰もいまい。両切り時代の煙草と違い、フィルター付は雨でも風化することなく醜いゴミとして残るので、環境美化のためにも数歩の労をいとわず容器に投入するマナーは是非守って貰いたいものである。

朝夕の交通ラッシュは持家の郊外化と相まって年々ひどくなっている。行政面でも道路網の整備には努めているようだが、予算面や土地事情などで進捗状況は必ずしもはかばかしくはない。

私の利用する幹線道路でも、うまくいっている所は片道三車線だが二車線が普通であり、一

車線の所も一部ある。特にラッシュ時の三車線より一車線に絞りこまれた個所での運転マナーはひどいものがある。通勤時に急ぎたいのは誰しものことであるが、大部分の人は渋滞の中で辛抱強く車の流れにのり走っているのに、ウインカーをチカチカさせ、ちょっと手を挙げお義理に頭を下げ、強引に次々と割り込んでくる利己的な運転には譲り合う気持ちが大切だとは思いつつも不愉快さを禁じえない。

いずれも道義心の希薄、低さによるものである。法に触れないからといって人間としてやって良いことと、悪いことは当然ある筈なのだから、今こそ一人ひとりが陥り易い自己中心の考え行動を抑制し、公衆道徳心を喚起して明るい住み良い社会にしたいものである。

今冨　勇雄　昭和5年11月生　福岡県出身
▽昭和28年松山商科大学卒業、九州電力株式会社入社、54年企画室次長、55年考査部長
▽60年㈱菱熱に出向・専務取締役、62年同社代表取締役社長、現在に至る。
＜好きな言葉＞「和して而して同ぜず」

己を知れ

入谷　拓次郎

人間として生まれてきたこの事実に意外と目をむけていないのが今の我々であります。気がついたときにはもう生きていて、周りに親がおり兄弟がおり友がおって何も不思議に感じることができない状態で自らを意識しはじめたからであります。

目は周りを見つめ、耳は音を捉え、手足で物を捉えて肉体を維持していくことにひたすら意識が向き、それがかなえられる方向へと向いてしまって、そのまま肉体は遺伝子のくみ込まれた方向へと自然の流れとしてできてしまって参りました。自らが生きるというなかでこれを維持するために苦をさけ快の方向へと選択せざるを得なかった。これが自らの人生のスタートの奥深いところに、無意識層に組み込まれたために、その後の人生はこの二見の見方に左右され、今日まで生きざるを得なかったと言えましょう。

生まれながらにして人生を他に預け、過去を忘却してからのスタートであったため、自らを発見する歩みをも忘れ、外界の刺激にほんろうされて本来の自らが望んだ人生を歩むことなく過ぎて参っております。

自らを知る歩み、これは外に求めるのではなく、内なる魂へ求めていかなければなりません。永遠の生命として永き転生を繰り返し輪廻して今という時を迎えている。その重みを感じて戴

きたいのです。自分を知ることは人間を知ることとなります。人間社会において、人間を知らずに真の人間社会が築いていけるでしょうか。この人間を理解していく歩みこそ現代に最も必要なことで、お一人お一人が為していかねばならないことであります。人間を知ることは世界の在りようを知る歩みとなります。過去、現在を知り、未来をつくっていく歩みでもあります。

この大宇宙と人間、この真のありように目ざめて参ることがこの私達人間に課せられた大きな目的と言えましょう。そのときに宇宙即我の境地に達し、悟りへの道を歩んだこととなりましょう。この物質社会のなかで自らを失わず、真の愛の実践を為すには己を知っていく歩みが何よりも大切であることを心に銘じて努力していくことが肝要と存じます。

入谷　拓次郎　昭和5年10月生　香川県出身
▽昭和26年旧制高松経済専門学校卒、関光汽船株式会社入社
▽現在同代表取締役社長他阪九フェリー株式会社、新日本海フェリー株式会社、関釜フェリー株式会社、協和商事株式会社、西日本汽船株式会社などの代表取締役社長
▽日本長距離フェリー協会長、日本旅客船協会副会長、日本外航客船協会副会長、下関港湾協会会長
＜好きな言葉＞「調和と創造」

反　省

碓井　三子男

私の一生は欲を離れたお付き合いの幾人かの友人を持って、その交わりの中で心の支えにもなり、導きを受けて、少しでも過ちを少なく送れたことは幸せでございます。

振り返ってみますと、私の過し方は自分にも、子供にも、人様にも随分厳しくしたものと、呆れております。しかし、人を叱るにも「憎しみを一切捨てる」を心掛け、厳しくする中に、いつもその人達の未来に対する苦言であれば、私は満足しています。

酒が弱いので、仕事がうまくいかないとき、「ストレス」解消の手段に「アルコール」で「うさ」を晴らすことの出来ないたちで、その代わり古美術の中の仏様の像（写真でも）に向かっていると心のなごむのを覚えます。もともと私は社寺建築を勉強していた折、たまたま和辻哲郎先生著の『古寺巡礼』を手にして以来、建築よりも仏の美しさにひかれてしまいました。以来、あの穏やかなお顔に接して、不思議ですね――飛鳥から白鳳、貞観の仏（広い意味の仏）の美しさに救われて心が落ち着いてきます。

それから、心の荒んでいるとき、花に対していると、心の安らぎを与えてくれます。

四十数年前、物資の極端に少ない時代、暫く入院していた折、一茎の花を頂いて、こんなにも花が心を打つことを初めて知りました。それからは僅かの空地に花の苗を植えていると、い

つも私を慰めてくれました。

私は小さい時から歴史が好きで、歴史が人生の師表を示してくれました。いつの時代も人間の争いばかりで人を陥れ、また自分が人の報いを受ける繰り返しが続いています。その反省がよい糧と教えてくれます。一生のおごりに身を滅しゆく歴史の重みが私を諭してくれる思いです。

また「他人に仕事を頼んで自分の期待の六〇パーセント出来ていれば上等と思え」と先輩の残した言葉を私も心に掛けています。その自覚の下、処世していれば事の運びも楽になります。

碓井　三子男　明治40年生　福岡県出身
▽旧県立浮羽工業学校卒業、財団法人京都建築研究所を経て小倉陸軍造兵廠に技術者として勤務
▽終戦後会社経営
▽門司市役所を定年退職後髙藤建設株式会社に入社、調査役
▽現在社会福祉法人小倉新栄会（小倉新栄病院）理事長

望みなさい、叶えられます

江頭匡一

最近、折にふれて若い人たちに言っている言葉です。私の六十七年の人生を振り返ってしみじみとこの言葉が心に響いてきます。

私は旧制中学までは勉強が嫌いでした。成績もオシリから数えた方が早かった。その私が父親を説得して入った飛行学校では本当によく勉強しました。飛行機が好きだったからです。勉強すれば成績が上がって自信がつき励みになる。そしてますます勉強する。

仕事でも同じことが言えるのではないでしょうか。自分が好きな道を選び、その仕事に一生懸命打ち込めば必ず成功できると思うのです。

昔、堀江謙一という青年が小さなヨットで初めて単独航海で太平洋横断を果たしました。日本を出発してサンフランシスコに到着するまで三ヶ月もかかりましたが「サンフランシスコ」という目的地があったからこそ、彼は苦しさを乗り越えて到着できたと思うのです。たとえ一万トンの船でも目的地がなければ、いつまでたっても広い海の上を彷徨っていなければなりません。

「目標を立てて計画を作り実行すれば必ず到達する」

これはアメリカの鉄鋼王カーネギーの言葉で、三十年も前から私が社員たちに言い続けてき

ている言葉ですが、私の仕事で言えば「日本の飲食業を産業化したい」という大きな夢がありました。この私の夢を社員たちも理解してくれ、一緒になって追い続けてきました。

自分で「こうなりたい」「こうしたい」という願望を持ち目標を掲げて十分な計画を練り、努力して実行していけば必ず目標に到達する。目標さえしっかり持っていれば必ず到着できるのです。ただし、夢を見るだけ、じっとしているだけでは夢はいつまでたっても夢で終ってしまいます。自分が望んだことに向かって、一生懸命努力し汗を流して追い続けていけば、必ず叶えられます。

望みなさい、叶えられます。

叶えられない時は、それは運や他人のせいではなく、自分自身で流す汗が足りないのかもしれません。

江頭匡一　大正12年3月生　福岡県出身
▽昭和20年旧制明治大学専門部法律科中退
▽25年ロイヤル前身キルロイ特殊貿易㈱設立、31年ロイヤル株式会社設立、代表取締役社長、63年代表取締役会長就任、現在に至る

音をみる

大石　潤

パリに留学中のことである。パリ・エコール・ノルマル音楽院のレッスン室での恩師の一言を一生忘れることが出来ない。

師の前でピアノを弾いていて、ある部分がどうしても表現出来なかった。その時である。「ジュン、音をみなさい」と、師の声が飛んだ。その瞬間、私の頭の中に広い世界が広がったのである。宇宙から地球を眺めるほどの世界と気持が頭の中に存在したのである。

パリから帰国して私はアンサンブルの世界に飛び込んだ。私はそこで師の言葉がもつ力の大きさを常に心に感じたのである。我々全ての人間や動物はアンサンブルの世界に生きているのである。アンサンブルは音楽の世界だけではなかった。あらゆる人間の行動がアンサンブルなのである。音をみる、人の心をみる、そしてお互いにいたわりの心をみる、それを感ずる、そこには決していやな思いは生じない。音をみる世界がこれ程広がるとは夢にも思ってはいなかった。

年に一回、私は小倉に在住の国立音楽大学でピアノを教えた生徒の家を訪れるのが習慣になった。そして、それがとっても楽しみになったのである。恐ろしいほどまで一本通った彼女の父親の話、全てを楽しいものにしてしまう母親、そして生徒の家族と会話をするのがうれしく

て仕方がないのである。生徒の一人息子が「大石しぇんしぇい」と手を差しのべてくれる。二歳そこそこの子供が音をみるのである。人間の心のアンサンブル、私は音楽、ピアノを通じてそれを知ることが出来た。華やかなステージ、肩書きが力をもつ世界、それは空想であり、肩書きは弱者がもつ武器である。くだらない世界に魅力を感じなくなったのは、「音をみる」、その言葉のおかげである。自分の家族、生徒、そしてあらゆる人にこの言葉を伝えたいと思う。

大石潤　昭和16年6月生　徳島県出身
▽昭和39年国立音楽大学卒業、40年同大学専攻科卒業、卒業後パリ・エコール・ノルマル音楽院へ留学、帰国後国立音楽大学で後進の指導にあたる
▽現在国立音楽大学助教授、大石潤ピアノ三重奏団のチーフ　▽ウィンフィルハーモニー、ゲバントハウス管弦楽団、ベルリンフィル、ベルリン歌劇場管弦楽団のメンバーと競演

しずかに思えば

大木二郎

数年前までは、先の時代に出来た戒め、約束事は、その成立時には相互の了解事項であり、誰しもが疑問を持たないが、次の世代の人々にとって、既成のそれらには容易に従えない国是、政治、経済、風俗の変化が生ずるから「真理は時代の娘なり」と片付けていた。せいぜい伝える言葉もこれ位かなと。

ところが、老年の故にか、最近

在る時はありのすさびに憎かりき
なくてぞ人のなどか恋しき

の和歌に心を惹かれるようになってからは、私を含めて人は逝く運命にある、という極めて当然のことを深刻に考えるようになった。今迄何気なしにみていたメメント・モリ（死の警告）「死を忘れるな」とか、ハイデッガーの「死への存在」など人間規定の句が不気味な、シビアな想いとなって心に迫る。

従って、私の伝えたい言葉はメメント・モリである。死への召集令状は好むと否とに関わらず舞い込む。極めて必然的なことを私達は呑気によそごととして捉えている。だが、人間は皆、一人ひとりが常に自分の死と対決しているのである。

この己が己の死と対峙しているという事実を宗教に逃れたり、普遍的な概念、論理の世界で処理したり、更には、人間は自らの存在を問題にする独自の存在で、自己の有限性を見すえて決意することによって本来の自己を回復するといった現存在的な戯言や噂話で誤魔化すのではなく、自分自身の実存として死を捉えることを勧めたいのである。

そうなれば、生きているままに身を任せ、昨日も今日もみんな同じ流れのままという「ありのすさび」を反省し、和平とか、真の愛情とかが、しみじみ情意をもって受け止められるのでは。消極的にではなく、積極的にメメント・モリを活かす立場をと、言いたい。もっとも、漱石の『門』で宗助の公案に対する答えを老師に「もっとぎろりとしたものを」と詰られた如く、私の言及にも「ぎろり」が不足しているが。

ともあれ、若い人々よ、死を踏まえて各自の美しいドラマを演出されたい。

大木二郎　明治45年3月生　東京都出身
▽昭和12年東京帝國大学文学部卒　▽鹿児島大学教授、52年鹿児島大学名誉教授、鹿児島女子大学教授
▽60年叙勲
▽著書『薩藩に於ける庭訓の研究』『鹿児島に於けるギリシヤ正教』
〈好きな言葉〉「汝の仇のために祈れ」

善隣友好を平和の礎石に

大迫　忍

昨年（一九八九）台湾で合弁事業をやることになり、準備もほとんど終わった合弁寸前の六月四日天安門事件が発生して、にわかに台湾も緊張、折角の合弁事業もストップし、改めて平和のありがたさを思い知らされました。いざ戦争となると、作戦展開にまず必要なのは地図。平和な時には旅の思いをふくらませ、遠くの友を招く地図が国土防衛の機密文書に一変するわけです。南北の会談機運が高まってきたとは言え、なお対立が続く隣の韓国では、地図製作は軍のコントロールの下に置かれ、純粋な民間事業としてはできないと聞いています。第二次大戦後四十五年、極めて精密詳細な地図が自由に売られ、利用できる日本の幸せ、平和のありがたさを思うにつけ、今はあまり聞かれなくなった「善隣友好」の精神に一人ひとりが立ち返らなければと思います。

平和な日本で、平和なるが故にでしょう。近々二十年、少なくなった親子のふれ合いや世代の断絶が問題になっています。私自身も仕事一途に走って来て、今にして思えば、子供の心のひだにふれてやれなかったことも多かったのではないかと思います。昔は、貧しくても親と子が肌を寄せ合ってふれ合っていたのに、今日それが希薄になったことは、戦後私達が目標にして来た豊かな暮らし、豊かな経済社会の落とし子として反省しなければなりません。他方、子

供達は、知的には非常に難しいことを言って大人を驚かせる半面、人とのつき合いや道義みたいなことになると、まるで稚拙という面ものぞかせます。家庭では一人っ子、家に帰っても学習づけで友達と遊ぶ機会が少ない現代っ子は、他人に対するスタンスが解らないと言われています。

こうした親と子や世代のギャップは、生き残りのために必死の企業社会とその戦士の家庭の閉鎖的縦系列社会の落とし子と思われます。そこにあるのは緊張と狭い企業我や家族我で、隣を思いやる隣人愛は芽生えにくいでしょう。

東西の緊張が緩和した今日、新たに南北、民族問題が火を吹きかけている時、苦い戦争体験を持つ国民として、改めて平和のありがたさを思い、親子、家族社会を含めて横社会の視点で隣人を思いやる善隣友好の精神をしっかり平和の礎石にしたいものです。

大迫　忍　昭和20年8月生　大分県出身
▽昭和43年中央大学文学部卒、株式会社ゼンリン入社、55年5月同社代表取締役社長、西日本美術精版株式会社社長、58年8月MRDゼンリン株式会社社長
▽59年9月天地堂印刷株式会社社長ほか現在に至る
〈好きな言葉〉「終身学習」

かとけの違い

大澤　昂

鉄道からホテルにかわってもうだいぶたつが、いまさらのように〝お客の気に入るサービス〟のむずかしさを実感する。

長谷川慶太郎氏のお説を借りるまでもなく、資本主義の世の中では、企業の目的は利潤の追及にある。だから誰だって儲けたい。だが、皮肉なことに儲けようとガツガツすればするほど客がソッポを向く。誰かが儲けるということは誰かが損をするわけで、お客に損をさせてハヤる商売などあるはずもないからだ。お客が満足どころか儲けたような気になるサービス――これが商売の原点というものだろう。

いつだったか「シャボン玉本舗」の森田さんがウマいことを言った。「儲」という字は「信者」と書く。「あそこでなければ夜も日も明けぬ」という信者――つまりファンをどう増やすかが商売のコツなんだと。「儲」は「諸人」、両方あわせて「誰でも一度使うと惚れこんでしまう」ような商品、サービスの提供がハヤルかハヤラないかの岐れ路、平凡なことだが〝お客を大事にする〟平生からの心掛けが商売繁昌につながる――とこの字は教えている。

買う、買わないはお客のきめること、売れる、売れないはその結果。なのに〝ただただ売りたい、儲けたい〟ではお客のほうで愛想をつかす。客室に百円玉をいれないと写らぬテレビを

置く位ならいっそない方がいい。

森田さんはこうもいう。「儲ける」か「儲かる」か、タッタ一字の差なんだが実はこれが天地の差なんだと。バクチは「儲け」たいからやる。だから「儲から」ない。商売とはそこが違う。

そんなわけで、常々「お客様にご損をかけない」サービスを心掛けているつもりでも、そこは人間、ついつい欲がでる。その辺を割引いて内心「ちょっと合わないかもネ」と思うくらいのサービスをしてちょうどいい加減なところであろうか——うちのレストランあたりでも、「おたく、これでひき合うの」と言ってくださるお客様が増えてくれればシメたものなんだが。

大澤　昂　昭和8年1月生　福岡県出身
▽昭和30年九州大学経済学部卒、日本国有鉄道入社、鹿児島鉄道管理局総務部長、門司鉄道管理局経理部長、九州総局次長、熊本鉄道管理局長、56年退社
▽同年(財)運輸調査局理事、58年同専務理事
▽62年株式会社小倉ステーションビル代表取締役社長、現在に至る

心に邪なくほんものを

大西利昌

最近の若者は、親のスネをかじりながらおしゃれだとか、DC志向が強いとか嘆かれていますが、ぜいたくは別として、考え方によってはそれも時代の流れであり、決して悪いことではないと思います。

今日、〝物の豊かさ〟から〝心の豊かさ〟が言われるようになりましたが、ふり返ってみれば、私達も敗戦後の飢餓線上から脱却すると、日本列島一色に家電三種の神器にとりつかれ、フラワーモードやフルーツカラー、ミニスカートが大流行し、GNPが自由世界第二位になった後の昭和四十年代半ばには量産品とひと味違う〝おふくろの味〟〝ふるさと志向〟が流行語になり、世界史に類をみない高度経済成長に終止符をうった第一次石油ショック後に〝ほんもの志向〟が芽ざし、今日の〝心の時代〟にたどりついたわけです。その意味では豊かな時代に育った今日の若者たちがおしゃれになったとしても不思議ではありません。問題は、彼らの〝心〟志向が、おしゃれの次元にとどまるか、それとも年齢とともに〝ほんものの心〟希求に成長するかどうかで、おしゃれの心がほんものに深まることをねがわずにはいられません。

そこで、〝ほんもの〟とは何かですが、私達が絵画でも陶器でも見るとき、いい物はいつの時代でも、誰が見てもいいものです。それは作品に心がある。作家が対象にみた生命を純粋に

愛し表現しようという姿勢が違うからではないでしょうか。ニセモノとほんものの違いはここで、製作技術的には遙かに優れたニセモノが人の心をうたないのは、このためでしょう。孔子は中国の古典文学・詩経のよさを一言で言えば「思い邪なし」と言っていますが、このものに感じたままの生命を純粋に流露し「思い邪なし」が〝心〟ではないかと思います。〝音楽を見〟〝絵画を聞く〟、その〝心〟が人の心をうつ。それが〝ほんもの〟で、その基底にあるのは経済価値や自分の利益など他の価値でものを計らない「心に邪なし」ではないかと思います。そこに〝出会い〟の喜びもあると思います。

心の時代、人に対しても自然に対しても、心に自己中心の邪なく、相手の生命を純粋に愛おしみ、出会いを大事に、全ては後世に引継ぐべき預りものだと考えたい。今、その心が宇宙的に求められており、それが人類と自分の幸せを築くことになるのではないでしょうか。

大西利昌　昭和15年11月生　愛媛県出身
▽昭和44年北九州冠婚葬祭助成会設立、45年明善社設立、59年株式会社サニーライフに組織変更、代表取締役社長、現在に至る
▽㈳全日本冠婚葬祭互助協会理事、全日本冠婚葬祭互助協同組合理事

宗教性の自覚が大切

合馬又彦

日本は、経済的発展を遂げたけど同時に道徳面で非常に危機をはらんでいる。今の日本はまだわりあい道徳水準が高いが、それは意識せざる宗教的土壌があってのことで、そういう宗教的心情を再確認しないと道徳も衰えてしまう。

私の学生時代、大正の終わりから昭和の初めですが、「マルキシズム」が真理の代名詞のように思われ、心ある学生は魅力を感じ「マルクス」を読んだ。それが今日、「マルキシズム」というものが必ずしも真理を示しているとは思わない。しかし、「マルクス」が人間の社会を観察分析する方法を変えたことは無意味だとはいえない。もう人々がこれに呪縛されるということはなくなったと思う。そうすると新しい道を求めることになる。

それがどういうものであるか、世界の人々が注目している。そこで宗教も改めて見返されることになった。昨今、西洋の思想家が冠詞も語尾もつけない「レリジョン」というものがある。個々の宗教を超えて何かもとにあるものをいうのです。これを大切にしなければならぬといっている。これを我々の問題に当てはめてみると、「レリジョン」に明治の初めのある思想家が宗教という漢字を当てた。宗（もと）と教（おしえ）とは、違う。「宗」というのは、もとのものだから、これは言葉ではいえない。言語表現を超えた根本のものだ。これを人々に説くと

きに「教」になる。教は時によっては不適当になれば変えてもよい。捨ててもよい。改めてもよい。けれど、もとのものは無視してはならない。

今後の世界文明の進展にとっても、そのもとのものに目をつける事が大切である。そのもとのものが、概念規定を超えていて言葉では言い表せないものだという考え方は、今後の世界の人々の宗教観に非常に意味を持っている。言葉では言い表せないものとして、ただ仰いでいただくということにすれば、民衆の間の争いはなくなると思う。「宗」に目を向け、日本人に根づいている宗教性をはっきりと自覚して、それに従って生きるということが大切と思う。

合馬又彦　明治37年6月生　大分県出身
▽昭和6年慶応義塾大学医学部卒、同大耳鼻咽喉科教室入局、医局長、講師
▽昭和15年退職、現在、医療法人北愛会合馬クリニック名誉院長
▽著書『社会保障制度下における医療制度』
＜好きな言葉＞「一即一切、一切即一」

姿勢を正し天命と諦める

岡野正実

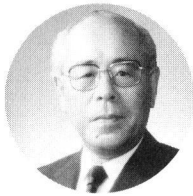
「人間万事塞翁が馬」。人生、何が幸いし、また何が災いするかもわからないのが人生です。私自身、少年時代病弱で、学業も中途でやめるような次第でした。血気ざかりの時代、人生に失望してもんもんの日にあけ暮れていました。そうしたある午後、レンゲ草畑にねころんで、青空をかすかに流れる白雲をぼんやり眺めながら、あの雲のように、あてもなく大空を流れる気分で気永く療養しようという余力を見出しました。これが私の人生観を作ったような気がします。

徴兵検査は勿論不合格。四年後れで大学を卒業の折、私は住友本社に採用されたのですが、大学の総長の推薦で、文部省の交換留学生としてイタリアに行くこととなり準備をしていたところ、アフリカ植民地問題で英伊が開戦して中止になり、当初予定の住友に入社しました。病気をしていなければ当然日中戦争から太平洋戦争に駆り出されて戦場に散っていたかも知れないし、英伊戦争がなければイタリアに留学して、その後の運命は大きく変わっていたでしょう。

若い頃、難病に冒され、戦争に阻まれた青春でしたが、今でも私が大事にしている教えが三つあります。一つは小学校の先生から厳しく注意されていた「姿勢を正せ」ということで、これは心も身も正す習性を植えつけてくれました。それと、大学を出て就職するとき実父が諭し

た「なにごとも自分の力で成功したと思うな。自分の力だけでは世の中どうにもならない」ということです。そして、太平洋戦争後の混乱期に社長を退いた養父に代って昭和二十四年に社長になった私に養父が言った「人生、考えあぐんでくよくよしてはいけない。人事を尽くしたら天命と諦めよ」という言葉です。

昭和三十二年、九州で初めての友好訪中団に誘われて中国を訪れるとき、「中国に行ったらアメリカが入国を許可しないから行かない方がよい」という意見もありましたが、そのとき、私に訪中を決断させたのは、この三つの教えでした。当時は冷戦がエスカレートして、ビジネスにも冷戦の影がつきまとう時代でしたが、お陰さまで今日まで中国に五十数回、アメリカ、ヨーロッパを四十回近く訪れ、世界に多くの友人をつくることができたと思っています。



岡野正実　明治44年1月生　福岡県出身
▽昭和14年九州帝大法文学部経済学科卒
▽住友化学工業を経て岡野バルブ製造株式会社入社　40年同社長就任、今日に至る
▽現在、西日本日中貿易センター会長、北九州日米協会会長、メキシコ国名誉領事

背中を見せて育てよ

岡本康夫

私は父と兄を心から尊敬する。私は父と兄の「背中」を見て育った。

父は大正初期から下関で野鍛冶を開業しており、長男の兄は高等小学校を出るとすぐ向槌を振って父の先手を勤め、鎌や鉈を作っていました。私達兄弟は、年齢がそれぞれ八つずつ、従って私の兄と弟とは十六歳違いでした。鍛冶屋といえば昔から、貧乏の代名詞のように言われていた通りで、当時の父や兄が私達弟妹を養うために、いかに苦労していたか、小さい私にも身に泌みて判っておりましたが、どうすることも出来ない時代でした。

戦後、私達は当然のように父の元に帰り、揃って野鍛冶に従事し、昭和二十五年「かねやす鍛造工業株式会社」を設立。社名は兄包夫（かねを）と弟康夫（やすを）の名をとり、希望に燃えた創業でした。しかし、当時の経済状況は厳しく、仕事は忙しかったものの、資金繰りは仕事よりもさらに忙しく、ジッと手を見る日が続きました。

こうしたなかで、兄は強い経営理念を生み出し、「中小企業の生きる道は、個性的な体質によって、高い存在価値を持つしかない」と、並々ならぬ厳しい努力と忍耐をもって私達を善導し、人生の生き甲斐を追求し、実践した。一方、兄は何事においても弟達のことを忘れず、会社の役職にしても自ら社長定年を六十五歳として私に経営のバトンをタッチし、私もこれを家

訓として八年後の昭和六十二年、弟敏治に社長を任せました。

また、兄は趣味の面でも兄弟ひとしく山を愛する気風を育て、自らも山岳体育功労により勲五等双光旭日章の叙勲を賜る栄に浴しました。兄は、昭和六十三年五月、呼吸不全のため七十四歳で急逝しました。

兄がいてくれることがあたりまえであった私には大きな悲しみであり、今でも「こんなときには、兄はどうしただろうか」と、兄の「生き様」を振りかえり自問自答する。

実直に生きて、働いて働いて働き抜いた父。厳しい経営姿勢と、優しい愛情と、豊かな趣味に卓越した兄。

「藍より青く」は望むべくもないとしても、尊敬する先達を鑑とし「自らの背を見せ」てはばからず、率先して永年培ってきた社風をさらに高揚させてくれることを次代に期待する。

岡本康夫　大正11年3月生　山口県下関市出身
▽昭和18年10月仙台陸軍予備士官学校入学、20年1月陸軍少尉任官、ビルマ戦線転戦
▽25年2月父と兄弟で株式会社カネヤス創立、常務、専務、社長を経て現在会長
▽下関山岳会々長　日本山岳会々員

アリーテ姫

緒方　世喜子

「アリーテ姫の冒険」という童話が、イギリスのダイアナ・コールスという人によって書かれています。The Clever Princess が原題ですから「かしこいお姫さま」とでも訳す方がよいのでしょうか――。

従来、童話に登場する西洋のお姫さまたちに共通しているのは大変美しく、素敵な王子様の愛や第三者の手助けによって幸福が得られるというのがテーマになっています。私も子供の頃、こうした童話を読んだり、また物語として聞いたとき、自分がその物語の主人公になったような気分になり、いつか、私にも格好のよい王子様が現れないかと夢みたものです。

それは、自分が積極的に働くのではなく、誰かが、何かをしてくれるという〝指示待ち〟の姿勢だったと思います。

アリーテ姫は、今迄のお姫さまのタイプではなく、かしこく、やさしく、その上チャレンジ精神に富み、次々に起こる困難を解決して、自らの力で幸福を得るストーリーになっています。

アリーテ姫物語は、現代に生きる私たちにいくつもの貴重なメッセージを贈っています。

一つ、アリーテ姫は、可愛くて、従順で、何でも人の言う通りにするお姫さまでなく、よく学び、自主的で、自然界の動植物の習性をよく知って、やさしく接する心を持っています。

二つ、アリーテ姫は、魔法使いから与えられた難題を解決するのに、男の人のように、武器や剣、銃を使って相手を屈伏させるやり方ではなく、えい知としなやかな感性でハードルを越えていきます。

三つ、すべての物事をマイナーに考えないで、どんな困難にも前向きに明るく、プラスに志向する、ほんとうのかしこさを持って、苦労を苦労と感じないさわやかさがあります。

二十一世紀を担う若い方たちは、これからの人生の中で、いろいろな経験をしていくことでしょう。学業、就職、結婚、人付き合いなど。そんなとき、男だから、女だからの固定観念にとらわれず、人間としてどう対処していくかを考えて欲しいと思います。

自分の行動は自分で責任をとり、「自らの人生と幸福は、他力本願でなく、自らが拓く」というほんとうの勇気とチャレンジ精神を持っていただきたい。アリーテ姫のように――。

緒方　世喜子　昭和6年生　福島県出身
▽昭和26年旧制帝国女子専門学校（現相模女子大学）経済科修了
▽婦人記者を経て38年㈱西日本相互銀行入社、61年西日本銀行取締役
▽63年㈶福岡市女性センター館長兼務、現在に至る
▽著書『女の忘れもの』他
〈好きな言葉〉「上善は水の如し」

生かされている

尾﨑　進

「生かされている」、この言葉は協和醱酵工業㈱の創立者である加藤辨三郎会長（昭和五十八年八月十五日逝去）が、人世についてお話された言葉の一つです。

学校を卒業し、就職いたしました会社（利久醱酵工業）が、昭和三十年に協和醱酵と合併し、その当時、利久醱酵の労組委員長であった私は、引き続いて協和醱酵の工場単位で結成される労組の委員長として中央経営協議会へ出席した時に、初めて加藤会長（当時社長）にお目にかゝり、それから二十七年の間、労組役員の立場、酒類技術者また営業担当の立場、そして子会社役員として、加藤会長のお教えを受けたのであります。

労組役員時代の私は、血気盛んな頃で、経営者の経営取り組みに対する批判、労働条件の改善要求などの折り折りに「オレガ」という気持での言動が強かったことは確かですし、加藤会長が当時社長職で、在家佛教協会の理事長を兼ね、佛教普及に取り組まれていることについても疑問を投げ掛けたりしておりましたが、何時しか加藤会長のお話に「なるほど」と思うことが多くなり、月刊誌在家佛教を繙くようになりました。

昭和四十年に労組専従役員から職場復帰し、医薬バルク営業担当となり、製薬メーカーを主体とするお得意様訪問が日課となりました。人間関係の重要性については、酒類工場時代、又

労組役員時代、それなりに認識していたつもりでしたが、営業担当として、ユーザー、ディーラーと取引きの話し合い、製品を生産する工場担当との話合いを重ねていくに従い、加藤会長の説かれる「生かされている」ということの理解、そしてそこに「お陰様で」という感謝の心を大事にしなければと思うようになりました。「自分一人の力で生きているのではない。直接、間接的に多くの人々の協力をえて今日がある」ということです。

社会観、労働観が時代と共に変化することは当然のことですが人類社会として、温かい人間関係、心の豊かさは失ってはならないことです。そのためにも「生かされている」ということを心に刻み、「お陰様で」という感謝の心をもつ日々でありたいものです。

尾﨑　進　昭和4年1月生　長崎県出身
▽昭和25年宮崎農林専門学校（現宮崎大学）卒
▽▽51年協和醗酵工業㈱札幌支店長
▽54年千代田開発株式会社へ出向、常務取締役、専務取締役を経て63年取締役社長、現在に至る

温故知新

小野喜孝

私は、大正十三年八幡西区上津役産でありまして、一人息子。小庄屋で、父も祖父も小学校の教員でありました。東筑中学から山口高商を敗戦の年の昭和二十年九月卒業、小倉税務署に二十一年一月に入署、福岡国税局に移り、約六年間国税関係の仕事を経て、家庭の事情で退職し、昭和二十七年四月に井筒屋に入社、現在にいたっております。

過去を振り返って大変両親に感謝しますことは、健康であることであり、終戦後の職のない時に小倉税務署に入署できたことであります。人生の楽しさ、素晴らしさは、まず健康であり、東筑中学時代は、上津役から折尾まで約一里半を三年間徒歩通学しましたし、また中学、高商と柔道をし、さらに学徒動員による幹部候補生時代は、徹底した訓練により肉体を鍛えることで、何事にも耐え得る精神力を養ったものでした。「目から火が出る」という言葉通りの体験をしたのもこの時であります。

国税局時代は、経理の勉強を徹底的にさせられまして、今でも貸借対照表、損益計算書を見れば、その企業の動きが摑めるのは幸いでした。

人生には運、不運がありますし、まして企業のトップになるか、ならないかは、偶然にすぎません。人生におけるチャンスは順風満帆の時だけではありません。自分の不得手の分野、あ

るいは逆境の中で、いかに努力し踏んばるかが、その人の価値を決めます。「人の歩く裏に道あり、花の山」と申しましょうか。

現在の私がここにあるのは、軍隊時代に鍛えた強い精神力と国税局時代に学んだ誰にも引けを取らない経理知識であると確信いたしております。現在は、過去の上に成り立っているわけで、例えば「少年よ大志をいだけ」のクラーク博士の言葉は、平成の現在でも生きております。過去を学ぶことは自分の成長にとって大事なことであり、先人の努力を知ることにより、社会にどれだけ貢献できうるかが肝要であります。ここに思いを致し一層の努力を願うものであります。

私の贈る言葉は「温故知新」であります。

小野喜孝　大正13年11月生　福岡県出身
▽昭和20年山口高等商業学校卒
▽21年小倉税務署入署、24年福岡国税局調査課
▽27年㈱井筒屋入社、45年経理部長、53年取締役、55年常務取締役、57年専務取締役、59年取締役社長、現在に至る
〈好きな言葉〉「温故知新」

合掌

香川孝志

あなたは、食事の際、いつでもどこでも「いただきます」と合掌して頂戴出来ていますか。合掌して生きる生活は、日本のすばらしい文化であり、次の世代に必ず伝えたい伝統です。

合掌は古代からインドで行われてきた礼儀作法です。両方の掌を胸に合わせ、相手をうやまう姿は、非常に静かで美しい均整のとれた姿勢です。インドには右手と左手とを使い分ける習慣があります。右手は神聖なる手、左手は不浄なる手と考え、日常生活でも右手は特に注意して用いられます。

私はかつてインド旅行中、インドの人から「左手は私、右手は私以外のすべてのものです。不浄で、愚かで、一人で生きられない弱い私です。私以外のすべてのものの御蔭で生かされて生きている。感謝せずにはおられません。インドの合掌は感謝の心の相(すがた)です」と聞かされました。

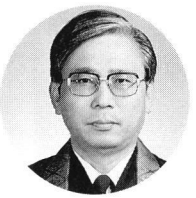
仏教は、お釈迦さまが紀元前六世紀にインドで説かれたものです。仏教にも合掌の作法が取り入れられました。

仏教は縁起(えんぎ)の法を説きます。縁起とは因縁生起の略語です。すべてのものは、因縁が結んで、はじめて結果を生みます。因だけ、縁だけでは果は生じません。その意味から、因と縁はもち

つもたれつの関係にあります。左手の私（因）が、右手の私以外のすべてのもの（縁）と係わりをもって、共に助け合い存在しています。

「人間」という漢字は、もちつもたれつを表す「人」と、時間的空間的にすべてのものと係わりをもっている間柄を表す「間」とで出来ています。人間としてのめざめは、縁起の法界で合掌の出来る私の自覚です。そこには、私だけの「幸福（しあわせ）」でなく、すべてのものと共に築きあう「仕合（しあ）わせ」の世界があります。

日本に仏教が伝来したのは紀元六世紀、飛鳥時代です。それ以来今日まで、私達の先輩は仏教思想をもとに「日本人としての生き方」を掌を合わす生活に見出し、磨き上げてきました。その意味から、日本は合掌の文化・伝統の国といえましょう。伝えたい「合掌の心」を。



香川孝志　昭和16年2月生　山口県出身
▽昭和38年龍谷大学文学部真宗学科卒業、鎮西敬愛学園奉職、鎮西敬愛学園校長

葦だから八十点で

加治屋　知　暁

「ガリ勉して一番になると思うな。試験は八十点とればいい。常に二十点の余裕を残して体を鍛え、沢山の本を読み、よき友をつくれ」――敗戦の色が濃くなった昭和二十年春着任された柳直一校長先生は、ことあるごとにこう教えられました。この柳先生の言葉は、学徒勤労動員で哨戒機造りに明け暮れ、白い特攻精神一色に乾いていた私達の心を妙に捉えました。

先生がおっしゃったのは、もちろん、何事も適当でよいということではありません。先生が教えられたのは、テストで満点をとることが学生の至上価値ではない。成績が一番になるためには、スポーツとか友人とか、文学を愛し、芸術に親しむとか、多くのことを犠牲にしなければならない。たかだかトップの惚れ(うぬぼ)も出る。人間の価値は全人格。まず健康で広い視野と教養を身につけ、他人を思いやり、自然に感動する〝人間性〟が大切だということでした。

「鹿を逐(お)う者は山を見ず」。人は一つのことに執念を燃やすと、他の価値や周囲の状況が見えなくなるものです。首席を狙う学生は友人を顧みず、経済成長にひた走れば、自然や住民、他国のうめきが聞えず、ということになりがちです。都市サラリーマンのささやかな夢マイホームも遠ざかり、年々高齢化が進む社会で、土地投資で業績を上げ、創業以来の万年若者集団を誇っても、それは多くの人の墓標の上に咲いた〝悪の華〟でしかありません。

先人が流した汗で豊かになったわが国で、今〝心の豊かさ〟や〝国際性〟が求められています。それは狭い自己目標への一点傾斜、満点主義の価値観を変えることでもあると思います。

21世紀の課題は、熱帯林の枯渇やオゾン層の破壊などによる地球の死滅をどう防ぐかだとも言われています。それを救うのは、人類と自然、他を思いやる八十点主義の〝心の豊かさ〟ではないでしょうか。「人を目的にし手段にするなかれ」と言ったカント流に言えば、今日は「宇宙も単なる手段にするなかれ」ということでしょう。

「人間は考える葦」と言ったパスカルが「人間が尊いのは、彼は自分が死ぬこと、宇宙の自分に対する優勢を知っているからである」と続けた後段をかみしめたい。そして、今私達が八十点のゆとりで悟るべきは、今や文明も一種の原罪であり、人間は宇宙の中で生かされている「ひとくきの葦に過ぎない」ということではないでしょうか。

加治屋　知　暁　昭和4年12月生　鹿児島県出身
▽昭和27年旧制九州大学文学部哲学科卒、毎日新聞社入社、編集委員、51年希望退職　毎日新聞社終身名誉職員　▽自由業（著作・講師・会社顧問）
▽著書『現代を演ずるもの』『こどもの心がみえますか』『(財)福岡県警友会三十五年史』他
＜好きな言葉＞「丈夫は玉砕するも甎(せん)全を愧(は)ず、児孫の為に美田を買わず」（西郷南洲）

ゴルフと人生

片岸修次

五十五歳にしていまだ迷い多き人間である。

それなりに年輪を重ねてきた男として、はずかしくない自分であろうかと自問自答する今日である。松下幸之助翁は引退するとき「自分で言うのもなんやが、実によくやったなァ。自分で自分の頭をなでてやりたいぐらいです」と言われたそうだが、その時八十歳。一筋に自分の道を切り開き、思う存分歩き続けて来た人のみが言える言葉である。省みてこういう人はほんとうに幸せな人である。

弱冠二十九歳で経営者となるもまだまだ修業の身であったが、たまたま趣味と健康のために始めていたゴルフが七年目を迎え、一応ゴルフの道がわかりはじめていた時でもあった。

ゴルフは人生と同じであるとよく言われるが、経営に必要とされる先見性、判断力、実行力、内省力などを養い、全人格を高めるには格好の道場であり、ゴルフをまじめに追求していくならば必ず習得するものがあると感じはじめていた。ゴルフの基本はまずエチケットであり、良いマナーである。お互いに思いやりの心をもってするスポーツでもある。

人生には逃げられない道、避けて通れないカベやトラブルが必ずある。年齢、立場、器量に応じ、わきまえ、状況の変化に臨機応変に対応していかねばならないのであるが、ゴルフもま

たしかりであり、トレーニングの場としてこれほどのものはなかろうかと思われる。

ゴルフも大衆化され、若い愛好者も多くなったことは喜ばしいことである。ただ、ゴルフを単なる遊びとするのか修養の場とするのか、ゴルフの原点は一人ひとりの心の中にあると言えよう。自分の考えを変えればゴルフの世界もまた変わるのである。

人間は自分の考えているような人間になるとも言われる。私はゴルフとの出会いを大切にし、勝ったか負けたかよりも、プレーの一つ一つに意義を感じてやることが大切であると思う。

人間心構えを変えることによって、自分の人生を変えることができるということである。

片岸　修次　昭和10年12月生　大分県出身
▽昭和33年中央大学文学部卒、株式会社八幡鋳造所入社、
現在㈱八幡鋳造所、㈱ワールド健康社各社長、㈱メイト
黒崎副社長
〈好きな言葉〉「正しき者は必ず報われる」

米国を軽く見るな

金子太郎

明治維新の元勲が欧米の侵入から日本を守るため、日夜どれほど心胆をくだいたことか。日露戦争は日本がロシアの植民地になるかどうかの決戦であった。この戦争で日本がロシアに一矢を報いたことが、四百年続いた白人による有色人種諸国の植民地化の流れを押しとどめ、反転させた。これぞ世界史に特筆される戦果であった。

その後の日本は、欧米帝国主義の悪いところを真似て、アジア諸国に侵入した。しかし、維新の元勲や明治世代の元老達の目の黒いうちは、決して無暴なことはしなかった。欧米諸国が軍縮を提案すればそれに従ったし、出兵をやめよと要求されれば撤兵もした。彼等が、若い頃から欧米の強さ、恐ろしさを嫌というほど思い知らされていたからである。彼等が権力の座から完全に去った昭和初年になると、青年将校を初めとする右翼が政治権力を握り、無謀なる太平洋戦争に突入していく。欧米の力に無知な連中が、思い上がって無茶をやり、祖国を敗戦に導いたのである。

いま日本経済は絶好調にある。「繁栄の孤島」とすらいわれる。半導体を初めとする先端技術部門では米国を追い越したところもある。日本的経営も海外で成果をあげている。こういう情況のなかで、若い人のなかには、「もう米国に学ぶものはない」と高言する者が現われ、そ

れがマスコミにより報道されている。

だが少し待って頂きたい。特定の部門で米国を追い越したとしても、経済の総合力で優れているとは言えない。視野が広く、見識の高い人ほど、米国のフトコロの深さや基礎研究の優位などに脱帽しているし、文化的側面に至っては、欧米との距離はまだ気の遠くなるほど遠い。

太平洋戦争に負け、戦後、欧米とのカルチャー・ショックに叩きのめされた人達が、日本のトップの座にある限り、米国の力を軽視した政策決定はやらないだろう。その世代が引退したあと、往年の青年将校のような政治家や経営者が権力を握って、米国を小馬鹿にし、日本と日本経済を破滅に導くのではないか。それを恐れる。

その日のこないことを祈るや切である。

金子太郎　大正14年8月生　中国青島出身
▽昭和24年東京大学法学部卒、大蔵省入省、東京税関長
▽50年環境庁官房長、55年環境庁事務次官
▽56年退職、丸三証券社長、現在会長
▽著書『PBSの基礎知識』
△好きな言葉▽「世のため人のため」

戦争で失ったものと得たもの

川　嵜　清　澄

「ボクチャン、大人になったら何になるの？」と言われて、「陸軍大将」と答えた自分。中学校に入学した年に大東亜戦争が始まり、一日も早く軍人になることが国のためになることだと思ったものだ。

単純なのか、純粋だったのか、戦争が不幸なものであるということを愚かにも当時一片の心すら持ちあわせなかったのは事実である。たとえ国全体がそうであったにせよ、何等かの疑問があってもよかったろうに――今考えると実に情ない。

僅か一年半であるが海軍に入り、終戦となった。ただし、親は戦争を否定してはいないにしても、次男の私を海軍に行かせたものの、長男は理科系へ進学させ兵役免除を考えたようだ。いつの世でも、冷静に将来の我が家の滅亡を阻止しようという考えが根底にあったのだろう。

戦後、復員して親から「大学だけは出ておけよ」と言われ、現在に至っている。その間、「戦争とは自分にとって何であったのか」、自問自答の人生を送っている。靖国神社に参拝する度に戦争で生き残った幸せは、先輩の犠牲によるものであると、ひしひしと胸に迫って来るものがある。

「軍隊に行って何を得たか？」、それは唯一つ「青春時代の団体生活」だった。同じ釜の飯

を食った同期の桜達は戦後も厚生省復員局へ行ったり、全国に呼びかけて私を含めて探してくれ、十年ほど前に当時の友と感激の再会を果たした。戦争の中の団体生活は苦しい中にあっても目的を一つにした者の集団であった。その体験を生かそうと、私は二人の息子を中学、高校時代に鹿児島、熊本で寮生活をさせた。本人達にその体験がどうであったかは現段階では分からないし、また、聞こうとも思わない。今後結婚し、子供を教育する時、自分達各々の体験を生かすのではないかと、将来を楽しみにしているが――私の一人よがりかもしれない。

最近の世界状勢は東西の対立は氷解しつつあり、戦争が完全に無くなる日も近いと信じている。地球上から戦争の無くなる日を願うや切である。

川嵜　清澄　昭和4年2月生　福井県敦賀市出身
▽昭和26年旧制立命館大学経済学部卒業、三油興業入社、現在、三油興業株式会社東京本社常務取締役
△好きな言葉▽「人よりも一歩努力」

子供の教育は先ず家庭から

川崎安太

近頃の学校や家庭での子供教育の様子を見ていますと、考えさせられることが色々あります。昔の教育が総て善くて、今の教育が悪いと言うことではありませんが、昔の先生には、生徒に信頼され、単に勉強だけでなく、人生の相談相手になれる、教師という言葉がピッタリした、今思えばその後の人生の師表となるような、懐かしい思い出深い先生が、それぞれの勉強の過程で必ず一人や二人は私達の周囲にいましたし、また私の両親も学校での勉強のことは幾分放任的な処がありましたが、躾は比較的厳しく、何か事のある時は頼りになる相談相手でありました。お陰様で現在、社会の一員として恥ずかしくない、幸福で楽しい人生を送ることが出来たと、感謝の気持で一杯です。

昔から人の教育には知育、徳育、体育と情操教育が必要といわれてきました。今の学校教育は、知育または体育偏重で、徳育や情操教育は置き去られているのではないかと思われるようなことをよく見たり聞いたりします。それかといって、家庭で徳育や情操教育が充分なされているとも思えません。経済優先の社会的風潮の中で、人間形成を二の次にするような家庭が多いことを危惧する一人です。

昔の日本の家庭では、父親はその家の大黒柱として、家の規律、権威の象徴であり、義理人

情を重んじ、母親は慈愛にあふれ、一家団欒の中心であったように思います。結婚をして二人の時は、相思相愛で仲良く暮らすことは大変結構なことですが、子供が誕生してからの親の責任はそれ以上に重要なことです。現在の多くの家庭に見られますように、母親が急に強くなり、一家の中心が子供に移ってきた時に、果たして心身共に健全な子供となるでしょうか。母親に愚痴をいわれ、疎んぜられる頼りない父親の姿や、母親を見て育つ子供が将来立派な人間になることが出来るでしょうか。子供は両親の鏡同様生き写しであると考えて間違いありません。

先日、或る講演会で「子供に残す最良の財産は、煙草を喫わないように躾すること」と話がありました。私の周囲にも、煙害と思われる病気が原因で、高い理想や人生の楽しさを満喫出来なかった人が数多くいます。子供の躾と共に、親も禁煙することが義務と考えるような責任感があって、初めて教育は全うできるのではないでしょうか。

川崎安太　大正14年9月生　大分県出身
▽昭和20年陸軍士官学校卒
▽27年旧制明治大学商学部卒、三菱鉱業㈱入社
▽35年希望退職、株式会社佐伯建設入社、58年社長に就任、現在に至る
▽大分県産業教育振興会会長、大分県地方労働委員（使用者側）
＜好きな言葉＞「敬天愛人、真心」

本当に伝へたいものは何か

木内信胤

「本当に後代に伝へたいものは何か」といって訊かれれば、私は躊躇なく、

「〝日本らしさ〟の一切だ」

と答へます。

その「日本らしさ」とはしかし、昔にばかりあったものとは限らないのです。〝新しいもの をドンドンと採り入れて行くこと〟、これも「日本らしさ」のひとつであって、明治以来の日本は特にさうでしたが、終戦以後の日本は、一層際立ってさうであったからこそ、今日の日本が生まれたのでした。

ところが一方、「旧物保存」といふことが、これもまた日本の一大特徴であって、それあるが故にこそ、この世界に稀らしい日本といふ国が成り立ってゐること、これも紛れのない事実なのです。

「過去を懐しむ心」、それが「旧物保存」の心理的基礎であること申すまでもありませんが、過去を懐しく思ふやうな心情の持ち主でない人間に、どのやうな人間的な価値が認められるであらうかと考へて下さればすぐにおわかりのやうに、この「過去を懐しむ心」といふものは、人間が人間らしく生きるための基礎といってもいいし、これがまた日本といふ国の歴史が、現

に御存知のやうであり得たわけでもあったのです。

ですから、いま我々が、これを失はずに将来に伝へたいと思ふものは何かといへば、私は、「それは〝日本らしさ〟の一切だ」と答へると同時に、その「日本らしさの一切」は挙げて我が日本国の歴史のなかにあるのだから、尊ぶべきものは日本の歴史だと申すのですが、その日本の歴史は、かうして我々が毎日々々を暮らしてゐるそのことによって造られて行くのですから

「尊ぶべきものはこの我々の日常の日々だ」となるわけです。

そのやうに考へて日常を暮らすなら、生き甲斐も楽しさも、そのなかにあることと思ひます。

木内信胤　明治32年7月生　東京都出身
▽大正12年東京帝国大学法学部独法科卒、1年志願兵終了後大正14年横浜正金銀行入行、昭和20年10月退職、大蔵省終戦連絡部長就任　▽21年6月同上退官、評論生活に入る　▽24年3月外国為替管理委員会委員長就任、27年7月同委員会廃止と共に退官　▽30年6月世界経済調査会理事長となり今日に至る。兼職多数
▽著書『当来の経済学』他多数
〈好きな言葉〉「一即一切、一切即一」

時の流れと父の一言

菊池　功

「いらんことは言うな」。もごもごと話をする父と家庭で対話は少なかったが、子供の時からを振り返ると、妙にこの言葉が蘇ってくる。長男でありながら中学後半から大学まで下宿生活が多く、親父からの意見の機会は少なかった。しかし晩年上京の度に、我が家で、近くにいた妹家族の孫達も集めての会話の中に数々の思いを感じる。やはり明治生れのテレが直接息子への対話にあったのではないだろうか。

今手元に保坂正康著『父が子に語る昭和史』がある。昭和における出来事がその時代にどんな背景で起り、当時はどんな見方をされていたかを書かれた本として、昭和に生きた私には生き生きしたものを感ぜられる。私の友人に昭和元年十二月二十五日生れがいる。まさに昭和そのものである。私達の成人した時代は今の世界以上に日本人にとって激変の時代であった。正しいと教えられ、信じてたものが覆る。苦しさの中から楽しさ、幸せを生み出して来る。世の中の出来事と無関係に、小さな幸せな家庭はどこにも、いつでもある。しかし父親は社会人として、思想的にも生活の上からも、時代の流れの中で生きてゆく。そしてその考えは子供へ伝わる。今父親として子供に何を語り残すかを考えると、歴史の激動中、昭和で育まれた日本人としての考えが、21世紀を生きる子供達へ、そして国際社会で活躍する日本人として親の一言

の重大さを感じる。

最近家内から私が何か話を始めると、「おじいちゃんに似てきたね」と言われる。どうも言葉尻が明確でないのは親譲りらしい。私も子供に「いらんことは言うな」と言い伝えるが、今の時代は、次の時代に「いることは明確に言え」と言い添える。

菊池　功　昭和3年7月生　大分県出身
▽慶応義塾大学工学部機械工学科卒、昭和27年㈱安川電機製作所入社、53年取締役、60年代表取締役社長、現在に至る
▽㈳日本産業用ロボット工業会理事、㈳日本電機工業会理事、㈳経済団体連合会常任理事、極限作業ロボット技術研究組合理事長、㈳九州・山口経済連合会監事、㈶北九州活性化協議会理事長を兼任
▽平成元年11月藍綬褒章受章

禍を転じて福となす

北田光男

私の今日があるのは、若い頃、幾つもの失敗と挫折の坂を越えたからだと思う。

最初のつまづきは、入試と就職試験の失敗だった。狭い国土に資源とてない日本で、少年時代の夢は広い海を相手に水産関係の学究になることだった。それで大連中学（旧満州・現中国）を出ると、北海道大学の専門部を受けたがみごとに失敗。しかたなく東京の高等商業を出て、満州屈指の南満州鉄道を受けたがこれもまた不合格。そこで、止むなく両親のいる大連に帰り、関東州庁の大連税務署や国策会社の日満紡績、最後は奉天商工銀行の新京支社などに勤めた。この間も、父の建築請負いを手伝わされたり、新興工業都市通化でホテル業をしていた父親に「家業を手伝え」と呼びもどされて、ホテル支配人もやらされた。父の仕事はいずれも成功していたが、そんな父の事業を受け継ぐ気は初めからない。いつも「これが人生を賭けるに値する仕事か」というのが、どこか心の片隅にひっかかっていて、一箇所に永く落ち着かなかった。

終戦の年、奉天商工銀行に勤めて三ヵ月後召集を受け、通化の陸軍に入隊したが、幸いに転戦もなく命ながらえて昭和二十二年、引揚船で博多に上陸した。

当時、祖国はまだ飢餓線上の混乱時代。生まれ故郷の八代に財産があるわけではなし、幼い

頃大連に渡ったので知人がいるわけではなし。胸を張って売り込める学歴、学閥もなければ、仕事を転々としているから「これなら一人前」という職歴もないので、雇ってくれる会社もない。しかたがないので古自転車を買って水道機器のブローカーを始めた。もっとも嫌いな商いの道だった。

この仕事は従業員八十人ほどの会社になったが、エネルギー革命のあおりを食って二十八年に倒産した。その後三十一年に福岡でテレビ放送が始まったので五坪の土地でテレビのバーゲンセンターを始めた。ベスト電器の原型である。

私の今日は大学入試からエリートコースへの就職の失敗と戦後裸の引揚げ。やっとひと息ついた会社の倒産と、学歴、職歴、財産、系列メーカーの支援など何も無かったことが幸いしたと思う。「人間万事塞翁が馬」――学歴、財産、大資本の庇護があったら今日の私はなかった。

北田光男　大正3年3月生　熊本県出身
▽昭和12年巣鴨高商卒、卒業後大連に渡り幾多の職業を遍歴、▽20年6月応召▽25年九州鉄管継手㈱を設立、28年九州機材倉庫㈱を設立、31年3月テレビ販売業「バーゲンセンター」の看板を掲げる、47年「ベスト電器」に社名変更▽56年㈱ベスト電器取締役社長、61年取締役会長、現在に至る
〈好きな言葉〉「天は自ら助くるものを助く」

矛盾を私は課題と考えたい

木村照彦

つい最近のこと、ＮＨＫによる「討論ＮＨＫ」が放映されていた。一般視聴者もビデオによって参加し、会場もスタジオだけでなく何箇所か他の集合場にも設けられ、多元的な放映でありました。

討論の模様は、多様な参加者のため、料金、番組の問題にしても、ニュース性を強調する人、それに対し一層くわしくコメントを求める人など相対立する意見もあり、閉じられた輪の中の討論で何時果てるか計られないものでありましたが、人それぞれに立場があり、どれ一つとっても一つの意見として面白いものでありました。

ステージからの放映は学識者の討論であり、民放との対比、公共性と収益性、地上波と宇宙波いずれも複雑に絡み合い、短時間に結論を得ることの出来ない討論が続きました。この討論も一般の人々の討論と同様、私自身には物の見方、考え方を整理するには面白く有益なものでありました。

この討論会は、概して申せば、ＮＨＫのかかえる矛盾をそれぞれが立場を変えて論じておるのだと私には思えました。人間社会で色々営んで行くためには、多くの相入れない事象に遭遇するのでありますが、その場合、私共はそれを矛盾と片付け埒外に置こうとする事実を認めざ

るを得ません。

この討論会においても、ある識者がそれはＮＨＫの持つ矛盾だと上手に片付けようとなさったのでありますが、その瞬間、他の一人の方が発言を遮って「矛盾を私は課題と考えたいのです」と発言されました。私は目の前に垂れ下っていたカーテンがパッと開いて明るい日射しがさして来た思いでありました。なんと爽かな、なんと勇気ある、ものを見る目の正しさ、切り口の鋭利さ等々私の知る限りの感嘆の言葉が鈍なる私の脳裡を駆け廻りました。

「矛盾を私は課題と考えたい」

なんと素晴らしい思索の行為であり、表現ではないかと感じ入ったのであります。

因みにこの論者は三善晃氏と記憶しますが、詳かにその方については知りません。

木村照彦　昭和2年3月生　福岡県出身
▽昭和26年九州大学工学部卒、エトナ・ジャパン入社
▽30年株式会社山城屋入社、45年同社取締役社長就任、現在に至る
〈好きな言葉〉「矛盾を私は課題と考えたい」

本心に従え

工藤憲男

「本心に従って生きなさい」というのが、仏教の教えの基本です。人間は多かれ少なかれ劣等感があるため本心に従うには勇気がいります。しかし、本心で生きることが真の自由です。本心に従うことで、人間はどんな困難にもめげぬ勇気を持つことができます。本心に従えば潜在意識がいきいきと活躍して、問題の壁を越える知恵を授けてくれます。まさに一切の功徳が本心に備わっています。

本心の「自分」は、個人の利害に固着するエゴイスティックな「我」ではありません。日本チームとソ連チームが競技しているのをテレビで見ているときは、日本チームの一挙一動が「自分」の動きと感じられます。日本チームが負ければ自分が負けたように感じます。その時の「自分」は日本チームと一体です。テレビ画面で、インベーダーがUFOに乗ってニューヨークを攻撃しているのを見るときは、「自分」がニューヨーク市民と一体になってインベーダーと戦っている気持ちになります。

長く伸びた爪は切り捨てますが、生爪は「自分」の一部ですから、はがされるのは気絶するほど痛いです。足を切断するのは死ぬほどつらいですが、「自分」の命を救うために腐り始めた足を切って捨てます。家族の生命の危機には個人の命は投げ出せます。民族の命を救うため

には家族全員が犠牲になることもできます。人類の危機に際しては、ひとつの民族が全員犠牲になることさえできます。

本当の「自分」という意識は、爪の段階から人類の段階に至るまで、そのときその場に応じて大きくもなり小さくもなります。なまじ分別心で判断せず「無分別」に本心に従えば、どんな困難にも屈しない勇気と知恵が沸いてきます。禅宗で説く「無我」の境地というのは、個人に固定した「我」を捨てることで、そのときその場の本心に素直に従う境地をいうのです。

生命には細胞単位の水準から、臓器、個体、家族、市民、国家、人類と段階を経て高い水準があります。そのときその場に応じた生命を守るために、本心が正しい指示を与えてくれます。生命体は生命の指示に従うほかに生きる道がありません。本心を通しての生命の指示に従うほかに幸福の道はないのです。

工藤憲男　大正15年9月生　香川県出身
▽昭和25年京都大学理学部卒、川岸工業株式会社入社、32年専務就任
▽42年川岸興産株式会社に移籍し専務就任、経営士事務所開設
▽49年北九州経済懇談会・北九州経済研究所長就任、現在川岸興産専務、北九州経済研究所長
▽著書『都市の経営』

教えのひと言

倉光晴爾

父親を知らない人は沢山いると思う。山本玄峰老師は幼時、籠にふせられて路傍の寒風の中に捨てられてあった。

青年時代、眼疾が進み、全盲近くなって、遍路に出され、途中、道に行き倒れたが、太玄和尚に助けられて出家した。縁くらい恐ろしいものはないと述懐されている。

私は父親を知らないが、有難いことに父に代わる、さらにはそれ以上の明師良友に恵まれて今日に至っている。

かつて東京大塚の護國寺における全國師友協会の研修会の最終日、終講式のあとの懇親会の席、宴も次第に酣となり、三々五々屯して酌み交し語り合っていた時、ふと先生の席を見ると、皆は気のむくまま、夫々車座になっていて、先生の席には誰も行っていないのを幸いに、かねての疑義を糺すはこの時と思い、侍座して、深く挨拶し、酒を注いで――其の頃は剣道に熱中しており、色々なことを考えていた時なので、思い切って単刀直入に「人に対する時、まずこの人は斃せるか、どうかということを念頭において、相手を見ることはいけないことですか」とお尋ねした處、途端に先生の眼鏡の奥がキラッと光って「それはいけない、この人は愛せるかどうかということを念頭において見なければいけない」と。誠に愚かな質問である。先生の

学は「仁」の学である。愚かな質問に、大変な教えを頂いた。

また、ある席で村上素道老師の語られたお話であるが、当時老師は京都山科の永興寺におられたある夏の夕暮、二、三の知人とともに三条の橋の袂で夕涼みの時、たまたま通りかかった某氏が急いで通り過ぎようとするを呼びとめ、

老師「暫く涼んで行かないか」某「忙しい」老師「何で忙しい？」某「働かなけりゃ」老師「働かなけりゃどうなるんじゃ」某「働かなけりゃ食えんじゃないか」老師「食えなきゃどうなるんじゃ」某「食えなきゃ死ぬじゃないか」老師「食えたら死なんかい」

某氏はそのまま行き過ぎたが、老師の一言「食えたら死なんかい」が耳底に焼きついて二ケ月余りも考えあぐね、遂に永興寺を訪ね、法の道を聴くことになったという。一言の重みを深く考えるのである。

倉光晴爾　明治43年12月生　福岡県出身
▽昭和6年小倉師範本科一部卒
▽金雞学院受講
▽企業内教育研究会事務局
〈好きな言葉〉「人は縁によって生きる」

愛のある心の豊かさを

栗岡博良

私は昭和十二年生まれですから、若い人達の経験していない戦前、戦後の物不足の時代を知っています。

今日のような物の豊かな時代の来ることは誰も想像しなかったことでしょう。

戦後の復興は国民全体が一生懸命になって励んだ賜物と思われます。ところが、この豊かさの中で心の貧しさの目立つ日々であります。他人のことなどどうでもよい、自分さえよければと思うような心の枯渇した時代は過去の日本社会にあったでしょうか。心の豊かさを取り戻す必要があります。これからの経済大国としての義務かもしれません。心豊かな経済大国こそが真の大国ではないでしょうか。

日本が世界に貢献するには、まず、何をすべきかと言うと、自分達の物質文明の豊かさをセイブすることが出来るかということです。

先日の国連人口問題白書によると、「急速に増え続ける世界の人口が来世紀に於ける人類の生活の質を決める鍵である」と危機を訴えている。

人口の増加に伴って公害が増加し、異常気象となり、このままでは自然が破壊され大変な時代が到来することは予測できるわけであります。

世界の民族が、好き勝手な物質文明の豊かさを追求すれば地球はあと何年ももたないかも知れません。我々は贅沢してもよいが、他国はだめだと言えないのであります。我々は物質文明にいたみを感ずる生活をしてこそ、また実践してこそ、他国に豊かさの手助けと指導が出来るのではないでしょうか。そこで公害のない秩序ある発展を指導すべきなのであります。我国の知識と心の豊かさをもって過ちのない指導と援助をすべきで、決して利益優先の援助であってはいけないのであります。低開発国、特にアジアにおける技術援助はこれからの若い人達に課せられた責任であります。技術指導大国になることが日本の今後の生きる道であります。地球も人類もあらゆる生物も愛のある豊かな心で保護育成することではないでしょうか。皆さんが信頼され世界で必要とされる人間になって下さい。

栗岡　博良　昭和12年7月生　大阪府出身
▽昭和41年大阪歯科大学大学院卒、歯学博士号を授与
▽42年医療法人和幸会、阪奈サナトリウムを設立
▽46年阪奈産業株式会社設立、取締役社長に就任
▽53年阪奈中央病院設立、同年8月医療法人理事長に就任　▽58年6月社会福祉法人幸友会理事長に就任
▽59年4月特別養護老人ホーム設立
＜好きな言葉＞「和顔愛語」

子供のように夢を

クロード　バスチ

「私は希望を実現できなかった夢の犠牲者の一人ですが、生きている限り諦めてはいけないので今日もまた新しい夢をみています。顔色が違っても、全世界の人々がクリスマスの馬小屋を囲んで、兄弟のように心を一つにして神の栄光と世界の平和を喜びながら歌う日がもうすぐです」

マハトマ・ガンジーの非暴力抵抗主義で反戦平和と人種差別撤廃を訴え続けたアメリカのマルチン・ルイス・キング牧師は、有名な「わたしには夢がある」の演説でこう述べました。一九六八年四月、キング牧師は凶弾に倒れましたが、牧師の夢は一歩いっぽ現実に近づいています。

キリストは「大人は心を入れかえて、子供のようにならなければ決して天国に入ることはできない」と言っておられます。その意味は、どんな失敗や苦労に出会っても情熱を失わず、常に明るさと喜びを持って積極的に未来に向かって準備するということです。

子供たちは、どんな国、どんな時代の子供であっても、あのアントワーヌ・ド・サンテグジュペリの『星の王子様』のように物事の良さや美しさを見ているので、明るい明日をつくるためのものすごいエネルギーを持っています。子供の心にある炎を消してしまえば私たちにも全

世界にも未来はありません。

私は学生時代に英国の詩人キープリンの作品を読んで感激したことを今でも忘れません。それは「真の人」という題で「もしあなたが若い頃から自分の一生の目標として大きな仕事に取り組み、何十年もかかっていろんな困難を乗り越え、やっと成功の一歩手前までたどりつきながら、その一生をかけた仕事が一度に崩れ去ったとき、あなたはそれを見て『もうダメだ』と言わないで『もういっぺんやろう』と言う人であるなら、そういうあなたこそ真の人だ」という内容です。人間の本当の価値は、人が成功したときの満足した顔ではなく、失敗したときの態度によって初めて解ります。

どんな苦境にあっても、子供のように美しい目をして夢を持ち続ける。そこに人間の価値があり、未来が開けると思います。

クロード　バスチ　(Claude Bastid)
▽一九二四年パリに生まれる。ベルサイユ神学校を経てパリ・カトリック大学卒業、一九四七年パリミッション会にて司祭叙階、その後、中国の貴州にて三年半宣教活動　▽一九五二年来日、北九州戸畑カトリック教会主任司祭、一九六一年小倉カトリック教会主任司祭、小倉・宮ノ尾カトリック幼稚園々長を兼任、一九九〇年八王寺カトリック教会
▽著書『子供とともに人生を』『キリストの喜びの道』

仕事ができんとお茶が貰えん

古浦　誠一

人は誰でも周りの人によく見られたいと思っている。男同士でもそうだから女性を交えた職場のなかではさらにその思いは強くなる。若いサラリーマンが職場のＯＬに好感を持たれたいと願う気持は昔も今も変わらないが、近頃、若い人達の気持のもちかたが変わってきたようである。カッコよい服装や面白い会話など大いに結構なのであるが、それだけではけっして女性の心をひきとめはしない。

私は終戦直後、旧制の商業学校を卒業した。当時は大学進学率も低く、特に商業学校では完成教育といって、卒業すればすぐ社会へ出て行くというのが当然のことであった。それぞれに就職先も決まって卒業を間近に控えた或る日、商業科担任の教師が社会人一年生の心得を懇切に話してくれたのだが、そのなかにこんな話があった。

「君達はこれから会社や商店に勤めることになるが、どこの会社にも必ずベテランの女性が居るものだ。会社に入って一番初めに気をつけねばならぬのがこの女性社員である。何故ならば、会社に入るとすぐ今度入ってきた男の子はどの程度のレベルだろうかと、さりげなくテストをされるに違いない。例えば、仕事の暇な時を見計らって既に計算済みの伝票綴の検算を頼まれたとする。モタモタして答でも間違っていようものならもう駄目だ。その時には遅いとも、

違っているとも言われないが、明くる日からまずお茶は貰えないものと思え」

この話を聞いて級友一同皆んな驚いた。サァ大変！　試験勉強のような生易しいものではなくて、下手をすれば自分の惨めな姿が眼の前に浮かんでくるのだから一生懸命である。読み書きソロバンの猛訓練をしてようやく「これならよかろう」と教師に言われ胸を撫でおろしたものである。

ところで、会社に入ってどうであったか。まさに教師が事前に打ち合せでもしておいたように、読み書き算盤の順でテスト（？）を受けた。今日はお茶が貰えるだろうか、明日はお茶が出てこないのではなかろうかと、ヒヤヒヤ続きで、瞬く間に二～三ヶ月が過ぎたような記憶があるが、私にとって卒業前のこの話ぐらい役に立ったものはない。その恩師の名は、すでに故人となられたが母校の先輩教師中川力先生。先生にはその後、仲人になって戴いた。

古浦誠一　昭和5年7月生　山口県出身
▽昭和24年市立下関商業学校卒、石油販売会社勤務を経て27年丸食グループ入社
▽現在、株式会社福岡丸食代表取締役
〈好きな言葉〉「須らく臨終の事を習ひて後に他事を習うべし」

五省の心

古賀圭二

私の居間には次の五ヶ条の言葉を記した「五省」の額を掲げている。

一、至誠に悖るなかりしか
一、言行に恥ずるなかりしか
一、気力に缺くるなかりしか
一、努力に憾みなかりしか
一、不精に亘るなかりしか

この「五省」の言葉は、海軍軍人の生き方を示した東郷元帥の遺訓といわれている。

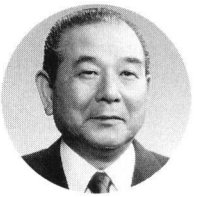
昭和十九年十月、私は海軍兵学校第七十六期生徒として江田島本校に入校した。兵学校生活は終戦までの十ヶ月余と短い期間ではあったが、私にとって極めて精神的に高揚した日々であり、生涯を通じての密度の濃い、充実した一時期として忘れ得ないのである。

兵学校では、各学年の混成で組織する五十人以下の分隊を単位として、常時生徒館で起居を共にする大家族的な形をとった。分隊員は恰も家庭での兄弟と同様であって、上級生は学習面から礼儀作法に至るまで総てに亘って下級生を指導するというやり方である。この分隊生活の中で、毎日の日課の終わりに当って、その日の行動を反省し自らを律すると共に、明日の誓い

をもこめて斉唱したのがこの「五省」である。就床前のこの一時（ひととき）、一号生徒（三年生）が五ヶ条の一つ一つについて三号生徒（一年生）の自省を促し、反省の足りない生徒には敢然として怒号にも似た説教と共に鉄拳修正が加えられるといった厳しい精神教育がなされた。しかしそれは、最近社会問題化している教育現場での体罰とはやや趣を異にしており、共通した死生観に根ざした同志としての深い愛情が込められていたと思う。私もこの時代に数え切れない程の鉄拳を浴びたのであるが、今でもそれは爽やかな思い出としてのみ脳裏に蘇るのである。

この「五省」の心は、己を厳しく律してそれに堪え、それを超えることによって自己の資質が磨かれ、他に臨むに当っての心構えも自ずと備わることを教えたものであると思う。

戦後社会に生きて四十有余年、「五省」に照らして遺憾の思いのみ多いのであるが、折にふれ、事に臨んで「五省の心」は私自身を内面から支え励まし続けてくれたと信じている。



古賀圭二　昭和2年12月生　福岡県出身
▽昭和19年海軍兵学校入学、22年明治工業専門学校電気科卒、九州配電株式会社入社、26年電気事業再編成により九州電力株式会社へ、58年同社取締役企画室長、62年常務取締役
▽平成元年九州電気工事㈱代表取締役就任、同年㈱九電工と改称
〈好きな言葉〉「誠実と努力」

自らの心を省みて

小早川　明　徳

この原稿を機に自分の人生観を厳粛に再点検させられ、新たな発見に驚かされている。変わらないものは、〝社会への熱い想い〟。変わったものは〝挑戦から冒険へ〟の心の姿勢。そして、心からの感激は〝よくぞ生きて在り〟である。

「あなたのモットーは」と聞かれると、私はよく「ひとを活かし、地域を活かし、国の在るべき姿を求めて歩む」と言う。この自分自身の指針を現在の仕事でストレートにぶっつけることのできる幸せは何ごとにも替えがたい。

私は厄に入って多くのことを勉強させられた。一つは高度成長期を終えた日本と同じようなアンバランスな状態が自分の職場にも家庭にもある。無理を重ねたひずみである。仕事では、よくやったとか、努力したとか、頑張ったということは当たりまえのことであり、どれだけ人から求められる結果を出し得るかの唯一点に尽きるということも判った。

また、自分が知らないところで自分が語られ、自分がいないところに自分が存在するということを感じた。それは、ひとの力を借りて仕事をする年代になった証しであろう。二十代は社会の何たるかを知らないまま挑戦をして、三十代は仕事一途に〝たたかい〟の連続であった。では、これからどうするか――これは、自分の人生折り返しの最初の〝公案〟、やはり挑戦し

かないとの結論に達した。しかし、この挑戦は、あれもこれもするということではなく、照準をさだめ、その目標のためには今までのことを捨てる勇気も必要になるということである。

福岡コンベンションビューロー設立の時、幕張メッセ、みなと未来、神戸ポートピアのプロジェクトを視察してわかったことは、中途半端に自分の力でやっていくのではなく、国の力を借り、国の英知を借り、国を動かす人の汗を借りてこそ大事業が展開できる。自分の人生においても、人の力を借り、人の知恵を借り、人の汗を借りていかねばならないと教えられた。それにしても、人生〝節目〟を持つことはすばらしい。

小早川　明徳　昭和21年2月生　福岡県出身
▽昭和43年福岡大学経済学部卒
▽九州製罐工業㈱取締役副社長
▽52年㈳福岡県中小企業経営者協会専務理事
▽通商産業省民活アドバイザー、国際協力事業団青年海外協力隊カウンセラー、九州21世紀委員会委員、福岡商工会議所常議員
〈好きな言葉〉「直心行、驀直去、含虚蓄実」

貴重な体験

近藤　貢

敗戦の記念すべき日が、今年もやってきた。「おやじ」という声にふりむくと、「おやじが軍隊にいったというのは、貴重な体験といえるね」と、テレビを見ていた息子がいう。「うん、まあ、そうかな」なんて不意の語りかけにどういえばよいのか、まことに曖昧な返事になってしまった。

考えてみると、大正生れも高齢化したこの頃のこと、軍隊体験者もかなり少なくなっているにちがいない。それだけに「軍隊体験」に稀少価値が出てきたのかなと思いもする。

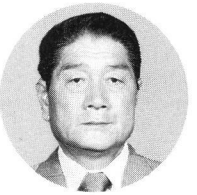
私の「貴重な体験」は僅か半年という短い間のものではあったが、それは古年兵の陰湿ないじめに堪えぬいた暗く長い時間でもあった。同年兵にKというのがいたが、毎日毎日の古年兵のしうちに堪えられず、二度、三度と、越えられるべくもない兵営からの脱走をはかり営倉に放りこまれた。彼は完全な対人恐怖症になっていたようで、七月一日の空襲時に、救けようとする兵隊の影におびえ、救けの手を振りきって営倉内で焼け死んだと聞いた。

ここ数年来、学校内外の「いじめ」の話を聞く度に、かつての日本軍隊での内務班生活を思い出す。私の「貴重な体験」は今はもう遙か遠く幻に近いものになってしまったが、戦後今日までの人命尊重、人権擁護の五十年にも及ぶ歩みをもってしても、人間の本質は変るべくもな

いのかな?と絶望的な思いにかられもする。

とにかく新しい憲法のおかげで、私は二人の男の子を軍隊（戦争）にとられずにすんだ。現在、男の孫が二人、彼らも軍隊にかり出されることはあるまい。まことに幸せなことであると安心している。今日、中東における一触即発の緊迫した情勢に、いささかの不安は感じながらも、現実に銃火のとびかうことはあるまいと、希望的に観測しているのだが。

戦争のない世界、軍備のいらない世界、21世紀はそんな時代であると信じたい。



近藤　貢　大正15年2月生　福岡県出身
▽昭和22年鹿児島経済専門学校卒、九州女子学園教諭、43年同校校長、53年同学園理事長
▽福岡県私学協会会長、福岡県私立学校審議会会長、福岡県私学教育振興会理事長

平和を守る有効な方策を

後藤達太

大正生まれの私達世代にとって、生涯の前半はファッシズムと戦争による圧政、苦難の時代に当り、自我の形成期に当る旧制高等学校在学中に太平洋戦争が勃発したが、自治と友情を標榜する寮生活の伝統がかえって環境の抑圧に反撥して、自ら思索する習性の芽を育ててくれたように思う。

高校同級生三十数人のうち、終戦時にはすでにその三分の一が不帰の人となっていた。学業半ばにして戦場に赴かざるを得なかった彼等がいかに心身の苦悩に堪えて愛する祖国を護るために勇しく戦ったかは、終戦直後に発刊された『聴け、わだつみの声』（戦没学生の手記）に鮮やかに記録が残っている。大正生まれも決してひ弱ではなかった。

終戦後の目覚ましい経済成長は、国民生活と物質面で飛躍的に豊かにしたが、その精神面の向上は、果たしてどうであったろうか。

しかし、今日なお日本ばかりが戦争の仕掛人と勘違いしているのではないかと思われるような平和憲法の維持など、現実には全く意味のないスローガン的評論のみが時々空しく聞こえるばかりで、平和を維持する有効な方策は未だ望むべくもない。一方、武力が国際間の問題を解決する現実的な方策だと思っている国は意外と多いのが現実である。

しかもさらに不本意に思われるのは、自由の裏腹をなすべき責任を明らかにする勇気が失われ、また全体主義と国家とが同義と誤解されて、国家や国旗に対する一部の感情的な反撥に代表されるように、この祖国の誇るべきところに眼をつぶり、その過去に犯した過ちばかりをあげつらう向きが少なくないことである。今必要なことは、愛する祖国に戦争の累の及ぶことをいかにして回避するかの有効な具体策を研究するとともに、一朝有事の際若者達が身を挺して祖国を護る勇気を養うような教育を充実することではなかろうか。それにしても世間でよくいわれるよりも、今の若き世代はずっと賢明であり、生き方に真剣である。将来思わざる災難がわが国にふりかかったとき、さきの戦争で示された私達の世代と同様、あるいはそれ以上の勇気をもってこの国を守り抜いてくれることを祈りたい。

後藤　達太　大正12年10月生　東京都出身
▽昭和22年東京帝国大学法学部卒業、大蔵省入省、50年関税局長、51年銀行局長、54年日本航空常務取締役、59年同専務取締役
▽59年西日本銀行取締役会長、63年西日本銀行取締役頭取、現在に至る
〈好きな言葉〉「心に太陽を持て、唇に歌を持て」

鼻(はなむけ)の言葉

後藤豊彦

最近の結婚式は、披露宴も随分と盛大に行われるようになり、私も折々、お招きを戴きお慶びのご挨拶を申し上げる機会が多くなった。しかし、披露宴で初めてお目にかかる新郎新婦に対する鼻の言葉となると全く閉口してしまう。

今からちょうど三十年前、私共が結婚した折、ご媒酌人から賜った味わい深い鼻の言葉に感動し、爾来、私はこの言葉を自分自身の座右の銘として今日まで指針としてきた。そこで最近では新郎新婦にこの言葉をそっくり贈り鼻の挨拶に代えている。それはリヒターの次の言葉である。

人生は一冊の書物に似ている。
愚かな人はこれをペラペラとめくってゆくが
賢い人はこれを一頁一頁丹念に読んでゆく。
何故なら人生と言う書物は
たった一辺きりしか
読むことができないからである。

長い人生設計の中で、大きな節目となる新生活のスタートに当ってのふさわしい言葉だと思

うし、また結婚を離れ、春秋に富む若い人々を励ます言葉としても適切な言葉だと思う。

さて、湯の町別府に猿の群生地として名高い高崎山がある。この山の中腹に万寿寺の別院があり、住職の大西禅師は、この猿を飼い馴らしたことで有名であった。その後、日本三戒壇のひとつと称される太宰府の戒壇院の住職に転じられ、爾来、親しくご交誼を戴き、お話を伺う機会も多かったが、この大西禅師の持論は「人生にとって一大事とは今日只今のことにて候」という言葉であった。私はまたこの言葉に深い感銘を覚え、色紙にしたためて頂いたが、リヒターの言葉にしろ、この禅語にしろ、人生の一日一日を、そして一頁一頁を明るく、元気に、また意義深く生きることの大切さを教えてくれる言葉としての重みを感じる。

若人の夢は大きく、これから未来へ向って力強くはばたかんとする青春の日々にとって、この一日一日の大切さをあらためて考えさせる含蓄のある言葉として若い人々に贈りたい。

後藤　豊彦　昭和4年2月生　福岡県出身
▽昭和25年旧制大分経済専門学校卒、福岡銀行入行、赤坂門支店長、業務推進部長、取締役北九州本部副本部長、常務取締役業務本部長、専務取締役北九州本部長
▽現在代表取締役副頭取
〈好きな言葉〉「限りなきものと知りつつ、限りなきものを求めて」

意志は力なり

榊原重男

銀行の頭取になっている二十名の人に「あなたは若手行員の頃から、将来頭取になりたいと思っていましたか」と質問したら、八〇％に当たる一六名の頭取が「そう思っていた」と答えたと言います。残りの四名は部長クラスになってからそう思い始めたそうです。

勿論、なりたいと思っていればなれるというものではないが、しかし、なりたいとも思わなければまずなれなかったでしょう。頭取になりたいという意志を常に持ち続けていることによって、モノの見方、考え方、身の処し方が「なりたいとも思っていない人」とまるで違ってくるでしょうから、恐ろしいと思います。そしてこのことが、結果として頭取への本流を登って行くことになるのでしょう。何ごとも「やろう」という決心がつけば、その半分は成就したようなもので、あとは初心を持続する意志の力と努力、そして運ということになるのではないでしょうか。

人の生死を分けるのでさえ、意志一つだと実感したことがあります。風化したような咄（はなし）で恐縮ですが、昔私の所属した中隊の主力が壊滅したノモンハンの戦場でのことです。戦車の重囲下で敵砲兵の集中射を浴び、左骨盤腔内に砲弾の破片をぶちこまれて下半身一糸まとはぬ裸のまま草原に伏せて、戦車への肉迫攻撃を待つ間、ポケット・ノートに大きな字をなぐり書いた

遺書めいた日記が今手許に残っています。

「あと二～三〇分の生命だ。いよいよ最後だ。山崎大尉殿やらる。鈴木曹長同じ。敵二～三〇〇米に近寄る。天皇陛下万歳」

ノートと戦車を半々に見ながら五回位に分けて書いた遺書ですが、最後の六文字も書き終えたんだから、もういつ死んでも心残りはない、という気持のある反面、俺にはもうタマは当たるまい、という勝手のいい思い込み、そして「死んでたまるか、生きるんだ!!」という強い意志が最後の最後まで私を衝き動かし、それが「ツイテイタ運」を確実にモノにして、死斗を繰り返し不思議な「生」を得たのでした。

あのとき、この意志を持っていなかったら、気力、体力は破断界に達し、拾えた命も自ら放棄していたに違いない。正に、「意志は力なり、命なり」と実感しています。

榊原重男　大正6年11月生　長野県出身
▽昭和19年陸軍士官学校（航空）卒業、仙台陸軍飛行学校幹部候補生隊区隊長で終戦
▽23年株式会社前川製作所入社、25年取締役就任、56年代表取締役副社長、平成元年常勤顧問
▽株式会社高原社社長他関連8社の取締役、財団法人和敬塾理事、朝霧ジャンボリーゴルフクラブ副理事長

小さな親切を心掛けよう

迫田　太

終戦の昭和二十年秋、中学二年生だった私は京城（現ソウル）から母と姉四人、それに長姉の五歳の息子の計七人で両親の故郷である鹿児島市へ引き揚げてきた。父が京城の師団からニューギニア戦線へ参加して戦病死したあとだった。釜山港から千トンほどの貨物船「千歳丸」の船倉に詰め込まれて鳥取県の境港に着いた。

当時、釜山からの引揚船は博多港か仙崎港に入港していたのに、私たちの千歳丸は、境港で帰国便を待っていた戦時徴用の韓国人たちを運ぶために境港に着いたのだった。引揚船が常時入る港ではなかったので、引揚者の受け入れ施設は全くなく、リュックに着の身着のままで上陸はしたものの、すぐに乗れる汽車もなく途方に暮れてしまった。

そこへ通りかかった中年の理髪店主が「うちに泊まって汽車を待っては」と声を掛けて下さった。私の一家のほか二家族三人も一緒に理髪店の二階で床についた。食糧不足の時代だったのに食事や風呂の心配までして下さり、息苦しかった船倉から解放され、故国のありがたさをしみじみと味わった。

車窓から乗り降りするほどの超満員の汽車に揺られて下関に着き、鹿児島を目指して門司港へ渡ったところでまた汽車がなく、立ち往生してしまった。ところが、ここでも救いの神が現

れた。国鉄の機関士の方が私たちの姿に同情して門司区（当時門司市）大里の自宅に案内して下さった。この思いがけない好意の連続に励まされて無事、鹿児島の土を踏むことが出来た。

今でこそボランティア活動など善意の運動が各地で活発化しているが、敗戦で人の心が荒廃した引き揚げ当時、母国で受けた人の情はどんなにありがたかったことか。私は少年時代に受けた〝思いやりの心〟を忘れることは出来ない。

最近、困っている他人には目を向けず、手も貸さずといった風潮が一部にあるのは残念だが、一方で、茅誠司元東大学長が提唱され、全国に広がっている〝小さな親切運動〟が、思いやりや親切心を育てているのはうれしい。

私も境港や門司で受けた善意を忘れず、家内や二人の娘にもこの気持ちを伝えている。

迫田　太　昭和7年3月生　鹿児島県出身
▽昭和29年鹿児島大学農学部卒、毎日新聞社入社、大阪本社編集局長、同本社役員待遇副代表兼販売局長、62年6月取締役西部本社代表
＜好きな言葉＞「誠実」

北極星を胸に

四島　司

春は心の華やぐ季節ですが、私にとって一番嬉しいことは、フレッシュな若い人たちを銀行に迎えられることです。

毎年、四月一日。当行の明日をゆだねる、選ばれた駿秀たちの入行式がおこなわれます。新しい人生のスタートに当行を選んだ人たちへ心からのエールをおくりたい。その思いが胸いっぱいに……、歓迎の言葉をのべています。

二百数十名の若い人たちの真摯な顔をみながら、私は雲海の彼方を眺めているような、茫洋の思いにかられます。未来が目の前にいっぱいある。そのまぶしさに搏たれるのです。私の志が、この人たちによって大きく明日へ広げられる。昂揚した気分になって、一人一人に話しかけたくなるのです。

そこできまって、「北極星を胸に」と申します。北極星は天に不動の位置を占めて、太古から舟行の道しるべとされ、転じて理想のシンボルとされてきました。

快適な生活をしたい、豊かに暮らしたいとは誰しも望むことですが、若い人たちの真骨頂は不正をにくみ、フェアプレーを愛し、志を社会にひろげるひたむきさでしょう。それを理想といってもいい。胸中の理想の灯を、いつもともしつづけ、大きくあかあかと燃え熾らせていく。

それを企業にひろげ、地域社会へ――。

北極星を胸に、いつまでも志をみがいていってほしい。若い人たちに、いつも私はそう願っています。

四島　司　大正14年1月生　福岡市出身

▽昭和24年慶応義塾大学経済学部卒、26年福岡相互銀行入行、44年同行社長、平成元年より福岡シティ銀行頭取

▽昭和56年～平成元年全国相互銀行協会会長、昭和48年～平成元年福岡商工会議所副会頭

▽在福岡イタリア共和国名誉領事、慶応義塾評議員、

▽毎日新聞第六回経済人賞受賞

天は自ら助くる者を助く

柴田　宰

私の父は陸軍の軍医で、勤務地の都合であちこちと転勤しましたが、住んだところがどこも海に遠く、しかも通学した小学校にプールがなく、私は幼い頃全く泳ぎを知りませんでした。

昭和十九年四月、大東亜戦争真っ只中に私は熊本陸軍幼年学校へ入校することになり、起床ラッパに始まり就寝ラッパに終わる、ラッパに追われた規則正しい集団生活を昭和二十年八月の終戦の時まで、貴重な体験をいたしました。

入校の時の夏十日間の水泳訓練が熊本の三角海岸で行われました。全く泳ぎを知らない人達は、赤い帽子をかぶらされて、鬼軍曹による特別訓練を受けることになりました。

最初の三日間は砂浜の上で膝小僧がすりきれるほど平泳ぎの練習を繰り返す。その後の三日間は海に入って背の届くところまで行って砂浜へ向って実地に平泳ぎをする。その後鬼軍曹が漕ぐ伝馬船に乗せられ沖へ出て、船の回りを集団でぐるぐる泳ぐ。そして最終日の十日目に鬼軍曹がたたく太鼓の音に合わせて二千五百米の遠泳に挑戦することになった。赤帽組の二十名位が隊列をなして軍曹の太鼓に合わせて泳ぎ、途中足がつったりするのを克服しながら全員無事に二千五百米を泳ぎきって砂浜に上がった時の足の重たさは今でも思い出されます。

私は現在、前田証券に勤務しておりますが、新入社員を前に社会に出たら「自助努力」を忘

れないようにということをいつも言っております。会社は新入社員が一人前になるように教育訓練は致しますが、自ら向上しようとする努力がなされないならば、何時までも一人前にはなれず、同僚からもおいてきぼりにされて、人生の敗残者となるでありましょう。

泳ぎ方を教わっても、自ら泳ごうとする努力がなされない限り泳ぐことは出来ません。即ち「自助努力」なしには泳ぐことも、人より向上することも出来ません。

熊本の三角海岸での体験を思いうかべながら自分自身に「自助努力」という言葉を言いきかせ、少しでも向上するように努力している毎日です。

柴田　宰　昭和5年1月生　愛媛県出身
▽昭和28年九州大学法学部卒、日本勧業証券入社、42年角丸証券と合併、日本勧業角丸証券となる
▽59年同社退職、同年前田証券入社、取締役副社長、60年取締役社長
＜好きな言葉＞「自助努力」「一期一会」

ネアカのびのび　へこたれず

関口宗利

銀行員生活も二十九年目を迎えている。客観的に眺めれば至って平凡な人生も子細に振り返ってみると、仕事の面また私生活上それぞれに山も谷もあった半生である。

特に三年前、銀行の命令で再建途上の某バス車体製造会社に出向した時の経験は極めて貴重な心の財産となっている。

初めて銀行の外に出て、大赤字を出し続けている会社の財務担当役員になったのである。再建策はうまくゆかず、目の前に大きな壁が立ちふさがった。

この時、私を勇気づけてくれたのは過去に出会った先輩、友人達の激励の言葉であった。

「朝の来ない夜はない」、自分に与えられたポジションを精一杯に努力して頑張れば、局面は必ず打開されるのだ。

元三井物産社長の八尋俊邦氏は、三井グループが総力を挙げて取り組んだイラン石油化学プロジェクトが失敗し、実に千数百億円の赤字を抱えて撤退に踏み切った時も「ネアカのびのびへこたれず」の精神で難局を乗り越え、今日の隆昌を導いたといわれる。

人生に難関はない。その時々に最善の努力を傾注し、精一杯生き抜くことで「あとは野となれ山となれ」、美しい素晴らしい視界が開けて来るのだ。

最後にいつも座右の銘として時折り反芻している言葉を挙げておく。これは清朝末期の政治家曽國藩の「四耐の教え」である。

〈冷に耐え、苦に耐え、煩に耐え、閑に耐え、激せず、躁がず、競わず、随わず、以て大事をなすべし〉

意は「とにかく世間は冷たいんだ、それに耐えていかなきゃいけない。生活は苦しいんだ、また煩わしいものだ。ときには左遷されて暇になったりするが乱れてはいけない。そして激せず、うまくいってもはしゃぎ過ぎず、人を押しのけるような競い合いをやらない。ただし人の言いなりになってはいけない。そうすれば必ず大きな仕事が出来るものだ」ということである。

関口宗利　昭和13年11月生　埼玉県出身

▽昭和37年東京大学法学部卒、第一銀行入社、46年10月合併により第一勧業銀行となる

▽現在同行北九州支店長

〈好きな言葉〉「得意淡然、失意泰然」

人間信頼

高田賢一郎

父が病に倒れて社長を継ぎ十五年が経ったが、この間、私自身も四十四歳から五十八歳となった。社長を継いだ時は、それ迄の社内業務にはほとんど精通していたので、社長になっても商売の上では何も困ることはないと思っていた。しかし、いざトップの座についてみると、一番困ったのが、人間同志の信頼関係をどうやって構築するかということであった。創業者の息子として扱われ、私自身に対する信頼の大部分は創業者に対する信頼の余光であり、私自らが発するものは微々たるものであった。それは創業者の側近の人達に特に顕著であった。

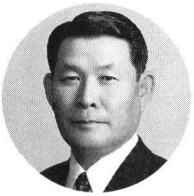
とにかく、恩顧を受けたのは創業者から。従って信頼しているのも創業者。息子は助けてやったと思っている実力者の諸先輩と、かなり自分を信頼してもらえていると思う同輩や後輩には実力が不足している。こういう状況の中で、自分と部下達の間にどうやって信頼関係を構築するか、実力がものをいうプラント会社としては最も大事なことであった。

円高不況が始まった昭和五十八年からの大不況により、当社も五十九年に大合理化をやった。この合理化により、労働組合ともギクシャクし始め、組合幹部からも私に対する信頼感は薄らいでいった。このままではこの会社は再起不能になるかもしれないし、また自分のプライドからいっても、死んでも死にきれない思いがして、昭和六十一年から全国の現場への行脚が始ま

った。現場の一人ひとりに触れ、「人員合理化」を詫び、二度とやらないことを誓い、新しい高田工業の将来を語り合い、励ましあった。

このことを全現場、全部門に行ない、足掛け三年かかって昭和六十三年にやっと終わった。その私の捨身の覚悟を眼前に見て、社員は奮いたった。しかも、私がいっていた空前の大型景気がやってきて、私の先見性に対する尊敬も拡まっていった。先端技術を組み込んだ新規事業、在来型の延長線上ではあるが、ニューマーケットの新規事業も徐々に軌道に乗ってきた。このことがさらに私に対する信頼を増幅することになった。

このことを通じ、人間同志の信頼関係を作るのに一番大切なことは、「体を張る」ことであり、長期を見通す「先見性」であり、何が何んでも実現させるぞという「執念」である。



高田賢一郎　昭和7年1月生　福岡県出身
▽昭和31年早稲田大学商学部卒、高田工業所入社、40年取締役、43年常務取締役、44年専務取締役、52年代表取締役社長、現在に至る

受けた恩は石に刻め、かけた情は水に流せ

髙藤昌和

「栄枯盛衰」「盛者必衰」「奢る平家は久しからず」――人生を生き抜くための師表となる金言はたくさんありますが、その中でも恩を忘れるな、ということは最も大切なもののひとつです。大自然の恩恵、親、兄弟、人、社会、企業と多くのお蔭を受けています。

私達は大自然の恵みを受けて生かされているのですが、人間の足りるを知らないあくなき欲望が自然を破壊し、環境を汚染し、地球を滅す結果になります。

「受けた恩は石に刻め、かけた情は水に流せ」という真の意味は、常に「お蔭様で」と感謝の気持ちを持つことによって、油断や奢りが生れる隙が生じないし、いつも謙虚に生きられるということです。謙虚であれば反省し、革新へとつながります。しかし、人間の悲しい業なのか、喉元すぎれば熱さを忘れるの譬えの如く、順境の時はつい油断、奢り、慢心という怪物があらわれます。そして受けた恩を忘れ、今日あるのは全て自分の力だと錯覚します。

近江の長浜では、今でも、木下藤吉郎と豊臣秀吉は別人であるといわれるそうです。理想に燃え、目標に向かって前進する木下藤吉郎は人々の幸福のためにりっぱな政治を行ったのですが、天下人となった秀吉は自分の力を過信したのか？年をとって老けたのか？別人のように変わったということです。

現在は日米間に構造問題や貿易、経済など種々の難問を抱えていますが、戦後、米国が日本の食糧危機や経済復興に手を差しのべた事実は忘れてはいけないことです。

逆にかけた情はいつまでも覚えていて、あれだけ骨を折ってやったのにとか、世話をしたとか、人を謗ることを平気でやります。本当に人間とは自分勝手なものだと反省させられます。

当社も四十五周年を迎えて今日までたどり着いたのも、お得意様、株主、銀行、取引業者、先輩、社員、地域の方々、同業者など多くの方々のお蔭を頂いたからだとあらためて感謝し、謙虚に反省し、次の五十年、百年を目指し、存在価値のある企業を目指します。

高藤昌和　昭和8年7月生　福岡県出身
▽昭和31年立命館大学経済学部卒、日本通運㈱門司港支店入社
▽33年高藤建設㈱入社、取締役総務部長、専務取締役を経て、54年代表取締役社長、現在に至る
▽福岡県建設業協会理事、同協会北九州支部支部長
〈好きな言葉〉「得意淡然、失意泰然」

宮島大八（詠士）先生

竹村茂昭

事未成　小心翼々
事將成　大膽不敵
事已成　油断大敵
右数語海舟翁
右銘常以誨後進
詠士書以自戒

昭和七年学校を出ると直ぐ渡満、満洲国政府に入る。僻遠の地を希望し、満洲の西端興安西省林西に赴く。昭和十年春、日本語を解しない県長さんを伴い帰省。親友の吉田義雄君（東大柔道部、七生社）に連れられて宮島先生のお宅を尋ね、浅草その他を案内されてご歓待を受けました。

昭和十六年二月、吉田君の懇請を受けて上京、五・一五事件の三上卓さん、七生社の穂積五一さん達の加勢をしましたが、大政翼賛の実情を知ると共に失望、十二月の大東亜戦開戦と共に満洲に戻りました。その間、吉田君に伴われて宮島先生のお宅を屢々訪れ、親しくその謦咳（けいがい）に接し七十余歳の高齢乍ら、よく若い者の心情を察し、師と仰ぐはこの方一人と傾倒しました。

先生の父君が明治天皇の侍従であったせいか、天皇の肋骨のついた軍服が飾られており、三十日の天皇御命日には宮内省から銘酒惣花のやきまれが二本供えられておりました。吉田君と二人、その頃をねらって、そのお酒をほとんど頂戴した記憶があります。

宮島先生は清朝の遺臣張廉卿に書を学ばれ「中国の書は宮島を以て日本に移った」といわれたほど。遠く陝西省西安に学ばれた折、日清戦争勃発、祖国の難に赴かんと帰国、後に善隣書院を開いて後進の育成に努められました。勝海舟は父君の友人、親しく教へを受けられた模様。

冒頭の数語は先生自戒の語、また私の自戒の語。後代の人に伝えても誤りなからんかと、敢えて筆をとり、こゝに記しました。

竹村茂昭　明治42年10月生　福岡県出身

▽昭和7年東大法学部卒業

▽渡満、旧満洲国政府に入り、熱江省凌源、興安西省林西、北支天津北京と歩き、昭和18年蒙古人の共感を得ようと興安總省をでっち上げたが終戦。帰国後は実兄岩崎の経営する岩崎建設株式会社に入社、現在代表取締役会長

▽九州柔道協会会長

約束を守る、守らせよう

竹村重利

人生わずかに五十年と言われた終戦当時、齢（よわい）五十五歳の父が、伝来の呉服屋から一転電気卸商に転身を計ったことは相当な決意であったろうと、つくづく感服する次第である。

その父が、遊び半分で手伝っておる特攻隊がえりの道楽息子に繰りかえし教えたことが三つある。「他人に迷惑をかけるな」「約束は守れ」「お客さまには喜んでもらえ」。いくら道楽息子でも永年の間には自然身につくものである。専務時代にはずいぶん遊んだものだが、他人には一切迷惑をかけなかったと自負している。

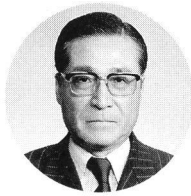
二代目社長となってから、会社のモットーを「約束を守る、守らせよう」と定め、全員経営参加を基本理念とし、社員株主、経理完全公開を断行、現在では社員の半数近くが株主で、徳山、山口、福岡、北九、大分の五拠点で頑張っており、三割配当を続けている。

社内では売上、回収、利益、その他総ての業務を約束させ、守らせて来た。外部に対しても、先ず約束を守り、その上で約束を守って頂くよう強く要請し、当社に対しては特に配慮を頂くことが出来た。「約束を守る、守らせよう」――人生も事業もこれさえ実行出来れば、他に言うことはないと思う。

話は変わるが、「お客様は神様」とはよくぞ言ってくれた。もう十年にもなるが、防府に東

芝系列の非常に内容の悪い店があった。月末のある日来社され、今親会社に行って手形のジャンプをお願いしたところ、「話が違う、両手をついて謝れ」と土下座をさせられた、と涙ながらの話である。当方としては、先方にお金は無くてもお客様はお客様である。あたたかく話を聞いてあげ、ビジネスはビジネスとして協力してあげた。暫くしてその店は倒産されたが、当社だけには迷惑をかけられなかった。

創業以来、何度となく取引先の倒産には出会ったが、そんなに迷惑をかけられることもなく、中には再起され、上得意となったお店もある。決して計算づくではないが、大切なことだと思う。



竹村重利　大正15年12月生　山口県出身

▽昭和18年岩国工業電気科卒、追浜航空隊に志願入隊、20年終戦とともに青島より帰還

▽家業の竹村電気商会手伝い、26年竹村電機株式会社設立、専務に就任、38年社長、現在に至る

▽西日本電友会会長、電機卸組合会計理事、徳山商工会議所副部会長、フジシステム㈱及び㈲竹村商事代表取締役

〈好きな言葉〉「鶏口となるとも、牛後となるなかれ」

一本のナイフ

田中辰治

それは、昭和四十二年に私がニューヨークのハイスクールを視察したときのことです。州立のこのハイスクールは生徒数二千二百人の大きな学校でしたが、廊下ですれ違う学生達は一人ひとり「ハロー」「ハロー」と手をあげ、挨拶して通り過ぎました。昼食は学生達と一緒に学校の食堂で食べることになり、私達視察団一行もセルフサービスで彼らとテーブルを囲みました。私が食事を運んでテーブルについたときです。真向かいにいた男の学生がスッと席を立って、料理カウンターからナイフを一本持って来て「プリーズ」と私に渡してくれました。どうしたことか、私はフォークだけ持って来て、ナイフを取り忘れていたのです。

ワシントンのホワイトハウス前の公園では、通行人に何の警戒心もなく小リスが梢から地上をチョロチョロ戯れていました。一行の一人が何気なくくわえたばこをポイと捨てたときです。近くで遊んでいた子供が素早く走り寄って、その吸殻をサッとチリ箱に捨てたのには驚きました。日本ではごく普通にありがちなことが、公共の場でしてはならない行為だったのです。

日本の良さ、アメリカの恥部、いろいろあります。しかし、見知らぬ外国人であれ、そこに人がいれば敬意を表し、相手のことを気遣うアメリカの高校生と、みんなが安らぐ公園を一人ひとりが大事にするアメリカの子供を目の前に見て、改めて小さい頃から社会性や公共性を身

につけさせることの大切さを思い知らされました。

今日、日米貿易の不均衡は構造協議までに波紋を広げています。この問題の一つは、見ず知らずの人には気を遣わない、日本人の社会性や公共性の稀薄さと、利益はすべて持ち帰るという家族主義的出稼ぎ意識に起因しているのではないでしょうか。

自分の家族や仲間のためには他人を押しのけてでも席を確保し、見知らぬお年寄りが目の前に立っていても知らぬ顔をしているのは乗り物でよくみかける風景です。知人である彼に対しては非常に思いやりがあり義理固いが、不特定多数の彼らに対しては意に介しない私達の習性。そこを改めることが国際社会に期待される経済大国日本への一里塚ではないだろうか――一本のナイフは多くのことを考えさせてくれました。

田中辰治　明治37年2月生　福岡県出身
▽昭和14年9月警察大学校本科卒業
▽福岡県八屋・大隈・前原・博多臨港・箱崎各警察署長を経て23年3月門司市警察本部長兼門司市警察署長、警視長
▽財団法人福岡県警友会前会長、同九州警友会連合会長
▽37年6月門司自動車学校を設立・理事長、現在に至る

人生は努力し、そして楽しく

田中道人

永いようで短い人生、そして価値観の目まぐるしく変わる最近の世の中です。しかし、この世に生まれたからには、少しでも何かを成し遂げ、多少でも社会のため人のために働いたと、振り返って満足感を持てる人は、人生やり甲斐もあり、幸福でもあります。そしてそれには大勢の人々から信頼され、頼られる人になるよう努力することだと、私は思います。頼り甲斐のある人、信頼のおける人ほど、その顔はふくよかで人生幸福に満ちているように見うけられます。

人生を有意義にしかも楽しく送るために自らを振り返り、反省も含め、これから永い人生を送られる若い人に大切だと思うことを二つ申し上げます。

まず若いうちに一つだけその道のエキスパートになるよう遮二無二努力することです。少々高い目標を掲げ、それに向かって努力するのです。自分の性格にあったものを求めて努力するのです。若いうちは体力、気力ともに充実して、頭も柔軟です。少々無理をしてもへこたれません。そしてなるべく早く「これなら俺にまかせておけ」という、一つのものを身につけることが大切です。人より秀でたものを身につけることは、何を行うにしても余裕をもって物事を見ることができ、また落ち着いて仕事が出来ることになるからです。

二つ目は人から信頼され、頼られる人になるよう努力することです。「人の振り見て我が振り直せ」という諺があります。社会人になりますと、絶えずいろいろな人と出会い、また一緒に仕事をします。その出会いの中から、絶えず自分を反省し、大勢の人々のよい所を柔軟にとりいれて自分のものとしていくよう努力することです。

信頼出来る人と折衝し、また一緒に仕事をすることは楽しいことです。このような人は、必ずなにかエキスパートとしての腕を持ち、しかも常に相手の立場に立って物事を考える抱擁力をもっておられます。

世の中、自分の思いどおりにはいきません。楽しいことばかりでもありません。しかし、自ら努力して人から頼りにされるようになることは、年をとって振り返って見た時、やり甲斐のある楽しい人生だったと思うことになると思います。

田中道人　昭和4年1月生　兵庫県出身
▽昭和28年京都大学工学部土木工学科卒、日本国有鉄道入社、53年門司鉄道管理局長、59年本社副技師長で退職
▽59年潤生興業株式会社入社、61年同社代表取締役社長、現在に至る
〈好きな言葉〉「誠」

心が問われる時に

田中丸　善　昌

私は高藤社長と一つ違いの一九三二年生まれである。太平洋戦争という大きなエポックを経験し、戦前、戦中、戦後に生きてきた世代の私共にとって、この豊かな時代を迎え、果たしてこのまま二十一世紀へ歩み続けてよいものかと、フッと考えてしまう。心の時代、ゆとり社会を、といわれる時、その課題は社会参加への心組みにあり、そのキーワードは「思いやり」にあると思う。

若いエネルギー、その自由で積極的な姿は全く素晴らしく、これからも是非持ち続けて欲しいが、ここで気を付けたいことは、その積極性の故にややもすると他人を傷つけたり押しのけたりしているような気がしてならない。よく「相手の立場に立って……」とか「他人の痛みが解る人になろう」などと言われているが、確かに古くから受け継いだ日本古来の良い風習がすっかり姿を消して、大切な心を失いつつある様に感じられてならない。

この経済的に豊かな社会を他人への心遣い、思いやり（ホスピタリティー）を大切に、より人間味のある、心あたたまる真に豊かな社会へと、一人ひとりが考えなくてはならない時機に来ているのではないだろうか。

いま盛んにグローバルという言葉を耳にする。言葉通り、地球規模で物事を考えようという

ことの裏に、我々は地球人であり、同じ人類として、真に心の通いあう豊かなゆとりあるくらしを……との人類共通の願いが込められていると思う。

明日の二十一世紀へ向けて、若い皆さんには是非この「思いやり」を大切にして活躍して頂くよう、心から願うものである。

田中丸　善昌　昭和7年11月生　福岡県出身
▽昭和30年神奈川大学経済学部卒業
▽現在、株式会社小倉玉屋、取締役社長
▽北九州市青少年育成市民会議会長、北九州市民音楽愛好会会長

毎日が初日

谷　伍平

私は、昭和十一年から十四年まで、東京で学生生活を送りました。九州では、歌舞伎を見る機会に恵まれませんでしたので、勉強は二の次にして、毎月のように芝居見物にでかけました。といっても貧乏書生のことですから、立見席（見物席の一番うしろに設けられた、一幕ごとに入替えのある低料金の席）で見ることが多かったのです。

当時、すでに戦時色が漂っていましたが、初代中村吉右衛門（昭和二十九年没）と六代目尾上菊五郎（同二十四年没）とが、歌舞伎界を二分する勢いで、それぞれの劇団をひきいて、活気のある舞台を見せていました。今でも、その名場面のかずかずをあざやかに思い浮かべることができます。

吉右衛門と菊五郎は、性格が正反対でした。前者はきまじめで、芸風は重厚、後者は陽性で屈託がなく、芸風は淡白軽妙。いずれも「芸の虫」といった趣がありました。お互いにライバル意識をもやして演技にみがきをかけるのですから、芝居が面白くないはずがありません。両者は滅多に共演しませんでしたが、たまに顔を合わせると、白熱した舞台となりました。

両優とも、若い俳優たちをきびしく指導していたことは言うまでもありません。その教えを受けた俳優たちが、今日の歌舞伎を支えているわけです。

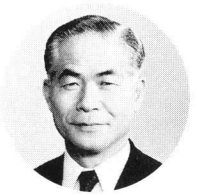
吉右衛門は、演技指導に当って、「毎日が初日」といって油断や慢心を戒めていました。

新派の水谷八重子（昭和五十四年没）のような大女優でも、「初日の舞台に出るときは、緊張のあまり膝がガクガクする」と語っていました。役者にとって、初日は真剣勝負のようなものです。

それが、二日、三日と舞台を重ねるうちに、慣れからくる心のゆるみで演技はだらけ、セリフをトチったり、小道具を忘れたりという失態を演じることになります。何事も間違いや事故をおこすのは、初心者よりも手なれたベテランの方が多いものです。

菊五郎は、格言らしいものは残していませんが、かれの辞世の句には、いかにもその人らしい味わいがあります。

まだ足らぬ　踊り踊りて　あの世まで



谷　伍　平　大正5年10月生　福岡県出身
▽昭和14年東京大学法学部卒、鉄道省入職、40年日本国有鉄道常務理事、東海道新幹線支社長、41年退職
▽42年北九州市長
▽現在、北九州市立美術館長、北九州大学法学部講師
▽著書『丘の上の双眼鏡』

狭き門

玉井信一

力をつくして狭き門より入れ――アンドレ・ジイドの小説のタイトルにもなった「狭き門」という言葉に私が深くとらわれたのは、大学を卒業し、当時の日本漁網船具㈱（現ニチモウ㈱）に入社した昭和二十八年のことであった。

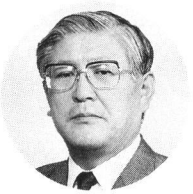
入社早々私は下関営業所に配属され、唯一人で大口径のマニラロープの新規開拓を命じられた。だが大口径のロープは水産では需要がなく、市場は造船や商船業界であったため、この業界で知名度のない日本漁網船具では歯牙にもかけて貰えず、営業成績は全くの不振であった。

しかし、私は在学中にスポーツで鍛えた体力にものをいわせて、来る日も来る日も下関や北九州を中心に需要先を駆けめぐった。だが、「当面の結果は悲惨でも、そのうち努力の結果が出て来る」と信じていた甘い期待は見事にうち砕かれ、段々と無力感にとらわれた日々を重ねるようになって来たのである。「今自分は人生の中で一番大切な年代を無駄に過ごしているのではないか」「この時間は単なるロスなのではないか」「道を誤ったのでは…」と思いはじめると、悩みは限りがなく仕事の不成績以上に転職の思いが頭の中をかけめぐる仕末であった。

私がジイドの『狭き門』を読んだのはちょうどその頃のことであった。巻頭の「力をつくして狭き門より入れ」を読んだとき、私の頭の中で何かが弾けたような感じがしたのを今でもは

っきりと思い出すことが出来るのである。今、自分はまさしく社会という新しい世界に通じる狭き門の前に立っている。そして神々に試されている。この狭き門に通じる道を避け、広く安易な道を選べば、輝かしい将来はあり得ない、結果についてあれこれ考えるなら、そのぶんだけ今まで以上に努力しようと決意したのである。決意した以上、これからは全ての面で安易な道を選ばず、より困難な道を選ぼうとも思った。以来、このことを守り続けて今日に至り、「狭き門」は今では仕事だけでなく、私の人生の全てを支える信念のようなものになっている。

今の若い人達を見ていると、仕事に限らず、何事も易しい道を選んでいるような気がしてならない。若い人達には体力も気力も充分にあるはず、どんな困難に出あってもこれを避けず、持てる力の全てをつくして堂々と戦う青春を過されるよう期待したい。そのキーワードとして若い人達に「力をつくして狭き門より入れ」という言葉を贈りたいと思うのである。



玉井信一　昭和5年11月生　福岡県行橋市出身
▽昭和28年東京水産大学卒業、日本漁網船具㈱（現ニチモウ㈱）入社、52年取締役、56年常務取締役、62年専務取締役、平成元年代表取締役社長就任、現在に至る

前人樹を植えれば、後人涼を得る

千本道雄

「前人樹を植えれば、後人涼を得る」

自分は今なにをしなければならないのか。自分に今なにができるだろう。自分に問い、自分に答えるときによく思う言葉が「前人樹を植えれば、後人涼を得る」であります。

真夏の太陽が照りつけるようなとき、木陰がありますと、涼しさを求めて人々は集まって参ります。涼を得て汗をぬぐい、ほっと一息つきますと、生きかえったような気が致します。少しゆとりが出て参りますと、その木陰がどんなに大切かが感じられますし、そこに数年、あるいは数十年前に樹を植えてくれた前人がいたことに感謝することでしょう。

戦後四十五年を経た今日、世界でももっとも平和で、自由で、豊かな国となった日本ですが、将来を考えますと、いつまでも今の状況が続くとは思えません。経済の高度成長がもたらした環境破壊をどうするか、精神的荒廃をどうして正常なものに戻していくのか、政治・経済・文化面で国際協調をどういうふうに進めていくか。解決していかなければならない課題が山積しているのではないでしょうか。

今を生きる人々が後の人々のために真夏の木陰を作るような樹を植えていかなければならないと思います。それぞれの分野で、小さくとも、あるいはできる部分のなかで善意の樹を植え

ていきたいものであります。

その樹が、愛情のある教育の樹であったり、政治の原則を見直す樹であったり、社会に果たしていく経営者としての責任の樹であったり、それぞれの立場で最善の努力をしたいものです。

小さな種子が大きな木陰を持つように成長するためには、将来を予測する能力や、自己を奉仕する心や、人を思いやる配慮や、人を育てる包容力や、日々革新の心など、諸々の要因があるかと思います。

きたるべき二十一世紀のリーダーとして、また中堅社会人として活躍していただく若い人達があらゆる分野で「後人に涼を感じさせる」ような道を開いていってもらいたいと期待しております。

千本道雄　昭和9年2月生　熊本県出身
▽昭和27年熊本県立山鹿高等学校卒業　▽40年有限会社花のチモト設立、代表取締役就任、現在に至る
▽㈳日本生花商協会副会長、㈳日本生花通信配達協会（JFTD）常務理事、JFTD学園理事長代行、㈳北九州中小企業経営者協会副会長

「粘り」の精神

佃　亮二

昭和五十年代初期の日本経済は、第一次オイル・ショックを契機に、高度成長から安定成長への途を模索しているさ中にあった。その過程で、興人、永大産業など、かつての名門企業の倒産が相次ぎ、経済界は騒然とした空気に包まれていた。

わが国十大商社の一つであった安宅産業が、海外の原油取引で多額の損失を蒙り、倒産の危機に瀕しているという事実が発覚したのも昭和五十年秋のことであった。負債総額は一兆円を超え、取引網が全世界に拡がる巨大商社が、万一、倒産という事態に立ち至れば、連鎖倒産の輪は海外にも波及し、国際的な信用恐慌に発展するおそれがあり、関係者は色を失った。

この事態に対し、当時の日本銀行三重野営業局長（現総裁）は、直ちに①国際的な信用動揺を防ぐため、安宅産業の倒産は絶対に避ける②そのために、同社の損失は全額関係銀行が負担し③損失処理後の安宅産業は他の総合商社に合併させる――との方針を決断し、自ら関係者の調整に乗り出したのである。

当然のことながら、この調整工作は難航をきわめた。一部の銀行は「安宅産業の損失を銀行のみで負担することは、たとえ国際的な信用秩序維持の大義名分があっても、株主や預金者に説明できない」として強い反対の姿勢を崩さなかった。幾多の障害を乗り越えて調整が成立し、

安宅産業と伊藤忠商事の合併が実現したのは実に昭和五十二年春のことであった。

当時、私は営業局総務課長として局長を補佐し、調整作業の一端に加わった。その時、三重野局長の仕事への取組み方を通じて、危機に際しての果敢な決断、交渉に当っての周到な根回しなど多くの教訓を得たが、その中で、今も強く心に残っていることは、苦境に陥った時の「粘り」の精神ということである。利害が対立する銀行間の調整は容易な作業ではなく、何度も破局止むなしという事態に直面した。しかし、その都度「諦めるのは明日でもできる。今日のところはもう一度粘ってみよう」という局長の気迫に強い感銘をうけた。人間誰しも苦境に陥れば安易な妥協に走りがちだ。しかし、それでは後に悔いを残すことになる。苦しい時こそ、気力を絞って「もう一度粘ってみる」ことの大切さを今も忘れることができない。

佃　亮二　昭和6年5月生　熊本県出身
▽昭和30年東京大学法学部卒、日本銀行入行、営業局長、理事を経て平成元年退職
▽現在、福岡銀行副頭取
〈好きな言葉〉「陽気の発する処、金石また透る。精神一到、何事か成らざらん」

日本のアイデンティティを大切に

辻　長英

敗戦は日本に第二の開国を迫った。以来、日本は自由貿易の中で成長し、今や経済大国といわれるまでになった。最近は、今まで以上に国際化が叫ばれて来ている。しかし、私には今いわれている国際化はどうも本来的な意味と違っている様な気がしてならない。いわば欧米化せよとの意味に遣われている様に思えてならない。

私見によれば、真の国際化とは外国にない我国のよさ、即ち日本のアイデンティティを世界の発展の為に役立たせる事ではないかと考える。

私の目を業界だけの狭い視野から広く開いてくれたのは、青年会議所運動に参加したことによってである。そこには異業種との交流があり、国際交流、特にアジア各国との交流があった。その中で特に東南アジアの人々との交流は日本人としてアイデンティティを強く意識させられたものである。

一例を挙げると、第二次大戦の認識について彼らとの話の中に意外な本音の部分があった。「今度の戦争は不幸な不毛の戦争であることも事実ではあるが、白人には我ら有色人種は絶対勝てないという、三百年来の思い込みを日本軍の勝利が打ち破ってくれた。それが彼らの独立への展望を切り開いた」ということである。動機は植民地作り、と不純で、手段も人殺しと良

くない戦争であったが、その結果がもたらしたものは意外に後世では何らかの評価が与えられるのではないだろうか。生臭い話になりましたが、体験談ですのでお許しを乞いたい。

さわやかな話では、十九世紀の欧州画壇で主流であった印象派に日本の浮世絵が大きく影響を与えたのは有名な話である。前世紀末の装飾芸術・アールヌーボーの源泉の一つがジャポニズムといわれている。今日では、小品種多量生産型のアメリカ式経営が行き詰まり、多品種少量生産型の日本式経営が世界経済を制覇しようとしている。

資源小国の日本が生きて行く道は、何か世界が日本を無視できないようなもの、インパクトを与える何ものかを持つことが必要であり、アイデンティティこそ国際化に不可欠なものであり、国際社会に生きて行くかの根源に他ならないと考える。

辻　長　英　昭和7年1月生　福岡県出身

▽昭和29年西南学院大学商学部卒

▽31年熊本大学工学部建築科選科終了、株式会社辻組入社、47年同社長就任、平成2年九州建設株式会社へ社名変更現在に至る

▽建設業労働災害防止協会副会長、同福岡県支部長

▽福岡県建設同友会会長

▽平成元年度労働大臣表彰

〈好きな言葉〉「人間万事塞翁が馬」

易水寒し

鶴丸大輔

「風蕭々として易水寒し、壯士一度去って復た歸らず」

私はこの句が好きだ。時々口吟む。しかし、どこで覚えたのか判然としない。おそらく司馬遷の史記を習ったときか。博徒の荊軻が燕の太子丹に頼まれ、秦王の政を刺殺せんと、黄河を渡り、風蕭々と吹き荒れる易水のほとり、見送りに来てくれた人々のうち、高漸離は筑を鳴らし、荊軻は和して歌い別れを告げ、一路咸陽に向かう。

この故事は中学時代に漢文で教わった気がする。

戦後四十数年、会社の苦しい時、また出張、出張で明け暮れるとき、そんな時にこの句を想い出す。

昭和四十三年、約半月印度に旅行したとき、ネパールの都カトマンズのホテルの窓から、白雪をいただくヒマラヤの連峰を見たとき、この山の向こうにシルクロードがあり、文物の交流の盛んな当時を想う。そして、風蕭々と吹き荒れる秦王朝の兵馬の音を追像する。

そして考える。人生に帰り道はない、往ったら帰れない。そして人生にやり直しはきかない。毎日、毎日易水は寒々として、風のみ蕭々として吹きすさぶのみ。

荊軻は易水の葦の生い茂る曠野を、とどまることなく一路秦の都へと歩む。

人生の孤独と死の覚悟が、この句の中で私へ強く訴える。

戦争中の約四年間、軍隊で満州をはじめ各地に転戦して、終戦時は北海道の山中で生命を保った。

このことが私に一回きりの生命の尊さと、めぐり合いを教えてくれた。

私はこの句が色々な意味で忘れることが出来ない。

私の人生の句である。

鶴丸大輔　大正7年9月生　佐賀県出身

▽昭和17年9月日本大学法学部政経学科卒業

▽19年11月父鶴丸廣太郎病没のため鶴丸汽船株式会社取締役社長に就任、39年10月鶴丸汽船株式会社と鶴丸運輸株式会社を合併、鶴丸海運株式会社と改称、同社取締役社長に就任

▽現在鶴丸海運株式会社の外子会社9社を経営

歴史を正しく見つめよう

寺田　晃

昨年になるが、知人から外国ビールを飲む会にお誘いを受け喜んでお供した。沢山の缶ビールが積んであった。私は三本も飲めば酔っ払うたちなので慎重に選んだ。

その一本が東郷ビールでAMIRAALI Heihachiro Togoとある。しかし缶の写真は映画「日本海大海戦」の三船敏郎に似ている。東郷さんの写真は子供の頃から沢山見ているが総て眼を伏せ気味だ。ビールのそれはドングリ眼がギョロリと正面を睨(にら)んでいるから大分違う。地球の反対側のフィンランドのビールであるが出来れば訂正してもらいたいものだ。

ところで第二次大戦では日独同じ側で戦って敗れたから自慢にならないが、結果は大分違う。ヒトラーは黄禍論者で欧州ではつまるところ領地の再配分だったが、方法と理念に稚拙はあったものの日本は大東亜共栄を唱え欧州の数多い植民地、属国は総て大戦後独立した。その源といえるのは日露戦争であったといえる。

若きネールは獄窓で日本海海戦を聞き、インドも必ず独立できると確信したという。バルチック艦隊を破った日本海海戦がどれほど世界の被圧迫民族を勇気付けたか計り知れない。フィンランドも同じであった。

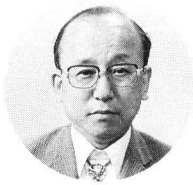
乃木・東郷は神として祀られているが、最近の戦記物では散々である。神様を凡人レベルに

下げて話題にすると読物としては面白いが、有名作家の筆になるだけ将来一人歩きすることを心配する。戦争末期に日本海軍を亡したのは、これらの三等大将であると並ぶ写真を降ろさせた兵学校校長があったらしいが、東郷さんは違う。救国の英雄である。

ユトランド沖海戦の勝負は日本軍人にも独逸（ドイツ）が勝ち損害も英国に多かったと考える者が多かったというが、東郷さんは「英国が勝って独逸が負けたんだ。独逸は逃げたではないか。逃げた奴は負けだ。」と一刀両断であった。昭和期の軍人は末梢を見て大局に暗かった。今度の文部省新学習指導要領で小学校教科書に東郷元帥が再び登場することになった。

フィンランドでは子供にノギ・トーゴーの名を付ける人があちこちいたというが、今でも中学校教科書に登場しており、国民の五人に二人はその名を知っているという。

歴史を歪曲しては現代の正しい理解はできない。



寺田　晃　昭和2年11月生　大阪府出身
▽昭和23年明治工業専門学校化学工業科卒　通産省大阪工業技術試験所主任研究官を経て
▽現在九州工業大学工学部教授、工学博士（有機工業化学を専攻）
▽59年「九州工業大学75年」を企画編集

恭　儉

出口次年

高藤昌和社長を初めてお訪ねした時、私は我が家にあるものと同じ額が社長室の壁に掛けられているのを見て、高藤社長の慎ましい態度行動が偶然でないことを悟りました。その額は戦前に教育を受けた私達にとって、忘れることのできない教育勅語でした。

教育勅語は、明治天皇様が日本の国が肇(はじ)まって以来の歴史的経験に基づく天皇様と国民の共有する生活信条として示されたものです。その内容は、人生の全てにわたり、自他の幸福をともに高めるには、どうすれば良いかということを明らかにしています。

しかし、戦争中、この教育勅語を、心ない人達が自己の権威を裏付けるために利用したり、その反動として戦後の流行に便乗しようとする人達が、この教育勅語を曲解して非難したために、私達の身近に極めて立派な生活信条があるにもかかわらず、戦後の日本人は幸福の青い鳥を求めて放浪し続けてきたといえましょう。

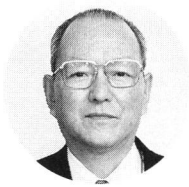
教育勅語の一語一句は正に青い鳥を示しているといえますが、その中に「恭儉己(きょうけんおのれ)ヲ持(じ)シ」という一節があります。この大意は礼義正しく謙虚な態度と慎ましい行いを心掛けると失敗を避けられるばかりでなく、人々は尊敬し合い万事円満に進行しますよ」と解釈されます。

このように解釈されるのは、私の七十年の人生における数多くの失敗を省みて、常にその原

因が「恭儉己ヲ持シ」ていなかったことにあることと共に周囲の迷惑を痛感しているからです。

またこの一節を地球的に省みると、傲り高ぶった人間が自然環境を破壊し、動植物の生存を脅かしているばかりでなく、自然界の一構成要素である私達人類の生活を自ら迫害しています。人類はこれから先「恭儉己ヲ持シ」て行かないと二十一世紀を生きられないでしょう。

この一節に限らず、教育勅語の訓えを再確認し、慎み深く実行して行くことが、二十一世紀を幸福に過ごす近道ではないかと思う次第です。



出口　次　年　大正11年12月生　北九州市出身
▽旧制九州専門学校卒
▽昭和38年サンエス工業株式会社創立・代表取締役社長、現在に至る
▽専門学校在学中より安岡正篤氏に私淑、戦後師友協会に入会して参学
〈好きな言葉〉「一利を興すは一害を除くに如かず」

耐え得る心を

冨山耕一

地球規模で激動を続ける報道から目を離せない毎日が続く。東西冷戦が氷解してホッとしたのも束の間、中東問題が世界経済に大きな影を落としている。今日も新聞に目を通すと、また為替が大きく動いている。為替の変動リスクを考えると、先行き予測が難しいだけに不安を抱かざるを得ない。更には人々のニーズ、価値観も多様化、個性化傾向が顕著である。

ファッション界、食品界いずれもそのいい例であるが、特に若い人達の指向は極めて移り変わりが激しい。私どもでも変化の対応策として或いは今後の動向を予測しながら多角経営化を進めているが、過ぎ去った時代を振り返りながら、この「不安の時代」をよくここまでやってこれたものと、時折語り合っているところである。

廃墟の中から幾多の変化や、その都度遭遇する困苦を乗り切りながら経済大国日本に至るまで、私達日本人はそれぞれに懸命に働き続けてきた。私もその一人として諸々の変革や苦難の時代を乗り越えてきたが、振り返ってみると、今日まで私をささえてくれた要因は二つあると考えている。

その一つは信仰であり、いまは一つは目標に向かって耐え抜く精神力ではないかと思う。

私は永年稲荷参りを続け、日々の感謝を心にこめて一日と十五日にお参りを欠かさない。信

仰は自らを厳しく律する力が養えると確信しているし、その厳しさの中から苦しさ、辛さに耐える精神力も生まれるのではなかろうか。

ひいては、そこから旺盛な目標意識や、二十一世紀に生き残るための予見力さえ見出せるような気がしてならない。

ところで、物理的には恵まれ過ぎるような今の世の中だが、若い人達のもつ価値観、思考、行動にふれ、私達のそれと対比する度に一抹の不安を抱かずにはおられない。

私自身のこれまでの長い道程をふりかえりながら、二十一世紀の日本を担ってくれる若い人達が、精神力、就中（なかんずく）「耐え得る心」の大切さを学んでほしいと願っている。

物中心の世の中で薄らいできている心を今こそ考え直す時代ではないだろうか。

『冨山　耕一　大正14年2月生　山口県出身
▽小倉経理専卒、昭和24年家業の金物業を継承、28年食品販売業を併営、36年㈱スーパーとみやまを設立、代表取締役社長、45年㈱ハードウェアとみやまを設立、代表取締役社長を兼任、62年両社を合併し㈱とみやまに社名変更、代表取締役社長

誠意を尽くし困難を避けず

友貞睦夫

十五年ほど前になりますが、工場建設の実務を任かされ貴重な経験をすることができました。ちょうどオイルショックの直後で、あらゆる資材が値上がりし、その対策として経費の節減と原価低減を図ることになりました。その二、三の例を紹介しますと――。

現地は松林の丘陵地でしたが、整地をした残土処理を引受ける所がなく、途方にくれました。そこで、残土をもち出さず、敷地全体を平坦にしないで、建屋ごと雛壇としました。建屋と建屋の間に高低差があるので、道路は二本必要となりましたが、残土処理や造成費が大きく節約でき、また、排水路の掘削が雛壇傾斜の分だけ浅くてすませることができました。

また、本館前に池が欲しくなりましたが、予算としては防火用の水槽程度しかありません。これも皆で色々考えた末、当時電力会社で廃材となっていたクレオゾート注入電柱を安価に入手して、これを井桁に組んでその上に簡易な池をつくりました。電柱の筏に池をのせて、砂の上に浮かばせた形ですが、十五年たった今日まで水洩れもなく健在で、一応成功であったと思っています。

旨い話ばかりしましたが、実情は失敗対策の毎日でした。その一例ですが、建屋の鉄骨を現地で吹き付け塗装した時のことです。塗料の粒子が上昇気流で舞い上がり、海上を遊泳し、夜

中に海風にのって陸地に戻り、数キロメートル四方の煙草の葉に白い斑点をつけました。地元農家の発見するところとなり、建設中止だ、筵旗だ、補償問題だということになりました。それまでは地元とは友好関係にあったのが、実に残念な事態となりました。東奔西走、誠意をつくし問題解決に当りました。結論からいいますと、煙草の葉の表面は繊毛で被われていて塗料は大部が繊毛についていて収穫後の乾燥時に繊毛とともに落ちてしまいました。一方、煙草の葉の品質評価も例年より上位となりめでたく問題解決し、地元とは従来にまして信頼関係はより強いものとなりました。

人生も企業活動も誠意をつくし、困難な事態におかれても避けることなく克服し、禍を転じて福となす心掛けが大切と思います。

友貞睦夫　大正14年10月生　佐賀県出身
▽昭和23年九州大学工学部卒業、日立製作所入社、50年中条工場長
▽51年日立西商品エンジニアリング㈱取締役、55年代表取締役
▽平成2年同社顧問

平和への祈り

友添政行

香川県豊浜の陸軍船舶学校にいた時（昭和十九年秋）大学の木村亀二教授が仙台からはるばる学徒出陣組を見舞いに来て下さった。戦況は日増しに悪化していたが、木村教授は集まった私達三名に学内の近況を伝え「一日も早く元気に復学してくる日を待っている」と言外に思いを込めて語られ、これといった勇ましい激励の言葉がなかったのが、かえって心を和ませたのを覚えている。その時、法文学部長の金倉圓照教授が〝執法剣立法燈〟と一本一本墨書きされた白扇を貰った。（仏法により）煩悩を断って世の冥暗、蒙昧を照らし、明るい正義の世を打ち立てようという意であろう。この時集まった一人は同じ学科の友人であったが、終戦間際に沖縄沖で爆雷を抱いて敵艦に体当たりして戦死したことを戦後に知った。私も特殊潜水艇の乗組員として出動を目前にして終戦を迎えたが、折りにふれ彼のことを思い出し、様々な想念が湧く。

太平洋戦争についての学者や評論家の解釈がどうであれ、当時の若い学徒兵は、己の将来に大きな希望と夢を抱きながらも、「国家（神国日本といった虚構のものではない）同胞」のためという純粋な義務感から、平和を希求し、人事を尽くして天命を待つ心境であった。そして、死と直面していながら、緊張感はあっても、それほど悲愴感はなかったように思う。

なお、靖国神社への内閣総理大臣始め閣僚の参拝が、今も内外で問題にされるが、靖国神社はもはや軍国主義の象徴ではない。指導者や大衆の、イデオロギーによって最初から結論を決めてかかる頑さや狭量、右顧左眄や付和雷同する主体性のなさこそ、国を誤らせることになりはしないか。願わくば閣僚は積極的に靖国神社に参拝し、戦争犠牲者である戦没者の御霊に祈りを捧げ、平和国家の堅持を誓ってほしい。〝修身斉家治国平天下〟（出典＝礼記・大学）という格言があるが、自分の国を愛してこそ、真に世界平和に貢献できるであろう。

今、何故出陣学徒の話か――太平洋戦争の終結から早くも四十五年を過ぎ、四十代半ばの壮年者さえ戦後生まれとなった。だから、平和と繁栄にどっぷり浸っている戦争を知らない若い世代に、改めて戦争の悲惨さと平和の尊さを認識するとともに、当時の多くの学徒兵の国を思う純粋な心情を忘れないでほしい、と願うからである。

友添政行　大正10年8月生　福岡県出身
▽昭和20年12月東北帝国大学法文学部在学中学徒動員
▽20年復員後西日本新聞社入社、東京支社連絡整理部長、編集局庶務部長、経営企画室次長、新社屋建設事務局次長などを経て
▽50年福岡ビルサービス株式会社取締役、常務取締役
▽63年株式会社ふようサプライ代表取締役専務就任

忘れえぬことば

中島國廣

N先生は小生の中学二年の時のクラス担任で戦後の学制混乱期とは言え、旧制高校（第一高等学校）の出身で、ど田舎の中学校ではインテリ度抜群の先生だった。後で聞いたところによると、N先生は代用教員上がりが多かった教員仲間からは白い眼で見られ、苦労の多い日々が続いていたということである。

新学期最初のホームルームの時間に先生は黒板にいきなり「小人閑居為不善」と大書され、「意味が判る者手を上げろ」と言われたが、もとより一人もいるはずがなかった。小生の中学校は、九州の西端の海辺の集落に位置し、大人はもとより、我々子供までがその日の食扶持を求めて動き廻っており、小生の周囲には勉学の雰囲気は皆無であった。

出し抜けに登場したこの七文字の漢文が、当時の小生たちの教室のＴＰＯにふさわしかったのか、N先生の意図するものが何であったのか判断に苦しむが、ともあれこの七文字は小生の脳裏に深く焼き付けられ、終生忘れ得ぬことばとなっていることは確かである。

当時、野蛮人、原始人に近い生活をしていた小生にとって、この漢文七文字は勉学への道の橋渡しをしてくれた恩人と言える。

今考えると、当時の小生にとっては「小人閑居為不善」でなくても、他の漢文の一節でもよ

かったと思う。その意味では、真の恩人はN先生だったと思う。当時、鄙(ひな)には稀なN先生のインテリ性から、小生は少なからずの影響を受けたことを、最近になって強く感じる次第である。

教育における教師の役割の重大性を今さらながらに痛感する次第である。

さて、「小人閑居為不善」の先哲の教えの感化度であるが、齢を重ねている割には進歩がなく、中学二年生の時から未だもって少しも進化していない小人性に、自己嫌悪を感じながら、相も変わらずこの七文字を口にして、これからもいたずらに齢を重ねることになりそうである。

ともあれ、中学時代の恩師に習った漢文の一節が奇妙にも脳裏に焼きつき、以後三十数年間小生の座右の銘的存在になっている現実を思うとき、「雀百まで踊りを忘れず」とはよくいったものである。

中島國廣　昭和15年10月生　長崎県出身
▽昭和38年東京大学法学部卒、電電公社入社
▽現在、NTT北九州支店長
〈好きな言葉〉「野火焼不尽　春風吹又生」

「私も利己主義者（エゴイスト）である」と自覚しよう

中谷哲郎

いまの世の中は「組織社会」と言われているように、一人で何かしようと思っても、とてもやりにくくなっています。グループに入るなり、会社やグループに頼らなければほとんど何もできません。昔は近所の川で泳ぐことができましたが、いまでは「スイミング・クラブ」に入らなければならないとか、一人で旅行するためにホテルに電話しても、だいたい旅行業者が押えていて、「満員です」と断わられるように。

このように、グループで行動し、グループで生きてゆく場合、一番困った存在が「エゴイスト」です。小・中学校以来、どこにでも自分勝手な利己主義者がいたことを思い出します。

「人に愛してもらいたければ、まず人を愛することだ」と言われています。エゴイストは嫌なものです。つい非難したくなります。しかし、よく考えてみれば「五十歩百歩」です。われわれもまた利己主義者であることに変わりありません。多少、自分が利己主義を抑えて「思いやり」を発揮したとしても、少しでも余裕がなくなれば「自分勝手」をやっています。

私は、自分の過去を顧みて、「私もまたエゴイストである」と思わないわけにはいきません。そこで、「私もまたエゴイストだ」と自覚したら、まず「できるだけ利己主義を抑えよう」と思い、次に、「他人のエゴイズムを許す」ことができるように努力します。人に忠告する場合

も言葉がやわらかくなるでしょう。

グループで生活する時間が多くなればなるほど、お互いの欠点を非難しあっていたら、グループは良くならないし、自分も不愉快になります。エゴイストは決して人から愛されず、眞の友人もできません。

「私もまたエゴイストだ」と自覚すれば、そこから、自分に厳しく、他人に寛容な姿勢も生まれてくることと思います。自分の人生を楽しいものにするためにも、エゴイズムをコントロールすることに努力しましょう。

中谷哲郎　大正15年11月生　福岡県出身
▽昭和26年旧制九州大学経済学部卒
▽29年熊本商科大学講師
▽38年北九州大学商学部教授、現在北九州大学長
▽著書『少数精鋭主義の経営』『経営管理論』
△好きな言葉▽「あなたたちの中で罪を犯したことのない者が、まず、この女に石を投げなさい」（聖書）

現状にとらわれず、先を見て行動すること

信沢　隆

今迄の人生約六十年弱を振り返ってみると、小学生時代が戦争中であったため、私の人生観も時代の変遷と共に変化し、将来何になりたいかという点でみても、陸軍軍人、絵描き、理論物理学者、サラリーマンと変化し、結果的には自動車会社の社員として働いた人生が大部分であった。

会社内では技術系出身ではあるが、色々な部署を人より多く経験したため視野が広くなり、会社内はもとより、社外の友人・知人を多く持つことが出来、また技術・経営・品質管理に関する本、および歴史小説等を多く読み、また他の優秀企業の経営理論を勉強し、さらに外部の経営に関するセミナーに極力参加し、社内に周知させるための講師となったりした。

この結果、私の人生観、価値観が徐々に固まり、この十年間は、自分の地位・給料・上司の思惑等は気にならなくなり、むしろ企業全体の出力向上に自分がどれだけ寄与したか、また自分の組織の改善、向上にどれだけ貢献し得たかという点で自分を評価する方向に変った。

大切なことは、自分の将来のあるべき姿、企業・組織はどうあるべきかにつき常に勉強し、自分なりの価値観・評価基準をなるべく早く確立し、これに向かって進むこと。このことによって現状の色々な悩みの殆どは解消し、明るい将来が見えてくる筈である。

このように物事を捉えると、自分の周囲には、地位・給料・職業等に関係なく、人間として、また企業内の一社員として立派にやっている人が意外に多く居ることが分ってくる。

若い人は、次の日本を担う人達であり、残された人生も長い。自分自身の将来をにらみ、物事を前向きに捉え、明るく行動してほしい。

最後に、昔読んで感銘を受けた本を紹介したい。

〈外国の本〉『ジャン・クリストフ』『チボー家の人々』

〈日本の本〉司馬遼太郎の『坂の上の雲』『竜馬が行く』

信沢　隆　昭和7年6月生　青森県出身
▽昭和31年早稲田大学第一理工学部応用物理科卒、富士重工業㈱入社
▽平成元年6月末国内サービス部長から北九州スバル自動車㈱代表取締役社長として出向、2年3月末富士重工業㈱定年退職
▽現在、北九州スバル自動車㈱代表取締役社長

私の雑感

芳賀晟寿

〈はじめに〉私が大学在学中の昭和三十三年四月から三十七年三月迄の京大総長平澤興先生の言葉に「……それよりむしろ失敗に教えられ、失敗に地固めされた人生こそ、真にすばらしい人生ではなかろうか。そしてそれこそ否定を乗り越えた肯定の人生とでもいうべきではなかろうか。年とともに何を見ても面白く、何をしても楽しくなるのがほんとうである。人生を楽しいものにすることが大事である」というのがあります。

〈三分の俠気と一点の素心〉この言葉は私の好きな言葉であります。明末の清言の書、洪自誠の『菜根譚』の中の「交友須帯三分俠気　作人要存一點素心」という文章で、友人と交わるには、利害打算からではなく、少なくとも三分がたの義俠心を持ち合わせていなければならぬし、また、ひとかどの人物となるには、世俗に流されるのではなく、少なくとも純粋な一点の本心は残しておかねばならぬという意味の言葉だそうです。（今井宇三郎氏訳注）

現代では、残念ながらこの「三分の俠気と一点の素心」が失われつつあるようです。「大人が若い人を怒らなくなった」といわれます。怒りを忘れ、愛についてのみ語る現今の風潮は、ふやけていて、人間性にかけているような気がしてなりません。「正当な憤りを忘れた人間は、自分の権利を放棄した人間だ」ともいいます。義俠心と純粋な心を取り戻さなければ、真の人

間復活はありえないでしょう。

〈おわりに〉久し振りに会った大学教授の友人と話をしていて、「自分より若いものには、必ず自分にないものを持っていると信じろ」と言われました。自分の経験と照らして考えてみると、必ずしも正しいとは思えませんが、教師の陥りやすい立場上の形而上学のブレーキとして、座右の銘の一つにしているそうです。学生との出会いに際して、教師に必要なのは、指導力よりフォローシップだというのです。

リーダーは年長者が望ましいというのは、若い者以上に経験を積み、正しい判断ができるという条件つきです。自分の経験に固執し、チャレンジ精神を失えば、年長者なるがゆえに、博学多識、経験豊富と思い込んでいるだけ、かえって害も多いといえます。

五十歳を越えた今、人生を楽しいものにしたいものです。

芳賀晟寿　昭和14年6月生　北九州市出身
▽昭和37年京都大学法学部卒、富士銀行入社
▽株式会社芳賀社長　株式会社福岡ファコムセンタ会長
財団法人芙蓉教育振興会理事長

苦難こそ我が人生

橋本　榮

創業者の父橋本留三郎は明治三十六年旧門司市新町二丁目（現門司区栄町八番八号）に北海道函館港から天然氷を移入、氷雪販売と食肉販売業を開業、本年は創業八十七年になります。この長期間の事業歴は先代が幾多の苦難を乗り越えて築かれたものであり、地域社会の一方ならぬ御愛顧の賜であります。

私は昭和八年社業を継承、今日に至っておりますが、事業も人の一生も、常に荒波に漂う小舟のように思えます。弊社も幾度かの台風の洗礼を受けながら難局を突破して来ました。私は大不況下の昭和六年門司商業学校を卒業、満州事変前後の厳しい時代に社会人として船出し、先代の教訓を体し社業の運営につとめて参りましたが、当時の小売店は、お客様の御要望にこたえ、早朝から夜の十二時まで営業し、休日は月一日位でした。仕入れ、製造、外交、配送と寸暇を惜しむ毎日で、時代の移り変わりとは申しながら、今日の小売店の実体を見るとき今昔の感に堪えません。

経営がやっと軌道に乗りかけた昭和十五年八月から敗戦の翌年二十一年三月まで軍務に服し、大陸の戦場で多くの苦難を経験し、帰国後は再び戦後の荒廃の中に故国の復興を胸に、業界の発展と地域社会に役立つことを念願して家業に精勵して参りました。

人生も事業も常に平坦ではありません。苦しいことは予告なしに来るものです。日常難局を予測し、之に対応する心の準備が大切で、難局を打開し新局面を開くべく、グチは一切口にしないことこそ成功への鍵でしょう。そして感謝と奉仕の心が豊かな人生を創造するものでしょう。

私は本年喜寿を迎えますが、之は両親より健康な心身を受け、多くの先輩、友人の厚い御指導と御愛顧により、本日の私があることに深い感謝と感銘の日々を送らせていただいています。「苦難こそ我が人生」と、来し方を振返り、未熟な私ですが伝えたい言葉といたします。

橋本　榮　大正2年6月生　山口県出身
▽昭和52年橋本食品㈱代表取締役、56年会長
▽全国食肉事業連副会長、㈳日本食品衛生協会常務理事、福岡県肉連会長、福岡県氷雪販売業会長、北九州市食品衛生協会長を歴任

地球の危機に仏の心で

長谷川　裕一

いま世界では大気汚染によるオゾン層の破壊や酸性雨による緑の枯渇、乱開発による熱帯林の消滅など環境の破壊が今世紀最大の問題となっています。近世、自然を制し、人間の幸せを求めてきた人間の英知は、世界をほぼ一日の行程圏に縮めた反面、大気汚染や資源の枯渇など、人類に地球規模ないしは宇宙規模の破滅的難問を提起することになりました。人間の繁栄のために追究し、自然を制してきた西洋の科学文明が地球を滅ぼすというパラドックスに陥ったわけです。

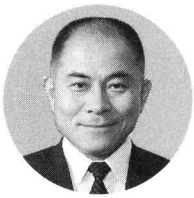
本来、人類の繁栄に役立つはずの科学が地球の滅亡を招く凶器になったのはなぜか？それは西洋の科学文明が人間至上主義と一神教に根ざしているところに根源があるのではないかと思います。人間以外の他の物はすべて人間のためにあるという人間至上主義と、自分が信ずる神以外の一切の神は認めない一神教は、いずれも利己的で征服の思想でもあります。

お釈迦さまがコーサラ国のパセナーディ王とそのお妃に向かって「この世で一番大切なものは何か？」とお尋ねになったとき、お妃は「私自身だと思います」とお答えになった。お釈迦さまはすかさず「そう、だから他を傷つけてはいけない」とおっしゃったと言います。釈尊の教えは、自分や人間だけでなく、山川草木、森羅万象、すべてが仏になる、つまり「悉皆成

仏」とうことです。今日まで人類の進歩と繁栄をリードしてきた西洋の科学文明が行き詰まったいま、求められているのは、この一切の自然をつつみこんだ生命の尊さと愛に目ざめることであり、釈尊の教えを悟る修行の道〝菩薩道〟であると思います。

昭和天皇は「雑草という草はない」と、名もない草をも愛しまれ、「夏たけて　堀の蓮の花みつつ　ほとけの教え　思う朝かな」とお詠みになりましたが、日本の天皇制が世界に類をみない永さと敬愛の中に存続しているのは、まさにわが国皇室の菩薩道の帝王学――真理の探究と布施――お釈迦さまが飢えた虎の餌食に身を投げ出されたように、一切のものに身も心も投げ出す愛と施しの精神を継承されているからだと思います。

西洋でもこうした東洋の思想が見直されてきた今日、私達は永い間日本人の精神伝統を育んできた仏教の心を21世紀に引き継ぎ、人類の繁栄と地球を永遠にしなければなりません。



長谷川　裕一　昭和15年10月生　福岡県出身
▽昭和38年龍谷大学文学部仏教学科卒
▽57年株式会社はせがわ社長
▽現在、博多21会会長・九州経済フォーラム代表世話人・C&C21研究会代表世話人・九州ニュービジネス協議会副会長
▽著書『仏壇の本』『商人道』
〈座右銘〉「心は身体の真似をする」

ある社長と社員のこと

原　俊之

学力、人物共に優秀なN君が、卒業を前にして、家庭の経済事情の急変で進学を諦め、私に就職の斡旋を頼みにきた。私がS県立K中学校教諭をしていた昭和九年三月頃のことである。

不況の時代で、就職も容易ではないとは思いながら、当時、同校の野球部長だった関係で、親しくして頂いていた野球部後援会長のYバス会社の社長A氏に、N君の就職を懇願した。思いもかけず四月早々、A氏から臨時雇として採用するとの通知を受け、N君と共に喜び合った。

ところが、事務職ではなく、定期バスの車掌をさせられていると聞き、私は手紙で、「現場体験から始めるのが会社の常識である。与えられたどのような仕事にも忠実に務めていれば、そのうち上司や社長は必ず認めてくれると思う。頑張り給え」とN君を激励した。

しかし、半年経ち、一年過ぎてもN君は依然として車掌である。私は率直にA氏へ一考を申し入れようかと考えていた矢先「N君の人物、力量等がよく判ったので、営業関係の正社員に任命することに決定した」とA氏から連絡があり、N君も大喜びで辞令を持って報告にきた。

数年後、A社長が衆議院議員に当選されると同時にN君は秘書に抜擢されて上京、氏の勧めでC大学夜間部で勉学に励んでいるとの消息で、私はわがことのように喜んだ。

十六年の秋頃、N君から結核を患い、三鷹の病院で療養中との知らせに、私は当時勤めてい

たF県師範学校の所用で上京の際に同君を見舞いに行った。入院費等を案じた私に、同君は月額八十円ほどの治療費すべてを負担して頂いているA氏に感謝していることを打ち明けてくれた。

幸い二年半の闘病生活でN君は健康を回復し会社に復帰した。ところが、終戦後GHQの指令で、A氏が議員職、社長職などから追放されると、N君はA氏の蔭からの指導を受けながら戦後の困難な地方交通事業の復興、発展に全力を傾注し、最後は同社の副社長にまでなった。

A氏が亡くなる少し前の初冬、同社の総務部長となっていたN君と共に見舞いに行った時、私の手を握って、A氏が「会社がここまで立ち直れたのは、N君のお蔭です」と感謝された。

この二人の結びつきを思い浮べる度に私は、自分に与えられた仕事を忠実に務めることと、そういう人を正しく評価し信頼することの重要性を、しみじみと悟らされるのである。

原　俊之　明治41年9月生　福岡県出身
▽昭和6年東京大学文学部卒、佐賀県立鹿島中学校教諭、福岡第一師範学校教授　▽26年九州大学教育学部教授、九大学生部長、教育学部長、九大学長事務取扱等を歴任、47年3月九大を定年退官　▽同年4月より56年3月まで中村学園大学、短大学長、57年退職、現在同学園理事等
▽著書『トーマス・アーノルド』『教育のこころⅠⅡ』
〈好きな言葉〉「天我が材を生ず必ず用有り」（李白）

信念

原田コト

まだ仄暗い朝、母は炊きたてのご飯を小さい容器につぎ分けて、仏壇や神棚にお供えします。合掌して一心に何ごとか囁いています。一日も欠かしたことはありません。幼い私もよく母に従いてお参りしました。強く優しく慕わしい父や母よりも、まだまだ目に見えない「偉大なもの」の存在に、子供ながら尊厳な驚きと畏敬の念を覚えたのです。

菅王滝を道場として、千有余年の歴史をもつ修験の寺の次女に生まれた私は、こんな環境で厳しく育てられたように思います。

私の生涯は決して平坦な道のりではなく、大きな壁にぶち当たることも屢々でしたが、その度に不思議な「力」に救われたような気がします。例えば、戦争中、主人も主人の二人の弟も召集され、女の細腕で店を守り抜いたこと。有限会社つる平創設とそれに至るまでの経営に骨身を削ったこと等々、挙げれば限りがありません。これらも信仰から生まれた不動の信念と実行によるものでございます。

人の一生は「運否天賦」と申しますが……。さて、大学入試の受験が近づいたので、学問の神様に合格の祈願にお参りします。あとは「運を天にまかせる」ということだけではなく、日常生活の中に信仰的態度と自覚と最善の努力があってこそ、始めて神仏の加護や利益が望める

と思うのです。信仰は人間に強い精神力と正義感を授けます。

戦後急激に核家族化した日本の家は、日曜日には否応なしに揃って教会で敬虔なお祈りを捧げる欧米の家庭のような宗教的行事をほとんど経験しません。第一大切な子供を育てている若い夫婦の住まいには、簡単な仏壇も神棚もめったにないのですから……。子供にとっても大変不幸なことだと思います。

大学に入学したばかりの最愛の長男を、交通事故で一瞬のうちに失った私の従妹が、後日、私の慰めに答えてこう申しました。「わたしの分身だった息子は、またわたしの体の中に帰ってきました。あの子は私の心の中に私と共に生きています」と。霊の存在を認め得た従妹は明るく幸せに暮らしています。信仰から生まれた「安心立命」の境地というべきでしょうか。

原田コト　大正2年7月生　北九州市出身

▽昭和5年大正高等実業女学校卒

▽30年有限会社つる平社長

▽41年より厚生保護司、現在に至る

▽著書『こころ』『しのぶ』

△好きな言葉▽「為せば成る　為さねばならぬ何ごとも成らぬは人の為さぬなりけり」

得意淡然　失意泰然

平田満夫

人は心の持ち方で変るものである。悲しい時に泣き、嬉しい時に笑うのはそれなりにいいのだが、時と場合によっては悲しい時に笑い、嬉しい時に泣かなければならないこともある。

得意淡然
失意泰然

この言葉を味わっていただきたいのである。得意な時にはむしろ淡々として己を誇らない。逆に失意のどん底にある時は悠々として取り乱さず、自分を忘れない――こうした註釈を加えることが、この言葉の持つ奥深い味を傷つけてしまうくらい、この言葉の価値は広く、深く、遙かだと思う。

この言葉が勝海舟の座右の銘だと聞かされたのは三十年も前のことだが、西郷隆盛と江戸城の無血あけ渡しをやってのけた大人物の銘として「なるほど」と頷(うなず)けるものだった。ところがその後、この言葉は明朝末期の碩学、崔後渠なる人の作で、得意、失意の二行句のあとに

有事斬然
無事澄然

の二行があるとの新聞記事を読んだ。

このたびこの稿を書くに当って勝海舟や崔後渠なる人たちの人物、著作などを新聞社の調査室や図書館、中国文学の先生たちにも当って私なりに勉強した。しかし、努力不足のせいで、いまだにすっきりした全体像が割り出せない。わずかにここで報告できるのは先ほどからの言葉――得意・失意・有事・無事の四行句のあとにさらに二行の同律句が続き、その四言六行の句が勝海舟の「六然（りくぜん）の訓」といわれたという話である。

しかし、それはそれとして

得　意　淡　然

失　意　泰　然

の言葉の持つ意義は少しも衰えるものではない。

私と共に心ある人々の銘として後々に伝えたいものである。

平田満夫　大正6年12月生　福岡県出身
▽昭和15年同志社高商卒、毎日新聞入社、昭和47年取締役に就任、50年取締役を辞任
▽52年新聞輸送（東京）社長に就任、現在に至る
△好きな言葉▽「得意淡然、失意泰然」

何よりもりっぱな親に

福　元　喜久雄

小学校低学年の男子。「お母さんの一番大事な宝物は何か聞いてみよう」と宿題が出た。

「お母さん、ダイヤモンドなんか持ってるかな。宝石はどうかな……」彼の頭は、そういう思いでいっぱいだったのだろう。あくる日、少年は、輝く顔で先生に報告した。「先生、うちのお母さんたらね、いちばん大事な宝物は、僕なんだって……。変だなって思ったけど、何だか僕、うれしくなって、外へ出てはね回っちゃった」

最近のテレビで心に強く残ったワンカットである。

今の世の中、すべての面で、唯物的になった多くの大人のはざまで、子供たちも年ごろになると、ブランド品だとか、海外旅行だとか、同権だから女だって何でもするとか、どうも、もろともに唯物主義的傾向に流されているようである。

物が豊かで社会に活力がある、これは決して悪いことではない。女性の社会進出もとても良いことである。我々も、親である前に人間的でなくては——と目覚めることも良いことだ。

しかし、日本人は働き過ぎだから、もっと生活をエンジョイすべきだと、そんな風潮に踊らされてはいないだろうか。問題は、そのために子供の養育が犠牲になっていはしないか。国際化だ、自由だ、パリ・ショッピングだのの前に足元を、家庭教育を見直す大事な時が来ている

と思う。

矢野壽男氏著の『親を見りゃボクの将来知れたもの』は中学生の冷めた眼を警告している。

自動車を　洗ってやる父　腹が立つ　子供の僕に　あれほどの熱は　　2年男

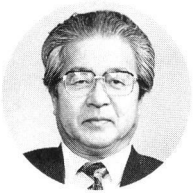
母親に　見えてはいやと　濃い化粧　3年女

スリップで　母平気なり　暑いとて　2年男　こうなると、家庭教育は崩壊しそうである。

これに比べて「小松さつき」さんの歌は心をうつ。

肌ぬぎて涼まばと思へど　三人の子ある母なり堪へて汗拭ふ

子供を幼稚園、学校任せが多過ぎないか。親ならば、親だから、子供が一人前になるまでの責任は果たした上でレジャーや人間開放に励んでもらいたい。



福元　喜久雄　昭和2年12月生　鹿児島県出身
▽昭和20年早稲田大学高等師範部国漢科中退、24年鹿児島青年師範学校卒、中学教師、63年教職退職
▽鹿児島県学校図書館協議会会長、小学校・中学校長、高校講師歴。現在無職

三つの條件

福山庸治

私も社長として十年余りを経過し、還暦を迎える歳になり、そろそろ後継者のことを考えなければならない時がきたように思います。

諸先輩のご意見や書かれたものなどを読みながら、かつまた自分の過去を振り返り、一人赤面しつつも、世の常の親と同様、後継者選びになると、自分の成し得なかったことを後のものに求める甘え心がある。このことは百も承知の上で後継者達に書きしるすことにします。

まず、第一の條件は人徳（人格）のある人をあげたい。私もいつもこの言葉の重みを感じながらの生活ではあるが、「会社はその社長の人格以上のものにはならない」ということです。そのためには出来るだけ専門書以外の本をも三十代、四十代にしっかり読んでおくことです。「腹中在書」といわれる如く、四、五冊の書はいつでも人に薦められるものを持つべきです。

第二の條件は健康です。この歳になって、つくづく感ずることは、「健全な精神は健全な身体に宿る」と言いますが、まさにその通りです。体に自信がないとりっぱな考えも、経営も出来ません。そのためには若い時から飽食の時代とはいえ、暴飲暴食はやらないことです。今の日本は世界の各方面より食糧が輸入されますが、出来ることなら自分の住んでいる地域の旬のものを食べる努力をすべきだと思います。動物学者の話によると、ツルもカメも皆旬のものを

食べていると聞いています。ついでに申しますと、両者とも速度はおそいが、その分だけ遠くまで行くそうです。人間も急ぐだけでは長持ちしません。

第三の條件は、やはり能力のあることが必要です。即ち先を見る力です。そのためにはいろいろの情報が大切です。情報の集め方には色々あると思いますが、大事なことは各方面に活躍されている方々との人間関係を持つことです。それには若い時から、人との出会い、一期一会を大切にして人の話をよく聞くことです。そして出来れば相手からの情報を戴くだけでなく、こちらからも情報をさしあげることです。即ち、ギブ・アンド・テイクの関係が大切です。

最後に経営者たるものは常にロマンを持ち、ものに感動することを忘れてはならないと思います。

福山庸治　昭和6年1月生　山口県出身
▽昭和29年関西大学文学部史学科卒、山口県立徳山商工高等学校奉職、37年3月同校退職
▽37年4月㈱丸福ホテル入社、専務、副社長、52年代表取締役社長就任、現在に至る
▽㈳山口県食品衛生協会長、山口県旅館環境衛生同業組合副理事長、裁判所調停委員
▽著書『徳山商工高校三十周年史』（共著）『随想―旅』

人生余熱あり——俳句との出会い

藤川欣佐

私が昭和五十一年春、再就職で高藤建設に入社してしばらくたった頃、誘われて俳句と出会った。ちょうど、余生の楽しみに何かをやろうと思っていた矢先、先生の河野白村さんは、市役所当時の上司だったのを幸い、早速句会に入れてもらった。

句会に出て十七文字にふりまわされているうちに、思いがけず次の句が特選に入った。

もやひ船ともしび朧おぼろかな　白舟

いつも何気なく眺めやっていた関門港の夜景である。これに勢いを得て、以来十有余年を経た。

俳句の道をたどりはじめて、多くの句友を得て交遊が始まり私の俳句開眼を促した。正に仙崖の書にある「詩ハ会スル人ニ向ッテ吟ジ　酒ハ知己ニ逢フテ酔フ」の心境であった。

俳人のバイブルともいうべき歳時記が次に私をとらえた。日本語の宝石箱、日本人の感情のインデックスといわれ、俳人座右の書である。季節の題目と実例を集め、四季に分類配列したものである。自分をめぐっているものは、人間社会や仕事ばかりと思っていた私に、いかに自然というものが、一木一草から魚類鳥獣にいたるまで、息をのむばかりに美しいかを知らせてくれたのは歳時記であった。何も知らなかった私の植木市での句

名を聞きてをだまきの鉢土産とす　白舟

竹の秋というのが季節の春で、竹の春は季節でいうと秋だと知ったときの句

磨崖佛在(お)はすあたりの竹の春　白舟

その頃、仲の良い句友と『三余』と名づけた合同句集を発刊したことも想い出である。俳句手帳を懐に、奥の細道へ芭蕉の跡を尋ね、萬里の長城へ立って詠み、先帝祭を、月を、花をと、私は身ほとりのもの全てを俳句にのせて、歳時記と共に生きる生活であった。

私共は回帰なき人生の旅路にあって、一期一会の自然や人や物と出会い、また別れる。人生は挑まなければ応えてくれない。惰性で生きて人生をくすぼらせてはならぬ。世の中との接点を多くし、生涯一書生の気概をもって、内なるものに火をつけよう。人生の余熱をもやし、大きな落日となって輝くべしと思う。

七曜を忘じて翁の春うらら　白舟

藤川欣佐　大正7年8月生　福岡県出身
▽昭和15年旧制山口高等商業学校卒、日満商事入社
▽25年門司市役所入職、46年門司区長、51年退職
▽同年髙藤建設㈱入社、54年常務取締役、58年退社
▽同年門司区選挙管理委員、62年退任
▽現在北九州第一老人大学院運営委員長
▽著書『句集三余』（俳号白舟）

「国際化」と私たちの生活

藤本新二

最近「国際化」という言葉は、流行語的色彩を帯びて語られる時代になりました。

国際化という言葉と連動して、国際交流、帰国子女、留学生、日本語学校、外国人不法就労者、農産物自由化、企業の海外進出、多国籍企業、文化交流、難民問題、国際ボランティア活動等々が語られます。

これら全て、または一部を指して我々は「国際化」という言葉を用いていますが、そこからは国際化の全体像や本質は出てきません。

一九七〇年代、私たちの日常的な多くのことが、全ての国の人々に共通した、いわば人類全体の運命を左右しかねない課題として明らかにされ、私たちの目に映るようになってきました。核兵器、原爆、酸性雨や温室効果、森林の乱伐と砂漠化等の環境問題、貧富のアンバランスと人口爆発等の南北問題、石油に象徴される資源問題等々、そのどれをとっても国境を越えた共同の対策を講じると共に、私たちの日常生活の変革的行動なしには解決できない問題です。

このような状況の中で人々は、みんなの努力で地球の危機を回避しなければならないことに気付き、行動しだしたのです。

国際化とは、ある国のことは地球全体の他の国と関係している、いわゆる地球化した社会に

おいて人類全体が生存、共存できるように、国と国との垣根をできるだけ低くして、意図的に協働し合うことなのです。また、地球市民の一人一人がこのような認識の下に生き方を変えていくことなのです。

国際化とは、決して海外旅行に出かけることや英会話が上手になることではありません。もっと、私たちの日常生活の仕組みに関わることです。

世界の各地で、また私たちの地域社会の中で生起する国際的諸問題は、マスコミを通じて同時的に私たちに知らされます。これらのことを知り、世界では、地域ではこんなことが起きているのだという、知識を増やすだけの物知りに終わるのではなく、それらのことと私の生き方とどう関わっているか、国際的諸問題を私の内なる問題として認識し、日常生活行動に反映させ得る人々が増えることが、日本社会の国際化の尺度になるのです。

藤本新二　昭和10年6月生　熊本県出身
▽昭和34年熊本大学法文学部法科卒、熊本YMCAに奉職、以後日本YMCA研究所、東京YMCA、日本YMCA同盟を経て38年北九州YMCAに赴任
▽現在財団法人北九州YMCA総主事、学校法人北九州YMCA学園学園長
▽著書『日常生活の中の外来語』『ボランティアハンドブック』他
〈好きな言葉〉「初心忘れるべからず」

ロマンと勇気、真の喜びをつかめ

二田義松

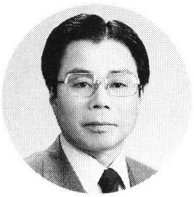
悠々たる哉天壌遼々たる哉古今
五尺の小躯を以て此大をはからむとす
ホレーショの哲学意に
何等のオーソリティーを価するものぞ
万有の真相は唯一言にして悉す
曰く「不可解」
我この恨を懐て煩悶終に死を決す
既に巌頭に立つに及んで
胸中何等の不安あるなし
始めて知る
大なる悲観は大なる楽観に一致するを

明治三十六年五月、華厳の滝に身を投じ、短い生涯を閉じた旧制一高の秀才藤村操の辞世の句である。太平洋戦争の真っただ中、昼は軍需工場、夜は中学という暗い青春を強いられていた私にとって、この「巌頭の感」と題する句は大きなロマンと勇気を与えてくれたものである。

今にして思えば、秀才に対する憧憬、人生への達観に対する感動であったのだろうか。

戦後四十数年。廃墟の中から立ち上った人々は寝食を忘れ、ひたすら働き続け、奇跡ともいわれる経済大国日本が誕生した。私も六十三歳の今日まで、まさに「禍福は糾(あざな)える縄」の如き道程を辿りながら、全力で生き抜いてきたと思うが、「巌頭の感」が暗い青春時代の私にとってのロマンであったように、その後の人生においても苦しければ苦しいほどに、私は人生に対するロマン、未来に対する夢を抱き続けた。それは今も青年時代と少しも変ってはいないつもりである。

3K企業を敬遠し、楽な仕事、高給、休暇の多い企業に生甲斐を求める若者の風潮を私は心から憂えている。贅沢、快楽、安易から人生の真の歓び、感動は決して生まれない。苦難に真正面から立ち向う気力、七転八起の忍耐力、そんな生き方の中にこそロマンと勇気、そして大きな感動があることを知ってほしいと願っている。



二田義松　大正15年9月生　福岡県出身
▽昭和20年旧制県立久留米中学卒業▽27年二田商店設立、33年に株式会社に改組、取締役社長、57年株式会社フタタに社名変更、現在に至る
＜好きな言葉＞「誠実」「人間愛」「情熱」「完全燃焼」

表現出来るだけの誠意を養おう

待鳥初民

これまでの人生経験の中で、もう少し早くこのことに気がついておればもっと人生が豊かになったのにと思いつく事例は多い。私は毎年社の行動目標を掲げるが、自身のそんな実感の中から、これだけはぜひ社員に身につけてほしいと願う事項を目標に掲げることにしている。

或る年、次のような目標を設定した。

「表現出来るだけの誠意を養おう」

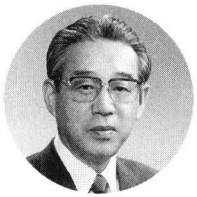
誰しも誠意のない人はいない。例えば、お見舞、お礼状やお祝い、そんなことをしようと思いながらも、つい忙しさに時を失することが過去にあったが、そんな時「気持ちは充分持っていたが、忙しさのために出来なかったのだ」と自らを慰めていた。しかし、それをこまめに実行する友人もいる。敬意をもってそんな友人に接していて気がついたことは、誠意の量の差で、優先順位のとり方が違うということだった。潤いある人生のためにも心すべきことと考えている。

「ビジネスマンとして必要な後天的性格を育成しよう」

これも或る年の行動目標である。家庭や学校ではなかなか身につけることが難しい事項だが、入社後ビジネスマンとして身につけてほしい具体的六項目を掲げた。

㈠お客様の立場で考える習慣をつけよう㈡会社・上司・部下の立場でも考える習慣をつけよう㈢苦情はコミュニケーションを深めるチャンスと考えるようにしよう㈣面倒くさがらぬようにしよう㈤お礼を言うことを忘れないようにしよう㈥時間を守るようにしよう。

平凡なことの実行が難しいのが世の常である。例えば㈢、お得意様からの苦情に「私はチャンと決まった通りにしました」などと責任のなすり合いになり勝ちであるが、苦情はお客様に自分を判っていただく絶好のチャンス、まずは一刻も早いお詫び、そしてお得意様のお話を素直に聞く、そんな対応がむしろ禍を転じて福となすに通ずる。苦情を恐れず怖がらずに受けとめる性格に育てていこう。そんな風に社員に呼びかけている。漫然と人生を過ごすのではなく、社会人として身につけるべき必須の事項を若い人達に知っていただきたいものである。



待鳥初民　大正15年2月生　長崎県出身
▽昭和20年国立奉天工業大学機械科卒、22年㈲藤町商店設立、28年東蜂産業㈱に社名変更
▽57年代表取締役社長就任、58年㈱トーホーに社名変更
▽同年9月大阪証券取引所第二部及び福岡証券取引所に株式上場

海への期待

松井　薫

中国の残留孤児が来日して、初めて見る海に感激して、海水を舐めていたのが印象的でした。

我々は海が身近にあるため、日頃あまり海について感ずることもありませんが、海は生物の生まれた源であり、海のない地球は考えられない。人間にとって海はなくてはならぬものです。

昔から食糧としての水産物や、海上交通の面で海は重要な役割を果しており、我々の生活、遊びの場としても親しんできましたが、科学技術の進歩により、いろいろな新たな海底資源が発見されており、また海洋エネルギー、海洋空間、海水それ自体も今後の研究開発により、無限の可能性を秘めております。

我国は海に囲まれ、また恵まれた海域にあるので資源も豊富にあり、海洋国として世界一の漁業国でもあります。戦後の食糧不足の時に動物タンパク供給源として水産が重要な役割を果したことは忘れることが出来ません。

一方、世界の人口は増え続けており、食糧不足が益々大きな問題です。海は肥料の必要はなく、環境を保全することにより自然のサイクルで生産が行われます。

問題は、自然の再生産を阻害する海の汚染です。海には回復力がありますが、限度を越えて生物が育たなくなったのでは取り返しがつきません。

これまでは資源を活用する本質から離れた、動物愛護や各国の権益保持が先行論議され、肝腎の環境問題は積極的な国際協力に欠けておりましたが、漸く先進国の合意の下に地球の環境保全が重要問題として取り上げられ、実行される方向にあります。

今後海底資源の開発をはじめ、新しい分野の開発に着手すれば、海洋の汚染はさらに進むことになるので早急な事前の対応が必要です。

海は広大であるが、一つしかありません。私は永年水産分野で働いておりますので、海には格別の関心があります。我国は豊かな海に恵まれており、この自然の美しい海を守りながら開発することは我国の新しい世紀に向けての理念と方策にも通ずるものです。

海は古くて新しい問題です。次の世代を担う多くの人達が海に関心をもち、海に志を立て、取り組むことを期待します。

松井　薫　大正15年5月生　福岡県出身
▽昭和22年旧制東京水産大学漁業科卒、ニチモウ株式会社入社、54年同社社長
▽現在同社取締役相談役
〈好きな言葉〉「日に新たなり」

心映え

松本　攻

「伝えたいこと、伝えたい言葉」に逡巡しておりますうちに、昔読んだ同名の本があったなと思いつきました。

書架をさがしますと、内村鑑三先生の「後世への最大遺物」（岩波文庫）でした。先生が約百年前の明治二十一年に箱根で講演されたものですが、読み返しましてその新鮮さに驚きます。

後世への遺物は金もいい。社会の用に使ってしまえばいい。国家社会の発展に役立つ事業もいい。ジョン・ロックの人間尊重の思想が、ルソーを経て、アメリカ独立とフランス革命をもたらした。思想を残すのもいい。しかし、誰にもできる最高の遺物は、〝勇ましい高尚な生涯〟であると言われています。もちろん、先生は敬虔なクリスチャンですが、信仰のワクを超えて立派な生き方に最大の評価を与えられているのです。

この頃はあまり耳にしませんが、懐かしい言葉に庭訓（ていきん）があります。立派な生き方の両親によって培われた家庭の躾（しつけ）のことで、この頃の世情を思いますと、この庭訓が見なおされてもいいように思います。

高尚な生活とは、日々、志を高く持して生活することでしょう。なにも難しいことではなく、すこしでも自分を高め、世の中にすこしでも役立ちたいと心がけることでしょう。そうした人

たちがよい家庭をつくり、よい職場をつくる。そうして地域社会がうるおいのある社会となるのでしょう。

この気持ちを、私は「心映え」というのだと思います。心映えのある青年は、眼が輝いていますし、進退もフェアーで、男らしさ、すがすがしさを感じさせるでしょう。女性は思いやりのある聡明さになるでしょう。自分を高く持とうとする、このゆとりが親切となって表れます。

百年を経て内村先生の言葉に魅力を感じるのは、「勇ましい高尚な生涯」が、現代においてもキラキラと新鮮な輝きを持つからでしょう。心映えのある生き方をいたしたいものです。

松本　攻　大正12年6月生　福岡市出身

▽昭和21年福岡経済専門学校卒

▽32年福岡相互銀行（現福岡シティ銀行）入行、61年より同行代表取締役会長

▽現在、福岡県公安委員長、北九州カントリー倶楽部理事長

「三つの心」を大切に

三島正一

仕事をしていていつも思うことは、お客様のためになっているか否か、お客様から喜んで頂いているか否かが、成功するかどうかの大きな分かれ道だと思っています。そのために「有難い」、「勿体ない」、「何くそ」の三つの心を私の信条として心がけるようにしています。

何事も最初は謙虚な気持で頑張っていても、段々事がうまく運びだすうちに、お客様や諸々の方々のお世話になっていることへの感謝をつい忘れがちです。自分の力を過信し、誤った錯覚に陥るのです。常にお客様を第一に考え、「有難い」という感謝の気持を行動の基本に心がければ、大きな迷惑をかけ信頼を失うようなことは、ないと思っています。

日本は今、物余りの時代と言われています。お金さえ出せば全て手に入る世の中になり、大変喜ばしいことではありますが、この状態がいつまでも続くとは思えません。

終戦後まもない頃、物不足の折でもあり、お米一粒たりとて大事にしたものです。それは、物を作ってくれた人への感謝と同時に、「有難い」では表現できない、人力を超えた神に対しての感謝の意を込めた「勿体ない」という気持なのです。近い将来、必ず又見直される時がくるものと思います。

景気にも好・不況の波があるように、人生に於いても諸々の問題に遭遇し、常に順風満帆と

は限りません。

事を処す場合、簡単に諦めてしまうか、最後迄やり遂げるか否かによって人生も大きく変ってきます。年輪は冬の厳しい時にじっと耐えることによってできるものですが、人間も同様に様々な困難を「何くそ」精神で克服した時に初めて幅の広い人間が形成できると思います。

『青い鳥』の中で、チルチルとミチルは青い鳥を求めておとぎの国や思い出の国、未来の国を探しましたが、結局何処にも幸福を呼ぶ青い鳥を見つけることができず、最後は自分の力で解決しなければならないことがわかったのです。現実からの逃避や他力本願に走らず、「何くそ」精神で事にあたり、力一杯頑張っていくことこそが最も大切なことだと思います。

「三つの心」を実践するためには、真に強い精神を必要とします。渾沌とした、激動する現代社会に生きる一員として忘れてはならないことなのです。

三島　正　一　昭和14年8月生　北九州市出身
▽昭和37年中央大学経済学部卒、三島光産株式会社入社、51年同社代表取締役社長就任
〈好きな言葉〉「如何に長く生きたかではなく、如何に良く生きたかが問題である」

ヤマを掛ける

水野　勲

もう半世紀以上も昔の話になるが、旧制高等学校から大学受験のあの経験は、今もって忘れることが出来ない。その頃の東大経済学部の入学試験は、唯の一科目、外国語（英・独・仏の何れか）の和訳だけという極めて単純なやり方が長くつづいていた。それが昭和九年三月、私の受験の時に、突如として、従来の欧文和訳に新たに日本史、東洋史、西洋史、つまり世界史全般を加えるという、思いも掛けぬことが起り、しかもその発表は受験日の三週間位前だった。

さあ大変だ。何はともあれ、古今東西の歴史の受験勉強をどうするのか。当時の高校の歴史の講義といえば、例えば日本史など、担当の教授が考古学者だったから、縄文土器だとか弥生式文化だとかの話ばかりで一年過ぎてしまうという、何とものんびりした時代だった。おそらく全国の高校はどこでも大体このようなことだったと思う。だから高校で習った歴史を反芻（はんすう）したところで、受験の役に立つ筈がない。

ところで、一体、はじめて世界歴史を試験科目に加えたのはなぜか、このぼう大な歴史の問題から、受験生のどんな資質を見抜こうとするのか――と私は考える。さらに考える。合否の線を明確に、しかも短い採点時間で容易に判定する試験問題とはどんなものだろうか。

おそらく種々雑多な歴史的事件について、暗記力を試すようなものでは、万が一にもないだ

ろう。出題の傾向としては、時系列の面からいえば、世界史という潮流の中で、それを大きく変動させた、文化なり思想なり制度なりについてではなかろうか。また、東西両洋についていえば、例えば、ある時期における日本とアジア大陸とのかかわり合いといったような、大づかみな問題が出されるのではないか。これだ、これにちがいないと決めて大ヤマを掛けた。極めて少ない準備期間を、専らこのヤマが当たるのを信じながら、効率的な学習に充てた。幸に予想通りの傾向の出題で、サッサと答案を書き終え試験場を後にした。こうして浪人の憂き目を免れたのだった。

この一か八かの決断は、幸運もあったが、やはり受験生の立場をはなれて、出題者の意図をあれこれ忖度（そんたく）した結果だった。受験も一つの対人関係だとすれば、冷静な第三者的観察を成し得る能力が大切だ、ということになるのだろうか。

水野　勲　大正3年8月生　福岡県出身
▽昭和12年旧制東京帝国大学経済学部卒、日本製鉄入社、爾来会社名は八幡製鉄、新日本製鉄と変るが、終始鉄鋼業に従事、その大部分を八幡製鉄所で勤務
▽54年6月副社長、八幡製鉄所長を最後に現役を退く、その後新日鉄常任顧問、顧問として平成2年6月まで八幡本事務所で執務
▽現在北九州国際研修協会理事長

一生懸命に生きる

溝口　昇

昨年の秋に次男が結婚をした。結婚式での本人挨拶の中で、両親に対する感謝の気持ちを表明してくれた。皆様の前で堂々とやられて、親として面映ゆい気持ちと共にうれしいものがあった。親を超えたいなどと抜け抜けとやられて、一本取られたという気がしたし、また、そう簡単には超えさせないぞという気概も湧いた。

我家では、正月に屠蘇を祝った後、親父が一席ブツ習慣がある。私も父からその年々にいろいろな話を聞いたが、その内容は定かには覚えていない。しかし、親父の背中を見て育ったという思いはある。私には親父の背中ほどの自信は全く無いが、親譲りのこの正月の習慣だけは、子供達にはあまりいい顔はされないが、毎年続けたいと思っている。今年は三男の就職の年でもあったので、「負託に応える人間になれ」という話をした。家族が期待するもの、会社が期待するもの、そして社会が、大きくは国が期待するものは何かということを、自らがしっかり考え、それに応えるべく一生懸命に努力をして欲しい、そんな話をした。

一生懸命ということが好きである。遠藤周作氏の『落第坊主の履歴書』を読んだ中に、「一所懸命になると」というタイトルで、小学校一年の頃の体験として、お使いの帰りにフロシキを落とすといけない一心で、頭の帽子の中に入れ、結果は途中で挨拶をしたために落とした話。

ある学生に評論家A氏に原稿のお願いをしてくることを初仕事として命じた時、興奮した学生がそのまま素っ飛んで行って、「前から電話もくれずに、急にたずねられても困る」と忙しいA氏に腹をたてられ、必死のその学生はすぐに走り出て、前の煙草屋から公衆電話をかけ「ただ今、前から電話をかけております」。A氏は笑いだし、結局は原稿を書くことを承知された話など、愚直なまでにひたむきな一生懸命さに共感を覚えたものである。

一生懸命のあまり、大局を誤ることのないよう自戒をしながら、これからも、一生懸命に生きたいと思う。

溝口　昇　昭和8年1月生　福岡県出身
▽昭和30年九州大学工学部卒、西日本鉄道㈱入社、電車局電気課長
▽56年西鉄電設工業㈱出向・常務取締役営業本部長、平成2年6月同社長就任現在に至る
〈好きな言葉〉「フェスティナ・レンテ（ゆっくり急げ）」

貞節という美徳の復権を！
――ある反動教師の日記――

御手洗　博

今年も好況で、就職戦線は売手市場である。女子学生が大半を占めるわが学部でも、六月の下旬にして、既に内定通知を得た者が相当数にのぼる。「協定」のことはともあれ、教師としては一先ず安堵する。だが、同じ年頃の娘を持つ父親としては、安閑と喜んでばかりはいられない。急遽、夏休み前の最後の講義のテーマを「ジュリエットの情熱」から「ブリトマートの貞節」へと変更する。

なにせ詩人が「狂乱」と呼んだ夏である。老人でさえ「多情の歌にすごしがち」だという季節だけに、自活の道を易々と得て有頂天になった若い女性が、己の肉体の奥から発動する本能の叫びを、ロメオと一夜を過したジュリエットのそれと同質であると錯覚する恐れがあるからだ。ジュリエットの情熱は文字通り一夜だけのものである。それだけに激しく、美しく燃え尽きる。だが、一回の結合で死ぬわけにはいかぬ常人は、情熱の完全燃焼ではなく、その持続をこそ考えねばならぬ。そのための工夫が性に慎しみ深くあれという先達の教えなのだ。この教えを忘れて、アッシーくんやミツグくんをロメオに見立てて行動したとすれば、情熱はたちどころに枯渇し、その行為は、ジュリエットのように「死に到達するまでの生の称揚」の意義は

持ち得ず、コンビニで仕入れた性知識のうす汚い実演に終わるのだ。

性のモラルが疎んじられ、性への衝動に忠実であることが持て映されている今日こそ、一瞬にして燃え上り、刹那にして消え去るジュリエットの情熱を推称するよりも、激しい情熱を克己に包んだブリトマートの貞節を説いてしかるべきだ。もとより、貞節すなわち性における慎み深さは、女性にのみ求められるべきものではない。一回性の蜉蝣（かげろう）と違った性のしくみを持つ人間なれば、そのエロティシズムの拡散化・卑小化を最小限にとどめる意味において、貞節なる観念はひとしく男女の徳性となさねばならない。

御手洗　博　昭和8年11月生　島根県出身
▽昭和40年早稲田大学大学院文学研究科（博士課程）修了
▽現在北九州大学外国語学部教授

トコトン追求してみろ

三井孝昭

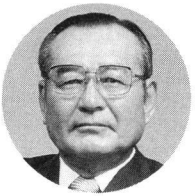
私は、大正十年、熊本県八代市で生まれました。五歳の時に母が、十二歳の時に父が病没し苦しい家計を助けるために、私は商業高校を二年で中退し、十四歳でつてを頼って北九州の安川電機に就職しました。

安川電機では、モーター芯を打ち抜く金型製造に配属され、これが私のその後の人生を決する金型との出会いとなりました。

当時のモーター金型の作り方は、ヤスリ仕上げにより出来上がったものを熱処理するという作り方でした。鋼（はがね）というものは、焼入れ（熱処理）しますと歪みが生じ寸法が狂う訳で、そうして、組立てた金型の精度も狂ってしまい、長持ちもしない訳です。しかし、当時としては、焼入れして硬くなった鋼を加工するような技術も機械もなく、鋼が焼きを入れて狂うことは当然だというふうに教わっていました。しかし、私はいくら硬くても物の形状というものは、結局XYZの点の組合わせと考えれば絶対に削る方法があるはずだ、と確信をして、十年近くも考えた末に、それを実行するために仲間二人と昭和二十四年に独立しました。

しかし、独立はしたものの、金もない、設備もない、知名度もないの「ないないづくし」の中で、あるのは持ち前の創意工夫と、ねばり強さと、信念だけでという状態でした。そして、

やっとの思いで手作りでグラインダーを作り、その年に熱処理後の総研磨仕上げの金型の開発に成功し、従来の五倍も長持ちする金型を完成させました。その後、タングステンカーバイドダイの開発の他、いろいろな開発をしましたが、開発にあたっての私の信念は、「最初からダメと言うな。本当に無理とわかるまでトコトン追求してみろ」ということです。これは、何も開発に関してのことだけではなく、みなさんが今後何かを始めようとするとき、目的を持って物事に取り組んだときなど、この言葉を思い出して実践して頂きたいと思います。また、失敗を恐れてはいけません。人間には必ず失敗があります。しかし、同じ失敗を二度と繰り返してはいけません。なぜ失敗したか失敗の原因を冷静に、徹底的に分析する中で、新しい発見が生まれ、失敗はむしろ成功の糧となります。失敗を乗り越えてこそ、成功があるのです。



三井孝昭　大正10年2月生　熊本県八代市出身
▽昭和22年旧制北築中学校卒業
▽15年㈱安川電機製作所入社、23年12月同社退社
▽24年1月三井工作所創立、32年4月㈱三井工作所（59年5月㈱三井ハイテックに社名変更）設立と同時に代表取締役社長に就任、平成2年4月代表取締役会長に就任
現在に至る
▽日本金型工業会常任理事、北九州貿易協会理事、㈶三井金型振興財団理事長、直方コンピューターカレッジ理事長

真実を語る勇気をもとう

皆川節夫

「重勝！　お前がこのスミを折ったんじゃろうが」、日記帖をひらき硯箱のふたを置いた祖父の手にはまっ二つに折れた愛用の名墨が掴みあげられていました。

「うんにゃ。オレは折っちょらん」「ウソ言うな。お前が折らにゃ節坊が折る筈があるか！」と、祖父の語気はすさまじく家中に響きわたりました。

「折らんもんは折らん。まい晩仏さまにお経をあげるじいちゃんがなしそんなにオレを疑うんか」と。

思いもかけぬ孫の反撃に祖父は荒々しくも兄を廊下にひき据えたのです。やぶ蚊がわめきたける夏の宵に、気もそぞろに〝うちわ〟を片手に私はけん命に蚊群から兄を防いでおりました。

勇気があってりりしく、それでいて少しもふだんと変らぬ兄を見て、「重勝あんちゃんは偉いなー」と心を奪われながらも、真犯人の私は「じいちゃん、オレが折ったんじゃ。あんちゃんをこらえておくれ」と、祖父に自白する勇気を奮い立たせることが出来ませんでした。

なお、このころは、夕食ー夕べのおつとめー日記がきー就寝が祖父の夕べの生活パターンとなっていました。だから、この夜も家族そろって仏壇に向い、祖父の読経に孫の私たちも唱和させられていたのです。そして、この間じゅうも、ことの露顕をおそれるあまり私の胸は痛み

ふるえていたのでした。

つね日頃から祖父に育てられた〝愛慕如来心〟もいずこへやら。怯懦のためにいつも仰いでいた如来像がこの夜は全く見えなくなっていたことを、私はいまも鮮明に記憶しています。

読経を終わり、すーっと祖父が座を起ち文机に向ってからのいきさつは前に述べました。

平成二年二月十一日、私は七十一歳になり、晩年に進もうとしています。

昭和をすぎ平成に入り、揺籃期のこの体験に、かぎりなく救われた過去を想いめぐらすとき、〝至福なる者〟とは私のことであり、恩寵とはこの〝スミ折り事件〟のことだったんだと静かにとうとく感謝しています。

ちなみに十一歳の兄は日本海軍に、六歳の弟は日本陸軍に所属してともに大東亜戦争（太平洋戦争）をたたかい抜きました。

皆川節夫　大正8年2月生　福岡県出身
▽昭和15年陸士54期卒、大東亜戦争に従軍（北支・ニューギニア）
▽24年小倉外事専門学校（現北九州大学）卒業
▽米陸軍コンサルタント
▽32年㈱皆川経営研究所を設立、ＤＭＰを普及、現在に至る
▽著書『人格を磨く本』

薩摩の教訓

宮田則子

徳川時代、薩摩の国では独特の郷中教育が行われ、明治維新の大業を成し遂げた西郷隆盛や大久保利通も、この郷中教育で育てられたことはよく知られています。

この郷中教育の中で、「負けるな」「いじめるな」「うそを言うな」ということが厳しく教えられたそうです。

「負けるな」とは、自分に負けるなということと同時に、人にも負けるなということです。自分に負けるなとは、自分で決めた計画や目標、仕事に対して、くじけることなく、最後まで責任を持って根気よくやり遂げる。そして日常生活の中で、してはならない悪い行いなどの誘惑に負けずに、自分に打ち勝つ強い心を持てということ。

「いじめるな」とは、常に弱い人の立場に立って物事を考え、思いやりのある、やさしい心の人になれということです。社会は一人ひとりが集まって、みんなで幸せになるように手をとり合っていって初めて成り立つ。その際、お互いの人格を認め合い、大事にし合っていく思いやりの心が大事だと教えたのでしょう。

そして「うそを言うな」とは、正直であれということ。つまり、先入観やなにかでへんに構えず、素直な心で人の意見に耳を傾け、自らの心に問うて判断し、常に陰ひなたなく、正しく

偽りのない行動をせよということです。私達はややもすると自分本位に物事を考え、自分が有利になるように謀って行動しがちな弱い人間。しかし、それがひとたび露顕すると、人の信頼を失い、つま弾きされるようになる。人と人とのつながりは、偽りのない心のつながりだということを諭したわけです。

この三つの訓言は、現代社会にも通じると思います。今日は、人の考え方や価値観も多様化し、一方では物質主義と、物質的豊かさを追求するための管理社会やエリート主義によるストレスは、子供の世界にも陰湿ないじめや非行の影を落としています。

ハイテク、情報化社会の中で、改めて〝心〟が説かれ、人間性が問われているとき、この薩摩の訓言、古くて新しい人間教育の原点ではないでしょうか。

宮田則子　昭和5年1月生　鹿児島県出身
▽昭和24年鹿児島青年師範学校卒業、中学校教諭、小学校校長、鹿児島県小・中学校婦人管理職会会長、平成2年3月退職
▽現在鹿児島市勤労婦人センター所長

講の者を大事にせよ

村谷　正隆

わたくしの父は村谷家の一人息子として生れ、農大を出て、当時澎湃として起った千石興太郎氏の産業組合運動に共鳴し、のち町の農協組合長をつとめて一生を終わった平凡な一町民であった。

その父が、長男のわたくしに、いつも口癖のように言っていたことは「講（こう）（隣組）の者を大事にせよ」ということであった。隣近所の人たちをいたわれということである。

わたくしの家は、むかし庄屋をしていたので、父の言葉は家代々教えつがれた家訓であったかも知れない。

昭和四十年、わたくしは福岡県議会議員に立候補して、激戦の末当選できた。この当選はわたくしを支持して下さった皆さまのおかげであったことは言うまでもないが、とくに講（隣組）の人たちの蔭の力に負うものが大きかった。

選挙は、まず近隣の人たちの燃えるような支持が原動力となることが最も大切である。その火が「区」に燃え移り、さらに「校区」から「町」へ、そして「郡」の他町村へと延びてゆき、燎原の火となって戦いを展開するということになる。その原動力になる「講の者たちを日頃から大事にする」ことが、いかに大切なことであるかを、わたくしは身をもって体験した。おか

げで、六期県会議員をつとめ、社会のために働かせて頂いた。

囲碁に「隅(すみ)をとる」という言葉がある。わたくしは囲碁はしないが、これが囲碁の原点らしい。いかに碁面の広い中央で争っても、隅を堅めておかないと、戦いには勝てないと聞く。この「隅」が「講」なのではないか。

わたくしは、なにか事を起す場合、そして仕事の上でなにかを推進してゆく場合、「講の者を大事にせよ」＝「身近な人たちを日頃から大事にせよ」という、わたくしが三十一歳のとき、五十七歳で亡くなった父の言葉を思い起すのである。

村谷正隆　大正9年5月生　福岡県出身
▽昭和18年旧制九州大学法文学部経済学科卒業、海軍主計科短現　▽終戦後九州電力に勤務
▽40年より福岡県議会議員（六期）
▽48年より㈱ニシラク社長、現在に至る
▽著書『水軍史の女性たち』『村上水軍史考―九州の視座から』『海賊史の旅―村上水軍盛衰記』
〈好きな言葉〉「一灯を提げて闇夜をゆく、闇夜を憂うることなかれ、只一灯を頼め」（佐藤一斎）

ことばと心——人を育てるもの

安武満榮

ひとつのことばでけんかして
ひとつのことばで仲なおり
ひとつのことばで泣かされて
ひとつのことばで幸わせに
ひとつのことばはそれぞれに
ひとつの心をもっている

遠山あき氏の作と聞くこの詩は、ことばの不思議さ、大切さを語りかけています。

昭和五十年代の教育界は「荒れる中学生」が流行語になったように、全国の高校、中学校はどこも生徒指導に苦悩していました。そんな昭和五十六年、市教育委員会勤務から四年ぶり学校現場に帰った私に、中学生の会話、ことばの乱れは驚きそのものでした。意思疎通が全くできず、特に問題的傾向をもつ生徒との会話は、まるでバベルの塔にでもいるような思いでした。言っていることは自己中心的で幼稚、しかも語彙が貧弱で小学校の低学年並み。敬語など無頓着、特に女生徒のことばは男と境界なしというありさま。まさに、ことばの乱れは生活の乱れ、ことばの貧困は思想の貧困、ことばの欠如は倫理性の欠如を鏡に映しているようでした。

こうした現場で、国語科担当教師による作文教育の取り組みが始まったのは、それから間もなくのことでした。ことばを豊かにし、考えを確かにし、豊かな情緒を育くむ一念でした。

私どもは、時に町角の本屋で立ち読みした文章の一節が、人さまから言われた一語が、その人の生涯の規範となることがあります。ことばの不思議な力です。私にも「二十代で学級経営を、三十代で学年経営を、四十代で学校経営を、五十代で日本の教育を語れ」と諭した恩師のことば。「先生には三つのタイプがある。自分の権利のみを主張する人を教員といい、日々是好日と、日々の実践を営む人を教師という。子供の生涯に忘れ得ぬ人として心に残り、その子に生きる勇気を与える先生を教育者という」と言った先輩のことば。「平常心これ道なり」の道元のことばが、教師生活四十年を支え、励ましてくれました。

これからも、ことばが人を育てることを肝に銘じて、道に励みたいと考えています。

安　武　満　榮　昭和4年1月生　福岡県出身
▽昭和23年福岡第二師範女子部本科卒、公立中学校教員、57年より63年まで北九州市立大蔵中学校校長、63年退職
▽現在学校法人昴学園九州情報通信専門学校商業系主任
〈好きな言葉〉「平常心これ道なり」

因果律とは

山下　真理恵

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を顕す」。平家物語の始めの言葉が何故か私はたまらなく好きなのです。ふとした縁で長い間、ラジオの人生相談を担当したことからでしょうか。人間の一生は、長編ドラマと思うのです。

誕生からこの世にピリオドを打つまでの数十年間に色々の出会いや別れ、また喜劇や悲劇を繰返しながら、見事に主人公を演じています。折角一度しかない人生劇場に出演するのですから、なるべく良い役を貰って、幸せなストーリーをと願うのですが、運命は自分の意志通りにはなってくれません。一体、誰がこの筋書きを作ったものなのでしょう。神様が気まぐれに脚本をお書きになったのでしょうか。「禍福はあざなえる縄の如し」とか、「人間万事塞翁が馬」とか色々の諺にもあるように、私共の人生には魔訶不思議な因果律という「おきて」または「しくみ」が厳然と睨みをきかしてるようです。逃げもかくれも出来ない因果応報。人の行為の善悪が廻り廻って、結局は自分に還ってくる善因善果、悪因悪果。観測不可能な前世の業想念の精算の部分の輪廻転生説で、或る程度その人の宿命は定められてはいるものの、必ず修正出来る余地が残されているはずです。例えば、前世の因縁で現世では交通事故で死ぬことが決まっている人でも、運命修正力が強く働けば、軽い怪我ですませることが出来るでしょう。私

は運命の軌道修正には二つの方法があると信じます。

一つは正しい信仰によって自分の心を浄め守護の神霊の加護を心から念じ感謝すること。

もう一つは大自然の波動の法則を利用して心身を調整し運命改善をはかる気との調和です。具体的にはチャンスをつかむ（天の時）、吉凶動より生ず吉方移動（地の利）、袖振り合うも他生の縁（人の和）、これは中国四千年の歴史の中で磨きぬかれ実証されて来た理論です。「気学」に限り無い興味を持ち始め、まるで「気学」の宣伝販売普及員のようにあちら、こちら、と叫び続けています。

「〝因果律〟の効力を最大限に利用させて頂き、今から善因を作ることに心がけて自分の人生ドラマのストーリーを楽しく書き換えようではありませんか」と。

山下　真理恵　昭和3年10月生　福岡市出身
▽昭和23年福岡県立福岡女子専門学校（現・福岡女子大学）家政科卒業
▽ぷりんせす洋装店開業、現在に至る
▽福岡、北九州、下関、各朝日カルチャーセンター、NHK文化センターにて気学講師
▽RKBラジオ、KBCラジオパーソナリティ
▽国際ソロプチミスト会員
▽著書『幸せのパスポート』『気学ゼミナール』

大いなる神の存在を知れ

山本　敬一郎

私がまだ二十代の頃、東京で在勤中、当時の東京大学学長矢内原忠雄先生の自由ヶ丘での聖書講読に通ったことがある。その時のお話の中で今もなお鮮かに記憶している言葉がある。

「科学は物質文明を発達させて、遂に原子力を発見して、大量殺戮すら犯してしまったけれど、人間の魂の救いになる神の問題は、キリストや佛陀やマホメッドの域を未だに超えていない」

私は先生の講義に心を洗われながら、在京の間、自由ヶ丘に通い続けた。その後、年経るにつれ、仕事が忙しくなるにつれて、何時の間にか信仰の道から遠ざかっていったが、齢六十の半ばを過ぎた今、人生をふり返ってみる時、若い日の信仰が生きる支えになっていたことを思い知らされる。

人の一生には、生涯を決定づける転機がおとずれることがある。私にもこれまでに二度転機があった。その第一回は従業員組合の委員長になったことである。私は在任中に闘争的な上部団体を脱退して、労使協調路線を選択する決意をしたことがあるが、この時大げさなことであるが、多くの従業員の将来を双肩に担ったと感じた。私はこの決意が間違いでないことを、ひたすら神に祈った。

第二回目は、今が人生の上昇期だなぁと充実感を覚えながら仕事をしている真最中に、再建

のために当行に派遣を命ぜられ、挫折感に喘ぎながら、それでも一生懸命、誠心誠意再建に努力した甲斐あって、現在の結果を与えられ、新本店の新築も完成することができた。私は私に示された大いなる神の意志を知ることができる。

若い人に伝えたいことは、物質文明の豊かさにのみ眩惑されないで、「若い日に大いなる神の存在を知りなさい」ということである。

人生は照る日ばかりではない。私は岐路に立った時、努力が予期した結果を得ない時、無力感を味わう時、祈ることで心を慰さめ、再び活路を見出したように思う。

今後さらに物質文明は発達し、人々はさらに財と豊かさを求めて流されてゆくであろう。けれども人の終極のより所は「心の問題」、「神の問題」であるということを、人々に説くことはおこがましいけれども、この本をかりて、或はまた、近親者には残しておきたいと思っている。

山本　敬一郎　大正11年9月生　北九州市出身
▽昭和23年九州大学法文学部卒、福岡銀行に入行、長崎支店長、審査部長
▽46年正金相互銀行（現福岡中央銀行）専務取締役、58年同行社長、平成元年福岡中央銀行頭取

商人としての旅立ち

山本隆造

北九州市小倉北区中島町の商家の長男として生を受けた。商家とはいえ、親爺が生業として細々とした日用雑貨の小売並びに卸しを行っていた。家族九人の大家族で、父一人の細腕では喰うのが一生懸命であった。昭和二十九年春高校を卒業。長男であるとの宿命に、嫌いな商人の道を歩みはじめた。

兄弟七人、三歳下に弟がいたので、彼が卒業し家業を継ぐまで父の手伝いをし、その後は、別の道を歩む心づもりであった。友人とブラジル移民を夢見たのもこの頃であった。また、公認会計士になるべく福岡大学で第一次試験を受け見事に失敗もした。

昭和三十一年頃であったと記憶する。父の友人の誘いで、直方商工会議所主催の商業界編集長・岡田徹先生の講演を聴きに行った。演題は「商人の理念」であった。その当時は、インフレの最中、消費者は生活防衛のために、生活協同組合をつくり、企業は社員の生活防衛のため、厚生会（新日鉄）、購買会（国鉄）をつくり、品物を安く提供するようになっていた。その当時は定価販売があたり前であったが、先の団体は二〇％～三〇％安く販売していた。そのため小売商はその対策に頭を痛めていた時代であった。

岡田先生は、まずこの状況を指摘され、何故このような団体が出来るのか、と私共へ投げか

けられた。そして「それはお客さまが、商人に不信をいだいているからだ」と解明された。商人が自己の儲けのみを考えて商いをしているからだと。そして商店は誰のためにあるのか、商人とは……延々三時間余熱っぽく、ある時は大声で、ある時は涙を流しながら私共に訴えられた。

商店はお客様のためにあり、商人はお客に満足をお届けする生業だ、と正しい商人道を説かれた。そして最後に「正しくて滅びるものあれば滅びてよし、断じて滅びず」と降壇された。

私は目のうろこが取れた思いであった。商人とは何とすばらしい職業だ。男一生、命を賭けるに値する職業であることを知った。

その年の暮れ、岡田先生は急逝された。すばらしい商人道への教えをいただき、唯々有難く感謝するのみである。　合掌

山本隆造　昭和10年10月生　北九州市出身
▽昭和29年小倉高校商業科卒、ヱビス屋入店、38年大平紙業㈱に社名並組織変更専務に就任、58年代表取締役社長就任、現在に至る

失敗を恐れるな

百合野　保　文

私は、大正十五年生まれで、昭和の激動の時代を生きてまいりました。終戦直後に大学を卒業して以来、戦後の混乱期を振り出しに、高度成長期を経て、安定成長期の今日まで、先代の社長と共に企業の先頭を走ってまいりました。

その間、戦後の混乱期から今日まで青果市場を成長、発展させるために販売努力をすると同時に、他の青果市場と合併し、その営業業務を我社と一体化させ、より大きな企業合同体としなければなりませんでした。今、流行の言葉で言えば「M＆A」となりますが、そのためには、関係先との根回しなど用意周到な準備が必要なのは当然ですが、最後に企業のトップとして、失敗を恐れず、信念に従って慎重にかつ大胆に決断を下さなければなりませんでした。

一方、昭和四十年代前半、まだまだ海外旅行が一般的でなかった頃、バナナを初め青果物の輸出入商談のため東南アジア各国を度々訪れました。今でこそ若い女性でも気軽に海外に行かれますが、その当時はビザを取得するのでさえ東京の大使館へ出向かねばならず、しかも、旅行代理店による便利なサービスもあまりなく、全て独力でせねばなりませんでした。

その外国では、英語教育をあまり受けていない私にとっては、毎日が失敗の連続でした。しかし、英語は喋れなくても、ホテルを出てタクシーに乗らなければなりませんし、外国人相手

に商売もしなければなりません。即ち、無から有を生まなければならない状況だったのです。当然、こちらは真剣で、失敗をしてもそれを恥じず、逆に失敗を教訓として少しずつ経験を重ね、最後に大きな成果をあげられたのだと思っております。

失敗を恐れてはいけません。最後の決断の時には、出来る限りの準備をし、自信を持って決断を下せば良いのです。

失敗は、それを繰り返さなければ、成果に導くために必要な貴重な経験となります。その失敗を恐れていたのでは何も達成出来ません。失敗を恐れず、何かをする人間になりましょう。

百合野　保　文　大正15年8月生　福岡県出身
▽昭和25年東京農業大学農学部卒、北九州青果株式会社入社、39年取締役、54年代表取締役社長就任、現在に至る
▽丸北産業㈱取締役社長、関門九州バナナセンター協理事長、北九州信用組合理事、㈳全国中央市場青果卸売協会理事、㈳日本青果物輸入安全推進協会副会長理事

言葉は両刃の剣

吉田和彦

世の中は、出会いと別れの繰り返しであるが、喜怒哀楽の人生を、明るく楽しく、そして有意義に生きていくためには、日常の心得が必要である。

複雑な人間関係を明るく楽しいものにするために最も大切なことは、常に相手の立場になって物事を考え、思いやりの心をもって人に接する平素の心がけではないでしょうか。

対話の中で、軽い気持で言った一言が、相手の胸にグサリと突き刺さり、相手の心をひどく傷つけることがあるが、発言した本人は相手が大きな心の痛手と、強いショックを受けていることに気付かないことが多い。

相手の立場や人格を無視した失礼な言葉は、相手の気持を暗くさせ、反発心や根強い恨みをうける結果となる。

逆に、仕事や対人関係、家庭問題等で悩んだり苦しんだりしている時に受けた心からの励ましや暖かい慰めの言葉は、人に生きる勇気とやる気を起こさせ、人生を明るくする。

人を生かすも殺すも言葉であり、正とも邪ともなる言葉は両刃の剣である。言葉のもつ素晴らしさと恐ろしさとをしっかりと胸に刻んで、誠意と思いやりのある明るい言葉遣いを心掛けなければならない。

「心に愛がなければ、どんなに美しい言葉も相手の胸にひびかない」（聖パウロ）

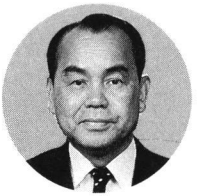
「可愛くば五つ教えて三つほめ、二つ叱って、良き人とせよ」（二宮尊徳）

昭和十九年、私が小倉補給廠で、学徒勤労動員中の出来事である。大竹少尉の指揮下で補給業務の仕事をしていたが、学徒から非常に尊敬されていた少尉が転任することになり、その送別会の席上残した言葉が、四十数年経過した今でもハッキリと耳に残っている。

「男になれ!!　でっかい男になれ!!」

東北生れの血気盛んな青年将校が、涙を流しながら心をこめて若き学徒に贈った力強い感動の言葉であった。

美辞麗句を連ねても、愛情のない言葉は相手の心を動かすことはできないが、訥弁（とつべん）であっても、誠実な人柄と、心のこもった話し方は、聞く人の心を動かし、深い感銘を与える。



吉田和彦　昭和3年12月生　福岡県出身
▽昭和31年山十合名会社入社、38年同社代表社員
▽40年山十株式会社代表取締役
▽現在同社取締役会長
▽全国板硝子卸商協同組合連合会評議員
＜好きな言葉＞「朝は希望に起き、昼は努力に生き、夜は感謝と反省に眠る」

思いやりの心と文化的視野

吉田一芳

経済大国となった今日の日本では、万事マネーによって解決されるものが多い。しかし、人の信望を集める「人格」は決してお金では買えない。

孔子は「仁」即ち思いやり、「信」即ち人間は嘘を言ってはならないと説かれた。この教えから培われたものが、信望ある人格者を作り上げる。

私事で恐縮であるが、私は信用金庫の理事長を二十五年、会長を四年という長期にわたり、責任ある仕事を大過なく今日まで勤めさせて頂いている。これは偏に取引先の方々をはじめ、市民の皆様の信頼の賜にほかならない。

この見えざる力こそ「仁」「信」という実践の積み重ねと信じている。

菜根譚に「足(たる)を知り分に安ず」とある。

また、現代はまさに国際化時代である。国際的に広く交流の場を持つ時代となった今こそ、日本の本当の姿を知らなければ、それこそお座なりの国際人となるであろう。そのためにも先ず日本の歴史や文化をもう一度見つめ直すことが大切である。

特に日本の規則正しい四季の移り変りが育てた、誇り得る我が国の文化の良さを体得することによって、心の豊かさを持ち、文化人としての教養を高めたいものである。

私はあの忌わしい戦争の体験者である。六年間戦場にあって弾雨の洗礼を受け、命の尊さ、平和の尊さを身を以て知っている人間である。二度とあのような忌わしいことが起こらないよう、真の国際人として、世界の平和のために大きく羽ばたいていきたいものである。

吉田一芳　明治45年1月生　福岡県出身
▽昭和4年旧制東筑中学卒業、八幡信用組合入社、福岡県庁勤務、応召
▽現在北九州八幡信用金庫会長、全国信用金庫協会副会長、北九州文化連盟会長、俳人協会会員
▽著書　句集『菖蒲』随筆『せんだんの花』
〈好きな言葉〉「足を知る」

価値観と良識

吉田敬一

ＮＨＫの大河ドラマ『翔ぶが如く』を熱心に見ています。西郷にしろ大久保にしろ、若さに似合わず、維新の大事業を成しとげる様子は驚嘆というほかはありません。適確な判断と行動、ドラマと言ってしまえばそれまでですが、世界の情勢も現在のようには摑めない時代にあって、日本の国を誤らせなかったことは大変なことです。

西郷には斉彬がいたし、大久保には西郷がいました。また飄々として大局を眺める坂本龍馬もいました。諸外国が虎視眈々と我が国を狙っている中で、独立を守り近代国家日本が生まれたことは、彼らの力に負うところが大きいと思います。とはいえ、良きリーダー、相談相手に恵まれた彼らでも、多分先輩の武士達に「今時の若いものは」と言われていたに違いありません。特に思いきった世の中の改革に取組むのですから、単なる批判では済まず、力による妨害もありました。しかし「今時の若いもの」はなんと素晴らしいことを成しとげたものでしょう。

変化の甚だしい現在の一面を表現して、価値観の多様化としていますが、ここに我々が考えなければならない問題点があるような気がします。私が考えるのは、いかに多様な価値観があるにしても、人間としての存在を価値あらしめるものを根底に据えなければ、それは一片の独善、あるいはうたかたにしか過ぎないということです。

東欧の社会主義各国が危機に遭遇しています。リードして来た主義の価値観が独善的で、かつ人間性を忘れた閉鎖社会の悲劇だと思います。いま人間の顔を取戻すのに一生懸命です。

一方自由社会では、個人の尊厳が限り無く高まりつつあります。誠に喜ばしいことですが、個々の価値観が戦車のように走り回るのも恐ろしい気がします。この辺りが難しいところですが、人間が長年にわたって養ってきた「良識」を信頼するのが一番だと信じています。

世界を旅すると大勢の若者に遭遇します。我々の若い頃に比べ羨ましい限りです。彼らはいまそこに在ることに価値を見出し、潑剌と過ごしています。これからの舞台は世界です。大勢は「良識」が支配する。我々が心配することは何も無いのかもしれません。若者には思った通り、伸び伸びと行動して欲しいと思います。

失敗はこれからの糧にすればいいんです。我々もそうして来たような気がします。

吉田敬一　昭和2年2月生　福岡県出身
▽昭和25年九州大学工学部卒、国鉄入社、56年常務理事・九州総局長
▽現在九州キヨスク株式会社代表取締役社長
〈好きな言葉〉「自然・悠然・偶然」

成せばなる

吉原謹三

「成せばなる、成さねば成らぬ何事も……」という文言をどなたもご存知のことと思う。これが会社の秘書役にちょうど当て嵌まる言葉ではないだろうか。会社内で通常行われている秘書役の仕事では、誰もが少々努力をすれば不可能という仕事はないと私は考えている。その「少々」には人それぞれ違いはあるものの、努力をしなければならないことには違いはない。

会社の中の数少ない秘書課員として多くの人が勤務する訳にはいかないが、出来ることなら誰もがその職場を経験出来ればと願っている。私はそういった職場に遭遇出来たチャンスとそのように育てられた好運に今感謝している。

それは若い頃秘書係を六年ほど短い期間ではあったが勤務したことがある。その間、仕事を言い付けられて「判りません」「知りません」「出来ません」という返事を一度も申し上げたことがないと記憶している。如何なる仕事もこれを成し遂げて来た。考えてみれば、ごく当り前のことかも知れない。しかしその中にあってこれを無事全うすることは、苦労を必要とし、大変な職場であったが、自分自身にとって得難い経験となり、生涯の仕事に対する自信につながり、私が現在あるのもそのお陰と考えている。

秘書の仕事とは、単に役員の雑用係では決してない。それは各役員に、会社にあっては経営

に専念してもらい、その他の諸々の用事には気を遣わせないように側面から補う役目が秘書の仕事であって、これこそ重要な仕事の一部を担っているものと考える。そこで秘書役が先ほど申し上げた三つの返事「判りません・知りません・出来ません」をしないようにするには、まず会社の動き・各役員の動き・関係ある外部の動きは予め前もってほぼ予想をつけて、自分なりに広い範囲に気を配って調べておくこと。次に今起っていること、経過した出来事など知ろうとする気があれば何でも知ることが出来ること。最後に各役員から頼まれた仕事位何でも出来るという自信があれば、何事も可能にしてしまうことなどを実行すれば、秘書役として勤めることが出来る筈である。ただこのように自分が出来たからと言って人にそれを強要してはならない。その気になって、また意図する処を熟知してもらって、自らを育ててもらえる若者が出て来て欲しいと念願する次第である。

吉原謹三　昭和6年2月生　唐津市出身
▽昭和30年佐賀大学文理学部卒、三井倉庫株式会社入社、51年3月三井倉庫株式会社九州支店長、現在に至る

運命を分けた項羽と劉邦

吉村喜好

秦の始皇帝が亡きあと天下を争った項羽と劉邦のパーソナリティがよく比較される。その一つが始皇帝の華麗な行列を、亡命中の伯父と呉で見た項羽は「あいつにとって代わってやる！」と叫び、始皇帝の都・咸陽で賦役をしていた劉邦は「男たるもの、あんなふうになりたいものじゃ」とつぶやいたという話である。このエピソードは、自信過剰の項羽と流れを自然に受けとめる劉邦の性格をよく示している。

天下分け目の戦いで劉邦軍の韓信に囲まれ、「四面楚歌」に命運尽きた項羽は、強行突破を図るため愛馬騅を引かせ「わが力　山を抜き　わが意気　世を蓋えども　時　われに利あらず　わが騅　逝まず　騅の逝まざるを奈何すべき　虞よ　虞よ　若を奈何せん」と詩ったという。項羽は、滅亡を目前にしてなお自らの力不足を認めず、天の意、時の運のせいにした。

これに対し劉邦は、項羽を撃ち天下を平定した祝勝の宴で「軍略では自分は張良にかなわない。内政では蕭何ほどうまくやれない。そして実際の戦いでは韓信に及びもせぬ。項羽と自分の違いは人を用いることに優れていたかどうかで、これが天下取りの分かれ目だったのじゃ」と語ったという。

実際に劉邦は諸葛孔明にも劣らない名軍師張良には一切さからわず、彼の言いなりに動いた。

それに引きかえ、楚の将軍の血筋に生まれた項羽は少年時代から「文字は姓名を書ければ十分」と言って学問に励まず、「剣は人一人しか倒せないからつまらない。おれは万人の敵を相手にする術を学びたい」と言って自己主張を通した。天下分け目の戦いを前に名軍師范増をも切った。優れた才能を持ちながら志を遂げ得なかった項羽の悲劇は自己過信にあったと言えよう。

人それぞれの長所と短所を持っている。信長は秀吉にはなれないし、秀吉が家康にもなれない。劉邦に天下取りをさせた張良は、兵乱が治まり、劉邦が漢の高祖になると、役目は終わった、とあっさり引退して余生を静かに全うした。戦乱の歴史は己の分を知る者と自分の力を過信する者、功を己のものとする者と将兵のものとする者の明暗を鮮やかに分けている。

吉村喜好　大正12年1月生　福岡県出身
▽昭和26年旧制九州大学文学部卒、九州大学教育学部助手
▽30年長崎大学学芸学部勤務
▽現在長崎大学名誉教授、長崎外語短期大学教授

適者生存の法則

吉村慶元

四十六億年前、太陽に渦巻が起り、九つの惑星が生じた。その一つが、今日生物の棲息する唯一の惑星「地球」である。三十五億年前地球としての形を整えたが、初めての原始生物「藻」が発生、その後次々と進化した生物が創られ、二十万年前、現代人類「ホモサピエンス」が創生した。しかも人類は、他の動物に見られぬ大脳新皮質を有し、そのため文化・芸術・宗教・哲学を解する能力、進化向上の能力を持ったと教わった。また、人類が世に生まれた目的は、宇宙の法則、自然の原則に順応し、人類以外の生物を管理、統治することとも教わった。従って我々人類が目的を果たすためには、統治者と成り得るため絶えず進化向上を図ることであり、事実五千年前から、高邁な精神で文明、文化を発達させてきた人類の歴史がある。

天地、自然が何億年もかけ植物、動物を創り、そして最後に人類を創り、自然の「絶対愛」の法則をその人類を通じて示しているが、また一方、我々の祖先が二十万年もかけ、今日やっと人間らしく進化向上せしめたにも関わらず、自然の摂理に反し、自己の権利のみ求め過ぎ、心の荒廃・社会の混乱、挙句の人類同士の殺し合いを繰り返している。「敬せずんば何をもってか別たんや」（論語）は、理想に向って絶えず進歩向上しようとするとき、「敬」の心が湧き、従って偉大なもの、尊きもの、高いものを仰ぎ、それを感じ、憧れ、近づこうとしなければ単

なる動物と変わらないと教えている。また、「変化に富み、絶えず刺激を与える環境は、人間の発達を促進させ、刺激なく、あまりにも居心地よい環境では文化的発展なく、停止、静止してしまう」（トインビー）。地球上に出現した人類は厳しい環境下に在っての鍛練・訓練で進化向上を遂げ、適応能力を身につけ、長い年月を順応してきた。進化向上のない人間は、この地球上から滅び去ると教えている。まさに自然の原則は「適者生存の法則」でもある。

戦後、人間はテクノロジーの面で驚異的進歩発展を成し遂げた。また、教育は「個人尊重・人間尊重」に重点をおき、最も大切な「人間とはなんぞや」は教えていない。人間尊重以前の「人間は何をなすべきか」の倫理を教わらなければ、ハイテクノロジーを行使しての人類同士の殺し合いの愚をまたもや繰返すことになる。今頃になって、やっと絶対愛の法則＝適者生存の法則を学んだ昭和ヒトケタ「オジン」の悲哀である。

吉村慶一元　昭和6年3月生　大分県出身
▽昭和29年京都薬科大学卒、小倉薬品㈱入社、37年取締役、53年コーヤク㈱と商号変更、54年副社長、56年社長
＜好きな言葉＞「事に無心、心に無事」

楽に生きよう

渡辺守将

楽に生きていくためには、どうすれば良いか――私の人生哲学である。

私は幼いころ体が弱く、二度死にかけた。加えて吃り癖があり、夏休みには何度か吃音矯正院に通った。この二つの苦しみは、私を絶えず悩ませた。この苦しみから逃れる術はないものかと思うようになり、まず健康な体づくりのため、旧制中学に入るとすぐ体操部に入部、大学卒業まで続けた。お陰で今は健康そのもの。

吃りの方は大学卒業後も続いた。家業の合資会社渡辺印刷所に入社し、営業に配属されたが、得意先回りが吃りのためままならず、恥ずかしさと苦しさから死にたいとさえ思ったこともあった。その時、吃音矯正院では普通に話せたことを思い出した。外に出ると何故吃るのか。人と対した時、必要以上に緊張する自分に気付く。それからは、いろんな会に入り、入会挨拶や自己紹介など、積極的に話すことを自らに義務づけた。最初は大変な苦痛だったが、次第に自信がつき、いつの間にか吃らなくなった。今では私が以前、ひどい吃だったと言っても信用する人はいない。

私は、この二つの経験から、一つは物事を進めるには少しずつ時間をかけ、継続すること。二つ目は自分の好きな方法を見つけること。三つ目は楽になるように工夫すること――この三

原則で、家庭生活はもちろん、社会生活に臨んでいる。

一例だが、私は五十九歳になったら標高約五、九〇〇米のキリマンジャロに登ることにしている。五年前、門司カソリック教会のガイヤール神父に誘われ、戸の上山（五〇八米）でご来光を迎えた。過去十数年のジョギングで体力に自信はあったが、七、八合目で顎が出そうになった。下山の途中、登山を楽にする方法を考えた末、登山にむいた体づくりをすれば良いという結論になった。さっそくアスレチッククラブに入り、トレーニングを続けるかたわら、九州から四国、中部山岳と、毎年少しずつ高度を上げて登った。自分で「エイジ登山」と名付けたキリマンジャロ登山は私の人生の一つの節目でもある。

レジャーを例にしたが、私はまた、公私にわたって計画を公表し、自分の行動を方向付けている。もちろん〝三原則〟のヴァリエーションの一つである。

渡辺守将　昭和8年1月生　福岡県出身
▽昭和30年早稲田大学商学部卒、合資会社渡辺印刷所入社、46年株式会社ワタナベプリンティングセンター設立後合資会社渡辺印刷所を併合、同社副社長に就任、52年社長就任
▽現在北九州商工会議所議員・北九州印刷工業協同組合理事長・門司ロータリー会長
〈好きな言葉〉「汝己を愛するが如く隣人を愛せよ」

あとがき

本書刊行に当たり、山下敏明福岡商工会議所会頭、安川寛北九州商工会議所会頭をはじめ、ご寄稿賜わりました皆様に絶大なご協力をいただきましたことを心から感謝申し上げます。

激動の九十年代を迎え、経済的豊かさの中で私達の心が問われ、特に次世代を担う若人達の健全な成長が求められております。

皆様方からお寄せいただきました貴重な処世訓、人生訓が青少年の心の灯としてお役に立てばと願い、併せて弊社創立以来の社会の鴻恩に対する感謝をこめて本書を刊行させていただきました。

なお表紙は、西島伊三雄画伯のご協力をいただきました。

本書作成に当たり、紙面の都合上、原稿の一部を割愛、整理。他方、原稿を尊重して旧漢字、仮名づかいも併用させていただきましたことをおことわり申し上げますとともに、編集は加治屋知暁氏のご協力を得ましたことを申し添えお礼の言葉といたします。

創立四十五周年記念誌編纂委員会　後藤泰久
松中宣夫

伝えたいこと　非売品

平成三年二月二十五日　発行

編　者　創立45周年記念誌
編　纂　委　員　会

編集人　加治屋　知　暁

発行人　髙　藤　昌　和

発行所　髙藤建設株式会社
〒800 北九州市門司区東新町一－一－三〇

印刷　瞬報社写真印刷